消えた王妃と白銀の騎士

arco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
消えた王妃と白銀の騎士

【Ｎコード】
Ｎ５４４５Ｚ

【作者名】
ａｒｃｏ

【あらすじ】
よくある異世界トリップもののその後の話です。元の世界へ帰った女子高生本人は出てこず、残された異世界の住人たちの間で話は進みます。
子供の頃から良く知る国王に呼び出された主人公の女性騎士はとんでもない頼みごとをされる。「異世界へ行く自分の代わりに王となってほしい」と。
国王の元婚約者である姉とその夫の騎士団長や侍女を巻き込んで、突然の災難に振り回されるしか能のない主人公の明日はどっちだ！

恋愛色皆無の第一部、微・恋愛色の第二部まで完結しております。

初小説・初投稿です。

生あたたかい眼でみていただけることを切に願います。

国王の乱心（前書き）

生ぬるい表現しかできませんので、タグは念のためです。
固有名詞は音楽用語ですが、音楽は一切関係ありません。出てきません。あしからず。

国王の乱心

1. 国王の乱心

幼いころからの付き合いで、気心の知れた人だと思っていた。

もちろん、相手との身分の差はよくわきまえていたし、何より忠誠を誓った主君であるのだから対等な関係ではない。だが、幼友達としてあちらからも親しくしてくれていたのでその思いは一方通行ではなかったはずだ。子供時代が終わるとソナチネの彼への気持ちは敬愛と、何より畏怖へと変わったが。

今、目の前で地面に膝をつき、肩を落とした背中を見ているとよく見知っているはずだという自負は急速に消えていき、一体どうすればいいのか見当もつかない。まさか彼と自分との間にはこんなにも深い――遠国にあるという神話の時代に神々によって作られた大地の大裂け目ほどの溝があるとは知らなかった。

ソナチネが立つのは、王室の私的な領域であるブリッランテ宮一王族が生活するための宮殿一の中でも隅の隅、野趣あふれる草花が自然のままに伸びたという風情の素朴な庭園であり、目の前の彼、ペザンテ王国の国王・アレグロが過ごすには少々寂しすぎる風景だ。同じ宮殿の庭でも南にあるグランディオーソ庭園は宮殿という言葉にふさわしく、幾何学模様に整えられた生垣と薔薇やカトレアなど美しい花々によって華やかに彩られているのだから。

国王アレグロは見た目だけを語っても完璧という言葉でしか表せない。青年神のような美しい顔立ち、目は空のような澄んだ水色、黄

金に輝く髪はゆるやかにうねり、肩口のあたりで切り整えてその麗しい顔を飾っている。背は高く、均整のとれた体にはほどよく筋肉がつき、とまあ簡単にいうと、世の乙女の理想と妄想をこれでもかと詰め込んでみました☆という容姿だ。

人柄も（これまでソナチネが知るところでは）国王として何よりも国民を労わる慈悲深い政治を心がけ、また不正を行った官吏や貴族には厳しく対処することでも知られておりそういった相手と対峙するときのアレグロはまさに鬼神のごとき迫力を発揮していた。それでいて誠意を持って仕える者にはその温厚なまなざしと言葉でねぎらうことも忘れない。だからこそソナチネはそんな彼を人としても国王としても尊敬してやまなかった。

だが、彼が跪いているかの人のために建てられたという碑と、あの、彼女の飾らない率直な人柄のことを考えるとやはりここがふさわしいのかもしれない。今はもういない、彼女を偲ぶには。

彼女が彼のそばから消えて三月ほど経った。彼女はソナチネにとっても友達一畏れ多いことだが彼女のたっての願いでそう呼ぶ一であったので偲ぶ思い出はたくさんある。その思い出を分かち合うことが自分にできること、と思い定めこの極秘の護衛任務の最初の一日目を臨んだものだ。

なのに――

今日も聴きたくない声が、言葉の羅列が聞こえる。できれば耳をふさぎたいが、建前上、ソナチネは彼の護衛なのでそんなことはできない。

「覚えているだろう？コトネの声を。聴いているだけで心が震えるあの声…妖精のささやき声とはあのようなものをいうのだろうな。

コトネが何かねだったら全てきいてやらなきゃといやむしろ叶うべきだと思ったよ。おねだりなんて滅多になかったが」

「どうして彼女の手を放していられたんだろう。一瞬でも放さずに四六時中手を繋いでいたら今も彼女はここにいたかもしれないのに…。手といえば彼女の手は美しかった。コトネは楽器を演奏するため手を大事にしていたと言っていたな。あの白くほっそりとした手を与えられた私は世界一の幸福も手に入れていたんだ…」

「コトネのあの艶やかな魅惑の黒髪をナデナデすると私の心のどこかが温かくなるんだ。あの感覚、それまではそんなものがあることすら知らなかった…。コトネは私の知らない扉を開けてくれたんだ。忘れられない…」

こういった思い出話?妄想?（もしくは呪い）を護衛という役目で傍を離れることを許されず、ただひたすら垂れ流されるソレを強制的に延々と聞かされるようになって二月半が経った。国王陛下は政務で忙しいので相手をするのは夕暮れ前の一時間ほどだが、それは日課のように毎日のこととなっている。ただの思い出話としてきくにはあまりにも…甘いというか、重いというか、気色悪いというか。彼女本人がきけばもしかしたら気持ちが盛り上がるのかもしれないが第三者の立場で聞かされるのは非常に居心地が悪くむず痒い。聞き流せればいいのだが、時々返事を求めてきやがるのだコレは。

これまでソナチネが抱いていた彼への敬愛や畏怖、憧憬は最初の半月が経過したころには雲散霧消した。同じ言葉を繰り返しているだけなら（それはそれで精神の異常を疑ったかもしれないが）耐えられたかもしれない。だが彼が彼女思う言葉は尽きることがないらしく毎日違うセリフがその麗しい口から飛び出してくるのだ。今では、

消えてなくなった敬愛ではなく役目への義務感のみがソナチネをこの場に踏み止まらせている。

ナデナデのくだりで全身を虫が這うような感覚に襲われたソナチネはそのまま扉の向こうに行ってしまえばいいのに戻って来なければいいのに、と本気で祈った。

黒い気持ちに覆われた一瞬ののち、それまでの忠誠心をなんとか思い出し、恥じた。

忠誠心の方を。

ソナチネはペザンテ王国の第一王国騎士団に、いまは五名所属している女性騎士の一人である。当時の王太子の、現在の国王陛下の幼友達として選ばれるくらいなので彼女自身も生まれは由緒正しい貴族だ。ついでに二歳上の姉は目の前のへたｒ一違った国王陛下一の元婚約者だ。

そんな立場のソナチネが騎士となるまでにはいろいろと紆余曲折があったのだが、彼女がこの道を志したその理由は、敬愛する（今は残念なことになっている）国王陛下に剣をもって仕えたいと願ったためだ。そのはずだった。

「――というのはどうだろうか？」

いつしか己の分を忘れ、この背中を蹴り倒してしまいたい、という内なる切望と戦っていたので、その背中から久しぶりに自分へと言葉がかけられたことに、ソナチネは一瞬気がつかなかった。

護衛についているのはソナチネ一人ではないが、ほかの人員は彼が人払いをしているので、少し離れたこちらからは目に付かないところにいる。だから今の言葉もソナチネ一人しか聞ける範囲おらず、当のソナチネも聞いていなかった。無礼を承知で聞き返すほかない。

「恐れながら、陛下。もう一度おっしゃっていただけますか？」

いつのまにやら彼は、膝をついたまま振り返ってこちらを見ていた。

「すぐには承服できないのはわかる。だがこれしかないのだ――嘘でも冗談でもなく私の心の底からの願いだ。私は真剣だ、頼む、受けてくれ。」

ソナチネが話をきいていなかったため聞き返したことがわかっていないのか、アレグロは自分の命令？申し出？が受け入れられなかったと勘違いし、きちんとこちらに向き直り真剣な顔で懇願している。今にも手をつかんばかりに。

いくら主君の願いでも、真剣に頼まれても、聞いてもいないことを「わかりました」と言えるほどソナチネは盲目的ではない。今は特に。だから彼の態度にあわて、自分も彼の前に膝を着き、もう一度ききかえした。

「失礼ながらきいておりませんでした。陛下。申し訳ございません」

そう言うと、ソナチネが熱心に自分の話に聞き入っているものだとでも（オメデタクも）信じていたのか彼はかすかにムッとした顔をしたが、きいていなかったものは仕方がないと思い直し、先ほどの己の言葉を繰り返した。

「真剣な話だ。そなたに、私のあとを継いで国王になってほしい。」

「は？」

聞き返すべきではなかったのか、いやそもそも本来なら近衛兵の仕事である国王の護衛など断っていれば・・・

国王が発狂したのか、それとも「真剣だ」と言いながら冗談を言うようになってしまったのか・・・

さまざまな思いがソナチネの胸に浮かんだ。

この時間をなかったことにはできないのだろうか。

国王の乱心（後書き）

書くのは楽しいものですが、素人の拙い文でお目汚しになったら申し訳ございません。
読んで下さったことに心から感謝いたします。

そもそものはなし（前書き）

異世界トリップのストーリーをものすごく雑にまとめてます。ごめんなさい。

そもそものはなし

2. そもそものはなし

三年前のことだが、コトネこと成沢琴音は突然このペザンテ王国に現れた。（琴音の世界では「いせかいとりっぷ」というそうだ。）琴音は国王アレグロの私室（もっと詳しく言うと寝室のベッドの中、無論彼が寝ているときに）に現れた。不審者として尋問されたが、当時の王国を歴史上最大の危機にさらしていた魔族の侵入を憂いた神官長による「神子の召喚」の儀式で呼び出された神子であることがすぐに判明した。

神官長や国の重鎮たちはこぞって彼女に魔族の掃討を依頼した。まだ16歳だったという彼女は当然というか全てを断り続け、むしろ元の世界に返してほしいと懇願した。その身勝手な依頼に怒りもした。だが、神子の召喚の依頼条件である魔族の掃討を成し遂げなければ帰れないこと、彼女一人を行かせるわけではないことを懇切丁寧に国王アレグロが説明すると、しぶしぶ折れた。

その後一年ほどで見事に自分の（ムリヤリ押し付けられた）仕事を成し遂げた琴音だったが、本人が期待していたとおりすぐには元の世界へ帰れなかった。無事王都に帰還した後も、凱旋パレードを終えて神官長の祝福を受けた後も。「国境を越えてやってくる魔族の侵入をなくすこと」が召喚の条件であったので、彼女の力を借りて国王が魔族との間に「国境の設定と不可侵条約の締結」が成立させた時点で彼女は速やかに元の世界に戻れるはずだった。神子の召喚は王国の歴史の中でも珍しいことだが前例がないわけではないのでこれは異常なことであることがわかった。

当然琴音は怒り狂った。発端である神官長に詰め寄ると、神官長はその地位を降りた。怒りの矛先に（無責任にも）あっさり辞められてしまうと、それ以上追求する気が失せてしまったのか、全てどうでもよくなってしまったのか、元の世界に帰る方法を探すこともやめ、彼女はふいに滞在していた王宮の部屋から姿を消してしまった。国王アレグロはあせり、国中に彼女の捜索を命じた。この頃には心の底から彼女に惹かれていたのだ。

＊　　＊　　＊

＊

このあたりで、そもそも事の起こりの語りが終わっていればソナチネにとってはまだ救いがあるのだが、残念なことにまだ続きがある。

＊　　＊　　＊

姿を消して約三ヶ月後、琴音はアレグロの捜索網とは無関係に発見された。彼女が仕事を得た王都にある小さな大衆食堂へ宮廷に仕える文官が偶然立ち寄ることで見つかってしまったのだ。王都は彼女がいる可能性が一番高かったので１０００人体制でもって探していたのだが、みな黒髪黒眼を目印にしており、金髪カツラをかぶるという単純かつ手軽な変装でおもしろいようにダマされたらしい。

そこからのアレグロの努力は涙ぐましかった。国王自ら琴音の元に赴き、王宮へ帰るように説得を始めた。毎日。いわく「彼女が家へ帰ることができなくなった原因は王国に、ひいては国王自身の不甲斐なさにあるのだから、彼女の生活の保障と帰還するための方法を探るという責任を果たさせてほしい」とのことという内容で。

（彼女を発見した文官は「詭弁だ…連れて帰りたいだけだろ」とつ

ぶやいた）

半年ほど説得し続けると、意志の固い琴音も（このころその片鱗を見せ始めていたアレグロの偏執狂さに根負けして）ようやく折れた。（「ストーカーにほだされたみたいで嫌だなあ…」と彼女がぼやいていたといないとか）

（余談だがソナチネの姉でアレグロの婚約者であったソプラノは、このことを知るとさっさと婚約解消を申し出た。「これでやっと愛しの彼のところへ飛び込めるわ」と。）

フリーになったしこれで堂々と口説ける、と思ったのかアレグロはそれまでの遠慮（していたのか？）をかなぐり捨て、積極的に行動を開始した。もともと男前で誠実な態度をとってきた彼への琴音の中でのポイントは（不思議なほど）高かった。王宮の一室を与えられ、学生だったのだからと教師をつけられ、こちらの世界の歴史やその他礼儀作法・教養を身につけ始めた彼女を相手に、最初に直球で告白して即効フラれると、次には俺様態度で迫ってみたり、あるいは伝説の木の下に呼び出し告白してみたり（彼女曰く「どこのギャルゲー…ていうか古い」）、また、ちょっと冷たくした直後に頬を赤く染めつつ「べっ別に好きじゃないんだからなっ！」と強がってみせたり（彼女曰く「今度はツンデレ？引き出し多いわねー」）。

さらに半年ほど経った頃、もともと悪くは思っていなかった上に、迫られること自体がおもしろくなってきたのか琴音はついにアレグロの正式なプロポーズを受けた。彼は何をどう勘違いしたのか、「紐で繋いだコウモリを連れ、首にはニンニクを連ねた首飾り、黒いマントをはおり、両手には十字架と聖水、そして相手の首筋に口付ける」を彼女の世界の求婚の作法と信じ、実行した。退治する側だかされる側だか、判然としない彼の奇行がプロポーズだと知ると、

彼女は爆笑し涙を流しながら頷いた。

「もしかしたら私は明日にでも、突然もとの世界に帰ってしまうのかもしれないのよ？私の召喚条件は満たされているんだもの。あなたはそれでもいいの？」

「だったらなおさら、一分一秒でも長く一緒にいたいんだ。約束するよ、君がどこに行ってしまっても、私の妻は君一人だ。」

――　そう、たとえ琴音が式の前夜、元の世界へ突然帰ってしまったとしても　――

そもそものはなし（後書き）

読んで下さる奇特な方がいたことに感謝します。

姉の見解

3．姉の見解

「ノノちゃーん、陛下のバカがまたひどくなったよー」

前置きもなくいきなり泣きついてきた妹の姿に姉・ソプラノは「こりゃ相当追い詰められてるな…」とため息をついた。呼び名も口調も幼いころのものに退化してしまっている。自分よりも随分と背の高い妹は、そう簡単に泣くようなヤワな娘ではないのに。

ブリッランテ宮の庭で起こった国王の突然の乱心に呆然としていたソナチネは、彼が他の護衛とともに宮殿の建物内へと戻っていった後もしばらくその場を動けなかった。ハッとしたのはいつの間にか日暮れの時間となった庭園のどこかでカラスが「カァ」と鳴いたためだ。ソナチネの現在の勤務は日中の国王の護衛なので、このあと近衛の詰め所で今日の報告書を書いたら仕事は終わる。先ほどきちんと引継ぎできなかったことは気になるが、国王本人が何も言わなかったので大丈夫だろう。

勤務が終わったあと、騎士団の宿舎に帰らなかったソナチネは、姉の嫁ぎ先であるエネルジコ家の屋敷を訪ねたのだ。

似ているようで似ていない姉妹である。二人とも燦然と輝くクセのない銀髪に大きな蒼い瞳、よく似た美しい顔立ちをしているが与える印象がまるで違う。

ソナチネは髪を耳の辺りで切りそろえており、筋肉のついたすらり

とした長身はどこから見ても強く凛々しい女騎士だ。顔つきにも鋭いものがある。
対して、ソプラノは長い銀髪を華奢な背中にサラリと流した、美しい儚げな深窓の姫君だ。妹と違い、華やかで柔らかい線の美貌を持つ。
二人はコン・フォーコ公爵家の姫君なのでソプラノの方が正しい姿だろう。性格の全く違う姉妹だが、昔から仲は良かった。

「で、何があったの？説明してくれたいとわからないし、だいいちあなた不敬罪よ。たとえ事実でも口にしてはいけないわ。なるべくなら」

泣くばかりで要領を得ない妹を落ち着かせ、ようやく話を始めた。

「なるほど…ふうん、そうきたか」

何があったのか事の経緯を聞きだしたソプラノは訳知り顔でうんうん頷いた。妹が意味不明な国王陛下の趣味？呪詛？に付き合わされていることは以前から独自の情報網で掴んでいた。ただ、なにぶん意味不明なのと、現在ソプラノは王宮での地位も役職も特に必要としておらず、夫であるレント・エネルジコ第一騎士団長に知らせても「特に問題ない」というばかりなので、この極秘情報は使い道もなく持て余していたのだ。

「どうしましょう！？　どうやったら陛下は元にお戻りになるでしょうか…」

一方、頼りにしている姉にこれまで極秘で誰にも相談できなかった内容をぶちまけてしまえたソナチネは、若干罪の意識を感じながらもホッとしていた。どの道こんな重要な話をソナチネが姉に黙って

いられるわけもないことはアレグロも知っている。

この姉妹、体力はあってもほんの少し頭の回転の鈍い妹ではなく、未来の王妃として厳しく躾けられ賢くしたたかに成長し、亡父が命じていた国王との婚約を権謀術数の限りをつくして見事に解消してみせた姉の方が、（今も昔も）主導権を握っている。

その美しく細い指先を、あごにあてて姉はのたまう。

「そうねえ…私が今言えることは、諦めなさいってことかしら？」

「はっ？へっ？」

本日二回目の予想外に再び言葉がでないソナチネ。

「女王は王国の歴史上でも初めてじゃないわ。悪くないと思うわよ？」

「正直、陛下が本格的に発狂する前に王位を継承しておいた方が無難よ。あなたの王位継承権の順位は決して高くはないんだから」

「あちらからの申し出なんだし、三ヶ月もあったんだから準備は整ったってことだわ。最終的な用意ができたからこそあなたに話したんでしょう。おそらく」

「っちょ、姉上。何で」

ほんの少し頭の回転の鈍い妹は話しについていけていない。

それでも容赦なく、真実に近い推測を姉は話す。

「つまりね、ソナチネ」

姉は妹の、自分と同じ蒼く澄んだ瞳を見据えた。

「陛下はコトネを追って、彼女の世界へ行くつもりなのよ」

「コトネが帰還した後、魔術師長が連日王宮で何かを研究していたそうよ。陛下に命じられてね。たぶんコトネの世界に渡る方法を探っていたんでしょう。まったく…それができるなら最初からコトネを帰すためにやればいいのに。誠実そうな顔してホント最低。よっぽど返したくなかったんだわ。（ま、私もコトネに黙ってたけど。逃げられちゃ困るわ私が。）」

「行ったら帰っては来れないのよ。たぶん人一人を送り込む方法しかないんだわ。帰りがあるならコトネをさらってすぐに二人で帰ってくればいいんだもの」

「ようするにあのバk、いや陛下、あ、やっぱりバカでいいか。バカは国を捨てる気なんでしょ。で、代わりの王、と」

「は――――っ！！それがなんで私っ！！」

うん、姉にもキミの気持ちは痛いほどわかる。
だからそのバカ力で肩を握り締めないでほしい。お姉ちゃん妊婦なのよ。

姉の見解（後書き）

読んで下さる方が一人でもいたらいいなあ、と投稿しています。
ありがとうございました。

三者三様の夜　そのいち

4．三者三様の夜　そのいち

ソナチネはあの後、聡明な姉の衝撃的な考察を聞きながら、なかば機械的に夕食まで頂いてしまった。義兄であるレント・エネルジコ第一騎士団長は在宅していたはずだが、話していた内容が内容だけに、姉妹水入らずにしていてくれたらしい。食事の終わりの方には、話題は生まれてくる初子のことや団長のとのノロケ話など、姉の現在の関心事へと変わっていったのだが。食事が終わるやいなや、耐え切れずソナチネは姉の屋敷を辞した。

夜も更け、ソナチネは王宮の第一騎士団の宿舎の中に与えられた己の部屋に帰った。現在、国王直々の命令でソナチネは近衛隊に属し彼の護衛任務にあったっているのだが、本来彼女は義兄が団長を勤めるこの第一騎士団の騎士だ。入り口の詰め所や娯楽室から何度か同僚に声をかけられたが、生返事しか返すことができなかった。ソナチネの部屋は二人用なのだが、相室の同僚は勤務中らしく誰もいなかったので、灯りもつけずに寝台へ靴を脱いで上がり、膝を抱えて座りこむ。

どう考えても無理だ。自分が王となって国を統治するなど不可能に等しい。今までソナチネの生きる道は、守るもののために自ら剣をとって戦い己を盾とすることにあったのだから。政事のことは何一つわからないし、人の上に立つ器でもない。認めたくはないが、２１歳にもなれば自分の頭の程度などよくわかっている。姉のような知性も（悪賢さも）ないし。

これまでさんざん陛下の奇行にドン引いてきたが、彼をバカになどしてはいけない。早くに先の国王を亡くし、まだ子供の年齢である

１７歳で王位を就いた彼は、若いながらも手堅い治世を行ってきたのだ。その頃のソナチネはというと、騎士になるために見習いとして第一騎士団へ入団し、他の少年達につまはじきにされながらも必死で新しい生活になじもうとしていたので、幼馴染の彼がどんなに苦労して足場を固めていったのか少しも知らなかった。
また、こんなポっと出の女騎士を国王にすることを周囲が認めるはずもないのだ。自分のような無知な人間が上に立つのでは、確実に国は混乱する。魔族の侵入という国難が去ってまだ二年ほど、これ以上民を不安にさせてはいけない。

五回ぐらい同じ思考をループし、時間は深夜を大きくまわった頃、剣だこで硬くなったその手を握り締めソナチネは腹を決めた。
やはり、断ろう。むしろなかったことにしてしまおう。国王の前ではシラを切りとおす。これしかない。できるはず、いや、やらねば。
考えすぎて、姉のせっかくの忠告や考察はすでに頭から抜けていた。

やっぱりそうはいかないことをソナチネが知るのは翌日のことなので、単純な彼女はこれで安らかな眠りにつくことができたのだった。

たぶん、もうちょっと悩んだ方が、いい。

三者三様の夜　そのいち（後書き）

お時間を割いていただき、ありがとうございます。

三者三様の夜　そのに

5．三者三様の夜　そのに

ソナチネが一人、思考のループをさまよっているころ――――

その姉も広い夫婦用の寝台の中で妹に降りかかった災難（考えようによっては僥倖なのだが）とその元凶について思考をめぐらせていた。寝つきのいい夫は隣ですでに熟睡状態だ。

（……あのこに国王が務まるとはカケラも思えないんだけど）

あの幼馴染の変人国王がどんな手を打ってくるのかわからない。元婚約者だが、まわりの者たちが思っていたほど、二人の仲は打ち解けたものではなかった。婚約中はその地位を差し引いたとしても、周囲が羨望の眼差しを向けたほど見た目にはお似合いの二人だった。婚約を交わしたのは二人が８歳の頃、死んだ父が強く薦めた話で身分も年齢も丁度よかったことと、幼くしてすでにソプラノの美貌と聡明さが有名だったのとでトントン拍子にまとまった。早くから馴染ませようとしたのか、婚約が整った後に妹と二人でよく王宮に上がり、王子だった彼の遊び相手をさせられた。この頃から活発で屋外で体を動かすことを好んだ妹は、王子とその他の男の子の遊び相手達に混じり、木に登ったり、「冒険」と称して王宮内を駈けずりまわったり、抜け道を見つけて王宮の外に王子と一緒に出歩いて大目玉をくらったりしていた。が、自分はというと、男の子に混じって外に遊ぶなんて野蛮なことできるもんですか！と、将来の姑である王妃のもとを訪れ、苦笑する王妃付の侍女から行儀作法を学んだりしていた。…かわいげのない子供だった。

思春期に入り、遊び相手ではなく婚約者として二人で会うようになると、とたんにきまずくなった。それまで妹を介していたためか、二人で何を話せばいいのかわからなかったのだ。二人とも頭が良いし共通の興味がないわけでもないのに、いつも不思議と会話に詰まった。ソプラノは１０代前半にして社交辞令の天才であったし、彼の方もそのあたりの教育は不可欠なのだから話の接ぎ穂が見つからないような失態を見せるはずがなかった。気がついた頃には、彼と会うことそのものが重荷になっていた。

（今思い出してもあの重苦しい空気はトラウマだわ…）

夫と出会ってからわかったことだが、王子と自分は恋をしたことなど一度もなかった。人間らしい暖かい会話をしたことがなかった。一生を共にする人なのだから距離を近づけなければ、とあせればあせるほど言葉が空回りしていった。

婚約解消し、周囲の期待がはずれホっとした後になって、彼との間にあったあの重苦しい空気の正体を理解した。重かったのは二人の間にあるものではなく、周囲の期待・羨望・嫉妬…外野から向けられる感情だった。将来の王妃として自分を鍛えてきたつもりだが、その努力はいつしか婚約者のためではなく周囲に応えるためのものに変わっていたのだ。そんな彼女の様子に彼も気づいていたのだろう。うまくいくはずがなかった。

結婚式は二人が国の成人年齢である１８歳になったとき行われるはずだった。が、１７歳のときに先の国王陛下が身罷り、その喪に服し、また若くして王位につかなければならなくなったアレグロには、翌年に結婚式を挙げるという余裕はなくなった。それでは２０歳になったらという話になっていたのだが、間の悪いことに今度はソプラノの父公爵が亡くなった。喪に服すため、再び一年延期になった

結婚式は結局もう一度延ばすこととなった。
――魔族の侵入が明らかとなり、国中がそれどころではなくなったためだ。

そしてアレグロとソプラノの結婚式は、そのまま永久に挙げられることはなくなった。

コトネには悪いことをしたと思っている。それでなくても気の毒な身の上の彼女を、自分の自由のために利用したのだ。だが、コトネに対するアレグロの執着に気づいたとき、期待してしまう自分を止められなかった。
だから失踪したコトネが王宮に戻ってきたとき、この機会を逃せばもう次はないと思い婚約解消を願い出た。心の底から慕う人―今の夫―をどうしても諦めきれなかったから。コトネの気持ちは・・・考えなかった。考えていたら実行には移せなかっただろう。
婚約解消を願い出た後、ソプラノは王宮にあがることを一切やめた。国王との縁談を自ら破談にした女が王宮にいては周囲がきまずい。
だが、ソプラノは何よりコトネの顔を見るのがつらかった。もし、コトネがアレグロにもこの国にも嫌悪感を抱いていたら?戻ったのも、自分を虜囚だと思ってのことだったら?――そう考えたらとても会いにはいけなかった。
コトネがアレグロの求婚に応じたときいた時は、たまらずコトネの顔に見に行った。影からそっと見たコトネの笑顔は心の底からの喜びに輝き、晴れやかだった。

(あの笑顔に救われた…あの二人には幸せになってほしかったわ…)

だから、陛下がコトネを追いたいのなら協力しようと思った。自分だけが幸せになった負い目もある。あのソナチネが女王というのは姉としても恐ろしいが、そこはこの自分が全力で支えようと決心し

た。妹に言った「諦めなさい」、あれは自分にとっても決意表明だった。

（それにしてもねえ…）

鈍い妹は未だに気づいていないだろうが、王位継承権は本来なら姉であるソプラノの方が上だ。さらには、彼女ら二人には早世した兄がおり、忘れ形見となった甥が王都ではなく公爵家の領地であるリゾレート地方の館に暮らしていて、母と義姉の手で育てられている。王国の法では継承順はこの現公爵である甥ラルゲットが優先される。また、王族の血を引くのはコン・フォーコ家だけではない。アレグロとその父・先王は一人っ子だったが、先々王の王弟がコン・ブリオ公爵家を継承し今に続いている。コン・フォーコ家はさらに前の王の代の王妹の降嫁によってその血族に連ねるようになった家系なので、こちらも王国の法ではコン・ブリオ家が優先されるはずだ。

（今って第何位くらいだったかしら…ブリオ家も色々あるし…）

とにかく相当強引に進めなければ、ソナチネへの王位継承は難しい。そもそも何故ソナチネなのかという疑問も残るが。

一体どんな手を使うのやら、と意外に苦労性な姉は前途を思い悩みながら眠りについた。これは胎教によくないわ、と頭の端で考えながら。

三者三様の夜　そのに（後書き）

ひまつぶしになれば、幸いです。
ありがとうございます。

三者三様の夜　そのさん

6．三者三様の夜　　そのさん

そして爆弾発言をかましたバカ、もとい国王アレグロはというと――

やはり彼も眠れぬ夜を過ごしていた。彼のは自業自得なのだが。

国王の私室には煌々とした灯りがついていた。この灯りはコトネが消えてからは毎日、深夜まで消されることはなかったものだ。居間に置かれた長椅子に腰かけ、彼はため息をついた。憂えたようなその姿はどこから見ても麗しい美青年だ。

（とうとうここまで来た――あとはソナチネがうなずくまでにどのくらいかかるか、だな）

ソプラノの読みどおり、案の定、彼の目論見は九分九厘まで完成しており、残すはソナチネ本人を説得するのみとなっていた。

（長かったなあ…三ヶ月、コトネに会えない日が続いたとは。よく保ったものだ）

よりによって結婚式の前夜に元の世界へ帰ってしまうとは、アレグロにも予想のつかないことだった。そのまま発狂してもおかしくないほど、彼は深く嘆いていた。

コトネに初めて会ったのは隣にある寝室の寝台の中―今、彼はそこで一人寝することに耐えられないでいる―だった。もちろん不審者

だと思い、すぐに人を呼んで自ら尋問した。忽然と現れた彼女に、もしや魔族の間者ではと疑いを抱いたのだ。

だがそこに、国難をなんとか解決しようと深夜に一人こっそり「神子の召喚」の儀式を行い、何を間違えたのかよりによって神子を国王の私室に現れさせてしまった神官長が駆けつけ、誤解であることがわかった。

神官長の独断だったとはいえ、彼女の意思を無視し、無理やり召喚した事実は、国王であるアレグロも責任があることだ。まさか本気で、王国とは縁もゆかりもない上にまだ16歳の子供である彼女に命がけとなるかもしれない使命につかせるつもりはなかった。

彼はすぐに魔術師長へコトネを元の世界に返す方法を探すように命じたが、応じられなかった。魔族への対応に追われ、そこまで手がまわらないとのことだった。また神官長から「神子の召喚」では神子は召喚された時の「条件」を満たさなければ帰れないという進言もあった。自分たちだけで解決してしまうと神子の「条件」も満たされない可能性があるとも。それがわかっていて何故実行した、と神官長に怒りがわいたが、彼もこれほどまでに若くいたいけな少女が召喚されるとは思っていなかったようだ。

結局、コトネには形だけでも魔族の掃討について来てもらわなくてはならなくなり、アレグロは自ら彼女の説得に向かった。わけの分からない状況に突然投げ込まれ（何しろ最初は成人男性の寝床の中だ）、非常に混乱し怯えて泣いていた彼女に会うのは正直気が重かった。

だが、数日ぶりに会うコトネは思いのほかしっかりしていた。神子である彼女にさまざまな人間が会見を申し込んでいたらしく、彼女はそれらを拒絶することもなく受け入れ、気丈にも短い間に彼女なりの知識を蓄えたようだ。神子としての使命は断り続けているそう

だが。

（若いのに中々しっかりしている、と言うと「私ベンゴシ志望なので人の話をきちんときくことと話し合うことを大事にしているんです」と返された）

アレグロがさっそく魔族の掃討への同行を申し入れると、彼の話をきちんときき、理解したその上でコトネはやはり断った。それまで高位の大臣や神官長、魔術師長に対していたのと同じ言葉、「ムリ」の一言でばっさりと。

「どうしてだ？このままでは帰れないんだぞ？」

「第一に、私の意志に反して拉致した相手のために命をかける道理はありません。また、私を元の世界に返すのはあなた方が当然負うべき責任であって、私自身があなた方のために何かをするかどうかはこれとは無関係です。第二に、私はこの国がどうなろうと関係ないです。どうして自分たちの問題を全くの他人である私に押し付けるのですか？第三に、私はあなた方を理解も信用もしていません。私が神子とやらの使命を果たさなければ帰れない、または使命を果たせば帰れるという話をどう信じればいいんでしょう？どうやってその話を保証してくれるんですか？第四に、魔法使い？魔術師？どっちでもいいですけど、魔法を使える人がいるならその人に私を返す方法を探してもらう方が私としては楽です。ものすごく」

冷静な口調で立て板に水のごとく反論され、帰るためと言えば協力してくれるだろうと考えていたアレグロは、その日はすぐに退散するしかなかった。

次の日からアレグロは毎日説得に向かった。

意志に反して連れてきたことはひたすら詫びることしかできないが、彼女の身の安全は彼の責任で必ず守ると約束し、国の窮状と魔族に

侵略されている民の現状をこと細かに説明して同情を誘い、神殿にある持ち出し禁止の古文書を特例でコトネの元に運び（コトネは神子の力？でこちらの言葉を理解してしゃべれた上に古文書に書かれた古代文字まで読めるようになっていた）どうして神子が使命を果たさなければ帰れないかとこれまでに召喚された神子が使命を果たした後どうやって帰ったのか詳細を説明し、魔術師長がどれだけ必死になって魔族の侵攻を防ごうとしているかをふくよかだった彼の体重が半減し顔つきまで変わっていった経過を語ることで納得してもらった。

そして…

「こんな申し出は君に失礼かもしれないが、対価を支払うというのはどうだろう」

「対価？」

「ああ、君の世界とは貨幣が違うだろうからこちらの金貨などもらっても困るだろう？宝石や黄金などなんでも君の望む形で、君が自分の命の価値に見合うと考える分だけ支払うよ。国庫にも限りがあるから途方もない量だと困るが。持って帰れるように神官長や魔術師長に相談してみよう」

「…やっとまともな話がでてきましたね。」

「…え」

「私だっていつまでも他人事にしてられないことぐらいわかってます。今ここにいるんですから。私は未成年で学生で、自分で稼いだことは一度もないですが、正当な報酬を示されたら頷けなくもないんですよ、陛下」

「神子は人柄さえも高潔で、金銭を示されたら不快に感じるかもしれない」と勝手に考えていたアレグロは脱力しながらも安堵した。これで駄目なら力ずくしかない、となっていたのだ。双方のためにも、良かった。

また、このとき初めてアレグロは神子としてではなくコトネ自身に人格があること（当たり前だが…）を認識したのであった。

ことごとく失敗し、国王の説得を固唾を呑んで見守っていた大臣や神官長や魔術師長たちもこれでようやく前へ進める、と喜んだ。

実は真剣な表情で毎日コトネの元に通う国王の姿を見て、王宮に仕える侍女たちが「これは三角関係の予感…！！」と噂し、その話がよりによってソプラノのところに届き、彼女にほのかな期待を抱かせる、というオマケもついた。

遠征に赴く前に、コトネは「神子の力」を授かる儀式を神殿で受けなくてはならなかった。その力がどんなものであるかは、戦地へ到着するまで国王と神官長以外には秘されていた。

やがて、コトネを連れた王国軍をアレグロ自ら率い、王都を出発し魔族の現れた王国の西部へと遠征に向かった。当初、魔族との戦いは熾烈を極めると予想されたが、最終的には神子の力―「話し合い」―相手がどのような精神状態・健康状態でも話し合いのテーブルに強制的につかせる力―によって、双方の納得がいくような国境の設定と不可侵条約の締結にこぎつけることができた。直接魔王―魔族をまとめていた者―と話し合ったのはアレグロだった。身の安全を守るという言葉どおりコトネは神子の力を使った後はすぐに後方へ移された。

（言葉では突き放すようなことしか言わないくせに、よく周りを気遣っていたな…）

魔族に話し合いをさせるまでに、武力による小競り合いが幾度か起こり、騎士団・歩兵団・魔術師団が実際に交戦していたのだが、コトネはその戦いで傷ついた怪我人がいる救護所の手伝いをした。学生である彼女に医療の専門知識などないので看病のために傍についていたり、見よう見まねで包帯を巻いたりなどの簡単なものだが。不承不承ながらも、目の前にいる傷ついた人々を見捨ててはおけず労わる姿にアレグロは感心した。彼女は自分で言っているほど、己の利益のみを追求するような人間ではない、と。

双方の落としどころを探しての話し合いは、終わるまでにかなり時間がかかったが、コトネの活躍もあり、魔族との問題は解決した。が、王宮に帰り、新たな問題が発生した。

コトネが元の世界へ帰れないのだ。

（自分では気づかなかったが、私は彼女の姿が消えなかったとき喜んでしまった…）

それがコトネにとってどんなに残酷なことか、考えもせず。

神殿にて神官長の祝福を受けたコトネは―以前の召喚ではここで神子の体が徐々に消え、元の世界へ帰っていったというその光景を描いた記述があったので―次の瞬間には自分が元の世界に戻っているもの、と予想していた。

が、コトネの体に変化はなく、彼女が立っているのは相変わらず異世界の神殿。起動までに時間がかかるのかなーと思い、彼女はその

まま立ち尽くしていたが、一時間経っても半日経っても変化は起こらなかった。

（自分が帰れないと理解したときのコトネの顔…あんなに絶望している人間の顔は知らない）

自分たちはなんて残酷なことをしてしまったのだろう。暗くなった神殿で、絶望したコトネの顔を見て初めて彼女が自分を信頼し始めていたと知った。その信頼を裏切った瞬間だった。

コトネはすぐに神官長へと詰め寄った。話が違う、と。

「どうして私はここにいるのでしょう？」

「あなただけじゃない。皆いいましたよね？魔族さえいなくなれば私は帰れるって。嘘だったんですか？」

「あんないかにもいわくありげな古文書まで出してきて私をだましたんですか？国ぐるみで？いい大人が１６歳の子供を？」

「だって帰れるって言ったじゃない！！どうしてよっ！帰してよっ！」

「私にだって家族もいるの！友達も学校も…皆のところへ帰して。お母さんに会わせて！」

最初にこの世界に来たとき以来のコトネの涙だった。この国を救った神子とは思えない弱々しくも痛々しい、普通の少女の姿だった。この一年我慢し、張り詰めていた糸が切れたのだろう。

その後、神官長がその地位を辞した。もともと高齢だったのだが力の見合う後継者がおらず無理をしてその地位に留まっていたので誰も反対しなかった。神官長の務めから開放された余暇を使い、コトネを戻す方法を探すつもりだそうだ。

神官長がいなくなると、コトネは引きこもるようになった。王宮に

与えられた一室に閉じこもり、誰にも会わなくなった。遠征前から仲良くしていた侍女たちも、遠征中に知り合って友達になったというソナチネも遠ざけて。

そして――消えた。

いつ見つけたのか、王族の脱出用通路を使って。

アレグロは彼女が実際に目の前から消えて初めて、悟った。自分がコトネに向ける思いに。強くて弱い彼女にどうしようもなく惹かれている。頑固で容易に自分を譲らないところも、意外に脆い部分をもっているところも愛おしい。彼女がいないことには耐えられない。だから必死に探した。見つけたときは心底安堵した。

遠征中、用がなくとも一日一回は彼女に会いに来ていた彼の思いは周りにはすでにバレバレだったが、本人は自分の行動には無自覚だった。

（「じーっとコトネ様のこと見てるんだもの、こっちがかゆくなったわよ！」とは傍にいた侍女の談。）

（最初にいなくなったあの時と同じ状況だが、違う。今は彼女も私を求めているはずだ…）

何度も試みた求婚に、ついに応えた彼女はあんなに幸せそうに微笑んでくれたのだから。

（妻を取り戻すためだけに、国を捨てる、か…最低の国王だな）

（しかし約束したのだ。私の妻はコトネ一人。王妃を娶らぬ私がこのままでは、王位継承が宙に浮くことには変わらない。だから…）

愛しい彼女の傍へ行くことを願い、国王は今夜も眠れぬ夜を過ごす。

三者三様の夜　そのさん（後書き）

自分で書きたいものを書いてますので、誰向けなのかよくわかりません。
ここまで読んで下さってありがとうございます。

義兄の憂鬱（前書き）

7話が抜けてました。
サイトの使い方が理解できてなくてすみません。

義兄の憂鬱

7．義兄の憂鬱

国王アレグロのトンデモ発言の翌日、ちょうど非番であったソナチネは頭の中のモヤモヤを発散すべく、騎士団の鍛錬場へと足を運んだ。まことに体育会系らしい行動原則である。

朝も暗いうちに起き出して鍛錬を開始している騎士や従騎士たちが、活発にそれぞれに課せられた剣や槍・体術を競い合ったり、あるいは各自の武具の手入れなどを行っていた。騎士の武具は小姓が手入れをするが普通だが、己の手でこなす者も中にはいる。

第一騎士団の主な任務は王都の治安維持と王宮の防衛である。地方に駐屯し、国防や国王直轄地の治安維持を行うのは第二騎士団から第五騎士団までで、それぞれ大体国の東西南北に置かれている。また、地方の統治を行う領主たちは国が定めた基準を超えない範囲で私兵を雇うことが認められている。

騎士たちは普段、各自に割り振られた任務につく日と、鍛錬を行う日と、非番の日を組み合わせた予定で動くことになっている。騎士の中でも小隊長以上は事務仕事も担当することになる。今のソナチネは歩兵隊の一部である近衛隊に所属しているのだが、同じように決められた予定に沿って日々を過ごす。

同僚や後輩に声をかけながら鍛錬場を歩き過ぎ、ソナチネは三ヶ月前までは同じ小隊に属していた先輩であり友人でもある人物の姿を探していた。少し年上で剣の腕前も上の彼女に相手を願おうと思ったのだ。（別に同性でないといけない理由はないのだが、近衛にいたり団長の義妹だったりと微妙な立場のソナチネに気安くしてくれる人もあまりいない。）

確か彼女は鍛錬の日だったはず、と探していると向こうが見つけてくれた。

「ソナチネ！おはよう。今日は非番じゃなかったの？」

声をかけてきたのは、女性としては長身の部類に入るソナチネよりもさらに背の高い女騎士であった。くせのない長い金髪を一つに束ねて流し、鍛錬用の服の上に防具をつけたその姿はソナチネ同様ほどよく筋肉がつき、スラリとして美しい。

「おはようございます。フィーネ。実は相手をしていただきたくて…」

ソナチネも挨拶を返す。フィーネと同じような服装で準備してきたソナチネは早速手合わせを願った。

熱心な後輩に笑いかけ、フィーネは快諾した

「いいわよ。準備は済んでるんでしょうね？」

「はい」

それぞれ訓練用の剣を握り、鍛錬場に設けられた剣術の試合用サークルに入り、一礼して構える。こうなるとソナチネは剣のことしか考えられない。何合となく打ち合いながら、瞬くように時間はすぎた。

「はあっ、ありがとうございました」

「どんどん腕を上げるわね、ソナチネ。今三本に一本はとられたかしら？」

太陽が高くなってくる頃まで、途中に休憩を挟みながらだが夢中で剣を振っていた。気がつけば心にかかっていた懸案も頭から抜け落

ちた。まわりにいる騎士たちの視線にはかまわず、ソナチネは鍛錬場の隅まで歩き、少々はしたないが大の字に寝転がった。
隣ではフィーネが汗を拭いている。

「で？」

「？　で、とは？」

「とぼけないの。今日おかしいわよ。あなた、ほとんど夢中で剣を振るってたわ。何か悩みでも？」

その瞬間、ソナチネは思い出した。目下の悩みを。

「…そんな顔色変えるような悩みなの？きいちゃきけなかったのかしら」

自分の言葉で、極限まで体を動かして真っ赤に紅潮していた顔を一瞬で真っ青に染め替えた後輩を見て、フィーネは少し後悔した。若いのに浮いた話が一つもない彼女のことを実は心配していたフィーネは、「ソナチネについに春が！？」と先走っていたのだ。そういえば彼女の今の任務は国王の護衛。何かきいてはいけないことでもきいてしまったのかもしれない。（当たらずとも遠からずである）

「いえ別に…」
言いかけたソナチネを方向からの声が遮った。

「騎士コン・フォーコ様はいらっしゃいますかっ！！」
声の方を見ると、訓練服のむさくるしい男ばかりの風景に場違いな者の姿がある。煌びやかな衣装をまとった国王の侍従の一人だ。

大体用件を察したソナチネは力なく立ち上がり、手を上げた。

「はい…ここに」

「陛下より書簡をお預かりしています」

国王の書簡を預かった正式な使いである侍従の前に膝をつき、臣下の礼で書簡を受け取る。国王個人の印章を押された封蝋で巻きとめられた書簡を渡すと、煌びやかな侍従はさっさと姿を消した。書簡を手に言葉を失くしたソナチネを残して。

これは根堀り葉堀りきいてはいけないことだ、と察したフィーネは声をかけられなかった。

開けたらそのまま捕まってしまう、そんな予感に襲われたソナチネに追い討ちをかける者がいた。第一騎士団長の副官を勤めるジュストだ。

「コン・フォーコ。団長が呼んでるぞ」

――ああ、もう少し考える時間をください。

（これでも少しは考える時間が与えられていたのだが、それを勝手に鍛錬にあてたのはソナチネだ。）

「…では失礼いたします。今日はありがとうございました。」

相手をしてくれたフィーネに一礼し、悄然とその場を去る。

フィーネは深刻そうな様子の後輩にかける言葉もなく、心配そうな顔でその背中を見送った。

＊　＊　＊

第一騎士団の団長室は魔窟だ。ついでにそこには魔王がいる。

この冗談は騎士たちの間で言い尽くされたものだが、そこには真実がある。

（魔族の侵攻がおこった当初は縁起でもない、と言われなくなっていたが）

魔王ことソナチネの義兄、レント・エネルジコ第一騎士団長はその物騒な二つ名の由来となった眼光を普段の１．８倍強く、眉間の皺を１．５倍深くして義妹を迎えた。３０代後半にして２３歳の若く美しい花嫁をもらった彼は、もっとウハウハしているべきなのだが、そんな可愛げは微塵も見せない。

いつも思うのだが、姉上はこの人のどこがいいのだろう、眉間を見るともなしに見ながら心の中でつぶやく。

「…昨日は顔も見せずに悪かったな」

「いえ、義兄上。こちらこそご挨拶にも伺わず申し訳ありません」

前置きもなくいきなり私的な件で話しかけられて、ソナチネは面くらった。

通常の彼は公私をはっきり分ける人間である。少なくとも王宮内で義妹扱いされたことは一度もない。だから思わずいつもは使わない呼びかけで返してしまった。

「ああ、いい。…用件はわかっているな」

「…はい」

そのまましばし無言のせめぎ合いが続いた。ソナチネは団長用の元は立派だった机―今はなぜだか無数の傷がついている―の上に積み上げられた決済待ちと見られる書類の山の間から睨み付けてくる義兄の前になす術もなく立ちすくんでいた。

「あの…」

「誰かいないのか。その…なんだ。」

「は?」

勇気を出して発言しようとしたソナチネを遮っておきながら結局は言いよどむ義兄。

誰か、とは何か用事でもあるから人を呼べとの意味かと受け取り、ソナチネは聞き返した。

「? 何かご用事でも?」

「違う…。その前に、陛下の書簡は読んだのか?」

「まだです。さきほど受け取ってそのままこちらに呼ばれましたので」

陛下の書簡についても知っているのか、と驚きながら、そういえば目下の懸案事項についての呼び出しだろうと見当をつけておきながら、肝心のこれを読んでおかなければ意味がなかったと気がつく。

「あの、義兄上もご存知ならここで読んでもかまいませんか?」

「ああ。…そうしてくれ」

今までので限界かと思っていたが、眉間の皺がますます深くなる。

書簡の封蝋を取り、紙をシュッと伸ばして読む。

「…今日も陛下のところへ伺うようにと書いてあるだけですが」

「二枚目があるだろう」

あらま本当に、と二枚目を読む。

「…意味がわかりません」

修辞的表現が多くてわかりづらいが、これは舞踏会への招待状らしい。招待主は国王その人ではなく大臣の一人で会場はその招待主の邸宅だそうだ。ついでに開催日は明日だ。それはわかるのだが、何故国王からの書簡に入っているのだろう。

首をかしげていると、ため息をつかせてしまった。

「全部説明しなくてはならんのか…それはお前の夫を決める舞踏会だそうだ」

「…へ？　夫ってなんですか。今一体何がどうなっているんですか!?もう昨日から私にはわけがわからないことばかりなんですがっ!!!」

「落ち着け。陛下がご乱心なのはもうわかっているな?今あの方は本気でお前に譲位なさるおつもりで用意をしておられるのだ。陛下がおっしゃるには、さすがにお前には一人で女王となる器はないから、後ろ盾となるような人間を夫に迎えさせたいそうだ」

度重なる理不尽に魔王の御前であることを忘れつい激しくまくし立ててしまうソナチネと、なだめる魔王。

「いやいやいやいや、おかしいですって!譲位?冗談ではないです

！！　全力で止めましょうよ、臣下なら！！」

「無論だ。このような話を受け入れられるはずがない」

「ん？はい？」

さらに興奮したところで、あっさりと肯定され拍子抜けする。

「だが、今の陛下の行動をお止めするのは難しい。この件以外の政務はこれまで通り滞りなく進めておられるそうだし、魔術師長にさせている研究も、名目上ではコトネ様を呼び戻すため、となっているそうなのだ。私やお前に話している内容は、表立ったところには出されないし、下手にこちらからこの件を表ざたにして陛下の乱心を問題にしてみろ、悪くすれば反逆罪であっという間に首と胴が離れるぞ」

「そんな…」

この件の深刻さを思いやり、再び青ざめるソナチネ。一気に命の危険にまで及んでしまった。

「腹心の者に魔術の詳細とお止めする方法を探らせている…陛下を行かせるわけにはいかないからな。実力で止めさせるしかないだろう」

眉間の皺も深くなるはずである。妻と違い生真面目な彼は「はい、そうですか」と主君の出奔を認めるはずもない。数日前に国王本人から相談を受けた彼は密かに頭を悩ませていたのだ。

（相談？もちろんソナチネの夫に関してだ。騎士団長ではなく義兄として訊かれたらしい。王宮にいる一番近い彼女の縁者が義兄であ

った、と。）

国王がこの件の協力者として挙げた大臣数人と魔術師長にすぐに会いに行ったが、全員国王の味方らしく、止めさせるつもりはないと言われた。

「もし仮に、だ。陛下が異世界へ行ってしまったとしても、お前が女王に、ということにはならないだろう。他にふさわしい方がいらっしゃるはずだ」

「よかった…！！　そうですよね！　おかしいですよね！　義兄上…！！」

国王本人に続き、実姉にまで非現実的な話をされたところへ、やっと常識的なことを言ってくれる味方が現れた！と手を握らんばかりに迫るソナチネ。

「しかし、陛下は本気だ。それは掛け値なしに真実だ。このままいけば近いうちにお前は女王の後ろ盾としてふさわしいと陛下が考える相手と強制的に結婚させられるだろうな。陛下が異世界へ行こうが行くまいが。女王になろうがなるまいが。うん」

さすがは魔王様、一旦喜ばせておいて再びどん底につきおとしてみせた。

女王として即位、という最悪のシナリオは避けられる可能性が見えてきたが、避けられない災厄もあるらしい。たまらずソナチネは上司の前であるにもかかわらず傷だらけの机に両手を突き、俯いてしまった。上司の方もそんな義妹を気の毒そうに見やるのだった。

「それで…だ。」

まだ続きがあったのか、義兄は何故だがこれまで以上に重苦しく切り出した。

「…最初にきいた件だが」

「…なんでしたっけ?」

すでにそんな前のことは頭にないソナチネは素で聞き返す。

「うっっ、忘れたか。まあそうだな、仕方ない」

「なんでしょうか?」

よほど話しづらい内容なのか中々用件—彼は本来、この話のため気は進まないながらもソナチネをここへ呼んだのだが—を言い出せず、チラリと気まずそうに彼女に目をやる。

「私的な話をする場でもない…いやこれまでの話も私的といえば私的か。それに私がきくのもなあ…ソプラノがきいてくれるのが一番いいんだが」

「あの、今までのお話で十分衝撃的でしたので、日を改めてでも私はいいですが」

あまりにも言いにくそうにしているので、もうこれ以上はご免とばかりに思わず先送りを提案するソナチネ。

「ああ…そうしたいが…これも義兄の務めだろうと後でソプラノに

詰め寄られるかもしれん…。」
まだ新婚だというのに、何故だか娘を前にした父親のような気まずい心境で義兄はきいた。

「…では尋ねるが、今、お前にはいないのか。その、慕う相手というか、特定のなんだ、恋人とでもいうのか」

「……いません」

意外に初心な義兄が何を言いたいのか理解できた後、長いこと黙り込んだ末にソナチネは正直に答えた。繊細な問題を尋ねられた心が痛い。
この、団長室での相談でどちらの方が打撃を被ったのだろう。義妹という微妙な立場の相手に気まずい質問をした初心な義兄も相当消耗していそうだ。

どうやらフィーネの「ソナチネに春が!?」という予感はあながち間違ってはないのかもしれない。これからの話だが。

義兄の憂鬱（後書き）

すみません、３０分かそこらの話ですが、７話が抜けてました。
直したあとではわけわからないでしょうが。

招待主の思惑

8．招待主の思惑

第一騎士団長の執務室を（いろいろな打撃を受けて）辞したソナチネは、宿舎に戻って鍛錬でかいた汗をふき取り着替えてからついでに昼食をとった後、そうこうしている間にも国王陛下からの呼び出しの時間が迫ってきたので、重い気持ちで今度は国王の執務室へ向かった。

彫刻をほどこされた国王の執務室の重厚な木製の扉の前では、きちんと話が通っているのかその前に立っている近衛の同僚に止められることもなくすぐに室内へと通された。

「お召しにより、騎士ソナチネ・コン・フォーコ参上いたしました」

控えの間より入室してすぐ、奥の机―さすがに傷はついてはいないが、義兄といい勝負で書類が積んである―に主君の姿を見とめ、膝をついて臣下の礼をとり頭を下げたまま名乗る。あちらから声をかけられるまではこのままの姿だ。またどんな爆弾を投げつけられるのかと、暑くもないのに背中を汗が伝う。

「ああ、待っていた。早速だが、舞踏会の件で打ち合わせだから、立ちなさい」

不眠が続いているにもかかわらず今日も麗しい国王陛下は、戦々恐々としているソナチネにひとかけらの猶予も与える気はないらしい。

「私はこの後、謁見が入っているのですぐに席をはずさねばならな

い。あとはこのマルカート伯が説明するからよくきいておいてくれ」

そう言った陛下の横には、大臣の一人であるマルカート伯爵が立っていた。室内の人間の人数や位置を一瞬で把握する騎士の習性でもって見分けていたので、頭を下げた状態でも彼がいるのはわかっていた。この三ヶ月を近衛として過ごしていたソナチネは伯爵の顔も見知っていたので、彼が書簡に書かれていた舞踏会の招待主であることも同時に思い出した。

「陛下、私はまだ陛下のお話を了承したわけでは…」

立ち上がって顔を上げると、なんとか思い直してもらえないか（はかないながらも）訴えるつもりで来たソナチネは、このまま流されてはたまらないとばかりに必死に声をあげる。

だが敵もさるもの、その途端にさえぎられる。長い睫毛を臥せ、美の神に愛されたその顔を痛ましげに歪める。

「ああ。私の都合で突然婿をあてがわれるそなたには可哀そうなことをするが、一人で女王になるほうが苦労が大きいだろう？できるだけそなたの意向を大事にするから」

いやいや、陛下にそんな苦しげにされてももうごまかされませんよ、とソナチネも負けない

「なにゆえそんな非現実的なことをおっしゃるようになってしまわれたのですか！？陛下
はこの国の国王でいらっしゃるのですよ！？閣下もおかしいとは思われないのですか！！」

どうしてここにいるのか薄々察しながらも、伯爵にも思わず同意を求める。

突然矛先を向けられた４０代後半の伯爵は年長者の余裕でもってニッコリ微笑んだ。ごましお頭に顎鬚を生やした彼は中年の域にあるにもかかわらず腹がでることもなく髪がさびしくなることもなく、中々のナイスミドルである。

「思いませんとも。ソナチネ様」

様。様がついた。「ソナチネ嬢」ならまだしも、様。

「…そういうことですか。ここには味方はいないんですね…。」

「いえいえ、ソナチネ様が無事にご即位なされたら、誠心誠意お仕えする覚悟ですよ」

口調は極優しいが何のなぐさめにもならなかった。

「アレグロ陛下が書簡にて書かれた通りですが、私からも説明いたしましょう」

穏やかそうな物腰ながらも、ソナチネの混乱を全く無視して話を進めるマルカート伯。

「ここまではおわかりいただけましたか?」と、いちいち返事を求められながらソナチネが理解させられたことによると、明日伯爵邸に招かれているのはいずれも有能な青年達で彼女が誰の手をとったとしても女王の良き伴侶となり支えてくれるであろう人物が揃うこと、彼女の支度は伯爵夫人が全て整えており舞踏会用のドレスが仮

縫いまでできているので今日の午後に細かい採寸さえすれば完成すること、明日の彼女の勤務は朝から夕方までになっているが人員の手配は済んだので午後は休みになっていて終わり次第伯爵邸で準備を始めてほしいこと、の以上だった。

（こわっ！こわっ！ええっ、いつ間にそんなに有能な人たちを集めたの！？全然知らないんですけど！噂とか聞こえてきてないんですけど！）

（仮縫いは済んでるってどういうこと！？そこに至るまでに私の採寸とかっていらないんだっけ！？身長とか自慢じゃないけどそこらのご婦人よりずっと高いですよ私！？）

（仕事が終わったらすぐって！！逃がさない気だ！！ノノちゃん助けて！！魔王様でもいいから！！）

伯爵は姉や義兄にまで助けを求めるソナチネの心の葛藤を完全にスルーし、説明を終えるとぼんやりした彼女の手をとり国王の執務室から連れ出した。国王本人はいつのまにか謁見の間に向かってしまったらしい。

「さ、では早速ドレスの採寸のため我が屋敷においでいただきましょう」

こんな時でなく、相手がソナチネでもなければ、乙女が思わずキュンとすること間違いなしの完璧で優雅なエスコートだった。とてもまずいことだが、流されかかっている。

＊　＊　＊

馬車に乗せられ到着したマルカート伯爵邸では伯爵夫人本人に出迎えられ、すぐに採寸のために用意された客間に通された。そこには

すでに服飾を専門とした侍女たちが巻尺を手に待機しており問答無用で着ている近衛の制服を脱がしにかかる。夫人は傍でその様子を暖かく見守った。

「いえあの、自分でできますからっ！それに私、汗くさいですよ！」

「大丈夫ですよ。お嬢様はお楽になさっててください」

「そうですよ。立ってて下さるだけでいいですから」

ふふふと笑いながらも有無を言わさぬ手つきでソナチネの抵抗をふさぐ侍女たち。普段は荒くれ男ばかりを相手にしているソナチネは彼女たちの柔らかい手を乱暴に振り払うなどできるはずもなく結局大人しく下着姿を晒し採寸を済ませることとなった。実際の話、自分用のドレスを作ってもらうのは初めてなのでどうしたらいいのかわからないのだが。ただ、午前中の鍛錬のせいで汗臭い自分がいたたまれない。

「…これが私のドレスですか」

最初の採寸が終わったあと、仮縫いのできているドレスを直し、その後もう一度直したドレスを身にまとって最後の微調整をする、という話だった。今は最後の微調整のためにソナチネはほとんど生まれて初めて、ドレス一貴婦人用の夜会服一に腕を通した。

落ち着いた緋色を基調としたドレスで、首元が大きく開いており袖もないのでソナチネは非常に落ち着かない。腰には当然のようにコルセットが装着させられたので慣れない彼女にはこれもまたつらいことである。スカート部分には膝のあたりから裾へかけて斜めに切り替えがついている。客観的に見ると、落ち着いた色合いも比較的すっきりとした全体のシルエットも、本人不在のまま作られたにしては良くできていて彼女に良く似合っていた。

「よくお似合いですよ」
「本当に！！日に焼けておいでですけど、この色はよくお肌になじんでますわあ」
「お嬢様はお背が高くていらっしゃいますから、こういう形が映えますのよ」

侍女たちはいろいろ褒めてくれるが、慣れないことに疲労困憊していたソナチネの心境としては「もうどうにでもして…」という投げやりなものだった。

引き続いて、首飾りなどの宝飾品を合わせたりソナチネの短い髪を結うためつけ毛をつけて髪飾りを刺してみたり、と明日のために全身の装飾品の打ち合わせが行われた。本人そっちのけで、采配はほとんど伯爵夫人によって行われた。

全て終了して、最後にマルカート伯夫妻と応接間でお茶をいただく頃には、午前中は思い切り体を動かしていたこともあり完全にくたくただった。

「まあ…大分お疲れのようですわね」

「お疲れのところ申し訳ありませんが、もうしばらくお付き合い願えますか？」

伯爵夫妻の言葉にも力なく微笑むことしかできなかった。

「大丈夫です…。あの、まだ打ち合わせることがあるんでしょうか？」

そこで伯爵はひとつ息を吐いて準備をすると、真剣な顔で話始めた。

「はい…。この話でソナチネ様は非常に驚かれ、困惑されているでしょうと思いましてね…」

やっとまともな話ができるのか、とソナチネも疲れて椅子の背にもたれていた姿勢を正し身構える。

「あ、先に申し上げておきますが、私はアレグロ陛下の協力者ですよ。期待するのはおやめください」

（……そうですか。そうですよね。思い切り協力してますよね）

ソナチネの疲労度は一気に上がった。わかりやすく肩が思い切り下がる。

「何からお話していいのやら…、実はこの件を陛下が私に打ち明けられたのは一月ほど前でしてね。驚きました…ソナチネ様もご存知のとおり陛下は王妃となられるはずだったコトネ様を失われ、非常に気落ちなされていましたがまさか譲位までお考えだとは想像もしていませんでしたからね」

「私は現在法務大臣を拝命しておりますので、ソナチネ様のご即位に関して法律的な障害についてお尋ねだったのです。必要なら法改正のために議会を開かれるというとこで。いや陛下は全く真剣でしたな」

「もちろん私は反対しましたよ!!アレグロ陛下はまだお若くていらっしゃるし、この先人生は長いですからね、出会いもあることでしょうと」

「しかし…陛下は全くお聞き入れになりませんでね。ご自分がコトネ様のところへ行かれるのはもう決まったことで、その後の王国を

どうするかが問題なのだと」

「何度も何度も私の執務室においでになって真剣にお話になりました。その懸命なお姿に不覚ながらも自分の若い頃のことを思い出されました…」

そこで傍らに座る奥方と愛情にあふれた視線を交わす伯爵。伯爵夫妻の大恋愛と結婚後の仲むつまじさは有名だ。

（えっまた!?またノロケ!?）

恋人ナシの２１歳独身、限界のはずの疲労度値が更新された!!

「えー、どこまで話しましたっけ。ああそうそう、大事な話が残ってます。そういうことで、私はアレグロ陛下に協力することになったんですが」

「ソナチネ様の王位継承権ですが、現在は第六位でいらっしゃいます。これはご存知ですね？」

もちろんソナチネはご存知ではないが、伯爵の話は続く。

「ですが、ソナチネ様に先んじられて継承権をお持ちの方々はどなたも少々難ありでいらっしゃいましてね、まず先々代の国王陛下の弟君のご子息がお二人、現在のコン・ブリオ公爵家ご当主のモデラート様が第一位ですがご高齢の上に持病をお持ちです、恐らくご辞退なさるでしょう。モデラート様の弟君のリテヌート様は神殿で終生誓願を立てておられますのでこちらも同じでしょう。そしてモデラート様にはお子様がお二人いらっしゃいましてそれぞれ第三位と第四位です。モデラート様はご結婚が遅かったので、お二人ともお年はソナチネ様よりも少し上ぐらいです。このお二人についてはソナチネ様の方がよくご存知かと思いますが、まあ、その、問題ありますよね」

「その次が、ソナチネ様の甥御のコン・フォーコ公爵ラルゲット様で第五位をお持ちです。が、公爵位ならともかく御年7歳では王位

を継がれるのは無理でしょう。また後見に立たれる母君にも、それではご負担がかかり過ぎになりましょう」

「そして、アレグロ陛下は王位の継承を深くお考えの上、第六位でいらっしゃるソナチネ様が相応しいとお決めになられました。…お分かりいただけましたか？」

「はあ、あの、思っていたより私の継承順位が上なのは理解できましたが…。そういえば姉はどうなるんでしょう？　そのお話でいくと私より上では？　身びいきなんでしょうが、姉は私などよりもよほど女王に相応しいのではと思うのですが…」

「あれ、ご存知ではないのですか？　姉君ソプラノ様はアレグロ陛下とのご婚約解消時に王位継承権も放棄なされてますよ」

今頃気付いたのか、と言わんばかりに目を見張る伯爵。言われるまでもなくその通りである。

（そうか…！！何で昨日気が付かなかったの私！！どうして姉上も言ってくれなかったのかしら…。自分で考えろってこと？そんな薄情な…。）

「そういうわけですから、王位につかれるのはソナチネ様となっています」

「微力ではありますが、ソナチネ様がご即位なされるまでもその後も私と我が伯爵家は全力でご助力申し上げることをお約束します。まずは明日の舞踏会ですね。ソナチネ様が納得のできる方をお選びいただけるよう力をつくしますのでおまかせ下さい」

そう締めくくって、ナイスミドルな伯爵はニッコリ笑った。

「そうですわ。明日はソナチネ様を最高の美女にお仕立てしますから、きっとどなたをお選びになっても、お相手の方はソナチネ様に参ってしまわれますわよ」

もちろん、ソナチネ様の元々のご容姿が整っておられるからですけど、と伯爵夫人は口添えした。

結局この日も流されるままに、着々を外堀が埋められていく様をなす術もなく呆然と見ているだけのソナチネだった。姉がその不甲斐なさを見たら、王位継承への協力は考え直してくれるのかもしれない。やっぱりこの娘には任せていられない、と。

招待主の思惑（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

侍女の懇願

8. 侍女の懇願

翌日、どうしてこんな災難が降りかかってきたのかと一晩中深く悩んだソナチネは、寝不足の頭で近衛の勤務についた。よく晴れた日で、恨めしくなるほど爽やかな朝だった。

昨日言われていたとおり、朝行った近衛の詰め所では今日の勤務が正午までに変更された旨を告げられた。

「どうしたんだ？顔色が悪いぞ？」

二人一組で国王の私室から執務室まで国王陛下の護衛をし、執務室に着いた後は扉の前でともに番をする同僚・ヴァルスが心配そうに声をかけてきた。本来なら勤務中であるから私語は厳禁なのだが、体調が悪いのでは護衛など勤まらないだろうと彼は考えたのだ。

「大丈夫です。少し寝不足なだけです。…申し訳ありません」

寝不足の元凶を護衛しながらなので少々理不尽な気もするが、仕事は仕事、国王の護衛という名誉ある職務はおろそかに扱ってはいけないとまっすぐ前を見たまま背筋をピンと伸ばし、ソナチネは答えた。体調不良で任務に支障をきたすなど以ての外なのだ。

「そうか？無理するなよ」

近衛の中でも比較的友好に接してくれている気のいいヴァルスは、自分も姿勢を正しこの異色の後輩を思いやった。彼女は公爵家の令嬢であるにもかかわらず、騎士をしている変わり者だ。それが騎士

団よりも女性の少ない近衛隊に移ってくるときいた時は、どんな厄介ごとが起こるのやらと彼は憂慮したものだが、実際に彼女が来てもどうということもなく（国王陛下の奇行を除いては）平和に任務をこなしていくので安堵していたのだ。人は身分や性別では計れないものだな、と大分彼女を見直していたので彼は普通に心配していただけだった。

正午となり、休憩のために国王の護衛を交代の者に代わるとそこでソナチネの今日の勤務は終わりだった。が、一度詰め所に戻り報告書に記入をしなければならないだろう。ヴァルスとともに詰め所へ向かおうとしたソナチネを、呼び止める者があった。

「失礼いたします。ソナチネ様、お久しぶりでございます」

淑やかにお辞儀をしてソナチネの名を呼ぶ侍女の制服の若い娘―それは三ヶ月前まで王妃となるコトネへと共に仕えていた侍女・ヘオンだった。

「ヘオン…！お久しぶりです。」

驚きながらもヘオンの元に歩み寄るソナチネに、侍女は微笑んだ。が、すぐに顔を暗くしてしまう。

「お仕事の途中に申し訳ございません。ですが、どうしてもソナチネ様にお話ししたいことがありまして。昼食の後で結構ですから少しだけでもお時間をいただけませんか」

「ああ、はい。ですが今日はちょっと…」

昼食後の予定は詰まっているのだ。すぐにでも伯爵家から迎えが来てしまうかもしれない。

すると、ヘオンの様子を見かねたのかヴァルスが助け船を出した。

「コン・フォーコ。報告書は私が書いておこう。こちらはいいから今すぐ行ってあげるといい」

「しかし…。」

「午後から陛下のご用で抜けるのだろう?今行っておかないと次がいつになるのかわからないぞ」

重ねてすすめられ、ソナチネはヴァルスの言葉に甘えることにした。迎えは昼食後なのだから今からヘオンの話をきけば間に合うだろう。

「ありがとうございます…。申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。」

そうしてソナチネはヘオンの話をきくこととなった。ヘオンがそれでいいというので、彼女が王宮で働く侍女としてその中に与えられた部屋で昼食をとりながら。

＊　＊　＊

「ソナチネ様はお変わりありませんわね…」

ヘオンの部屋で彼女とともに小さなテーブルにつき、下働きの者が運んできた食事をとっているソナチネはその言葉に内心首を傾げた。それに話し方も変だ。以前はもっと気安かったし、敬称なんてつけていなかった。

（三ヶ月ではそう変わらないような…）
若干、嫌な予感がしながらも話を促した。

「そうですね。それで、急かすようで申し訳ないのですが、お話とは」

「そうですわよね、失礼いたしました」

恥じらうようにわずかに顔を赤くしているヘオンは可憐であった。
彼女は王宮に仕える侍女ではあるが、ソナチネほどの名門ではないにしても、もともとは貴族の令嬢である。少し赤みがかった金髪に人懐こそうな茶色の瞳を持つ美しい娘だ。だが、その顔をよく見てみると今は心なしか憔悴しているように感じられる。

「ソナチネ様はもうお聞きになりましたわよね？その…陛下のお話を」

「はい…。ではヘオンも？」

「私もです。実は陛下ご様子がおかしいので、僭越とは思いましたが、直接お尋ねしたんですの」
たおやかな外見とは違い、なかなか行動力がある。

「すでにご存知なら話は早いですわ。単刀直入に申し上げます。是非女王におなり遊ばして下さいませ…ご無礼をお許しください」

あなたもですか……！！

思わぬ方向からのアプローチに、完全なる死角から突きを繰り出さ

れてきた時の衝撃を味わうソナチネ。

「私ごときが口出しして良い話ではないことは重々承知しております…ですが、どうしてもソナチネ様に直接お会いしてお願いしたかったのです」

「あの、疑問なのですがヘオンは私のことをよくわかってるでしょう!?それなのに女王にと言っているのですか?」

これまで幾度となく浮かんできた疑問なのだが、陛下の阿呆な思いつきださて置いても、何ゆえ自分を女王になどという突拍子もない話が飛び出てくるか心底それが不思議でならない。

「どこからどう考えても私は王になどなれる器ではありません。それはヘオンもよく知ってるではありませんか…」

コトネが神子としてこの世界にやって来た時から彼女付きの侍女だったヘオンと、コトネの従軍時に護衛として付き従ったソナチネは2年以上の付き合いだ。同性で同じ人物に仕える間柄、もう一人のコトネの侍女・トオンを入れた三人は仲が良く、言葉を交わす機会も多かった。そんな時なぜか年上のはずの（一歳だけだが）ソナチネがなんとなく妹的な役回りを振られていた。女性らしいことにはとんと疎い彼女をいじって遊んでいたのは目の前の美しい女性だ。そんな風に他人に遊ばれるような人物を女王に本気で推すつもりなのか。

「…ソナチネ様は素直でまっすぐな方です。今は不足でもそんなあなたを助けようと手を差し延べる人は多いでしょう。畏れながらそれはアレグロ陛下にもないものですわ」

ソナチネは目を見開く。これは今まででは一番真っ当な説得だった。血筋や状況ではなく、初めて自分自身に対する評価を与えられた。

（…そんな風に考えることもできるのか…）

「お気持ちはわかりますわ。突然のことにさぞかし戸惑っておいでしょう？ご迷惑かもわかりせんが、私がソナチネ様に一度直接お願いしたかっただけですの。どうか…あまり悪い面ばかり見ずに、前向きに考えてみてくださいませ」

そこからヘオンは話題を変え、コトネの思い出話やトオンが最近起こした騒動の話など明るく軽い話を振り、二人の昼食を終えたのだった。だが、ヘオンのどことなく憂いた顔が晴れることはなかった。

――ソナチネがヘオンの部屋を辞した後。

「…はあ」

自分の言いたいことを伝えられた、ヘオンはほっとため息をつく。その顔色は変わらず暗く、ギリギリのところで平静を保っていたため精神的な疲労も加わっている。

王宮に仕える侍女。この言葉が城下や地方に住む王宮外の者たちにどれほど羨望のまなざしで見られるか、ヘオンは良く知っていた。ヘオンは貴族だが、実家での暮らしはほぼ平民を変わりないものだった。貴族といっても名ばかり、先祖の放蕩のおかげでわずかとなってしまった領地からあがる収入は少なく、そのほとんどは時折気まぐれのように招かれる夜会に出席する母の体面のために使われ、生活は本当に苦しかった。

ヘオンの王宮勤めはよくある行儀見習いのためなどではなく、それが一家三人が食いつなぐ唯一の方法だからだ。幸い見目よく聡明な彼女は王宮に職を得、その上王妃付きの侍女というこの上ない地位まで出世することができた。王妃のいない現在、中ぶらりんな彼女は先王妃、つまりは国王アレグロの母に仕える侍女の末席を与えられているが、このままいけば、女王となったソナチネに仕えることになるだろう。だが、ヘオンの目的はそれではない。

「ヘオンいるの？さっきソナチネを見た気がするんだけど…」

昼食の食器を下げさせた後、そのままテーブルについたままだったヘオンの部屋にまた新たな訪問者が来た。

「トオン？いつも言ってるでしょう。ノックくらいしなさい」

入って来たのは、同僚・トオンである。金髪に茶色い目、姉妹でもなければ親戚でもないのにヘオンとどことなく似た娘である。外見上はヘオンに似ているが、性格は全く違う。同い年なのに聡明なヘオンと比べるとそそっかしく、これでよく王妃付きに選ばれた…と彼女にため息をつかせるほど落ち着きのない娘なのだ。

「そうじゃあなくってえ。今ソナチネと会ってなかったっ？　元気だった？」

この娘は少し変わっている…女騎士のソナチネに憧れを抱いているらしく、ソナチネがいると明らかに浮ついて、構ってしょうがない。

「…もう仕事に戻ったわ。私たちも行かないと」

「ヘオン。ソナチネに何を言ったの？」

わずかに息を呑む。そうだった、トオンはこんなでも意外と鋭いところがあるし情報通だ。見られたのは失敗だった。

「…別に」

言葉少なく答えるヘオンに、トオンは一気に核心をつく。

「そういうのは、やめた方がいいと思うよ。気持ちはわかるけど…ヘオンがつらい思いをするだけじゃない…」

思わぬ労りの言葉に、淑やかな侍女の仮面が外れただの…普通の恋する娘としての己が出てしまいそうになるが、必死で涙をこらえるヘオン。

「わ、私がそうしたいんだからいいでしょう。何か陛下のためにできることがあるならやってもいいじゃない。後悔したくないの」

ヘオンが片思いを続ける相手…国王アレグロは消えた王妃・コトネを決して諦めることはないだろう。だから彼女は彼のためにできること、彼が思い残すことなくコトネの元へ行けるよう、微力とわかっていても協力しようと思っている。身分的に自分にはお呼びのないことなのはわかっているし、彼が国のために愛のない結婚をするのは自分が報われないこと以上に嫌なのだ。

もとより叶うことのない想いであることは承知だ。ヘオンが初めてアレグロに会ったとき、彼にはすでに婚約者がいたし、コトネのことがあってからは他が眼中にないことは傍で見ていて呆れるほどに理解できた。

「わかっているけど。ままならないんだなあ…」

トオンは思う。もちろん仕えていたコトネのことは好きだった。率直な人柄が面白いし、あの一度ハマると止まらない滔々としたしゃべりは、自身もおしゃべりのトオンをして感じ入らせるほど、流暢でなめらかだった。ときどき故郷の話になると、知らない単語がたくさん出てきて理解できなかったが。

コトネのことは気に入っていた、それでも、と思わずにはいられない。

（あんな変人を本気で想う奇特な女の子がここにいるっていうのになあ…）

コトネしかだめなのだろうか。さすが変人。

泣くことができず、うな垂れるヘオンを見てトオンはそっと部屋を出た。これで十分つついた、一人にすればきっとヘオンは泣くだろう。そうやって少しづつ忘れていくしかないのだ。彼女はもう、自分で手放すことを選んだのだから。

侍女の懇願（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の状況判断　そのいち

１０．文官の状況判断　そのいち

ヘオンとの昼食を経て、一連の出来事ですっかりぐっちゃぐちゃになっていたソナチネの心中は少しばかり落ち着いた。これまで完全に周りに呑まれ、なんとかして回避できないかと悩むばかりの彼女だったが、少し距離を置いてこの状況を見つめることが必要ではないだろうか？

（正直、姉上やマルカート伯は何を考えているのか私にはサッパリわからないし…信用できないってほどでもないけど。結婚云々や反逆罪も恐ろしいけどこのままじゃいけない…）

このままいくと本当に女王にされてしまう。生憎と２．３日の説得で曲げてしまうようなやわな騎士魂をソナチネは持ち合わせていない。

この後の予定のために王宮の回廊を近衛の詰め所へと歩きながら、考え込むソナチネの目にある扉へと入っていく人物が飛び込んだ。もちろんソナチネには予定があるし、約束の時間も迫りつつある。誰かに相談など持ちかけている場合ではない。

その扉をじっと見つめるソナチネ。すると彼女にしては珍しい意地の悪い笑みを浮かべる。

（ここで、思い通りにいかないことを示しておくのも悪くはないかも？）

さすがに国王陛下肝いりの舞踏会をすっぽかす勇気はないが。
悪戯をする子供のような心地に戻ったソナチネはやや自棄になっている自分に目を瞑り、まわりに誰もいないことを確認した後、その扉をノックした。

＊　＊　＊

「はっきり言わせてもらう。出て行け」

一人で室内にいた人物は、入室の許可を出す返答に扉を開けて足を踏み入れたソナチネが挨拶する間もなく、彼女の顔を見分けると直ちに退室を求めた。

「…久しぶりなのにそれはないんじゃないの？あれ、５年？６年？けっこう経つわね」

開口一番に拒絶の言葉を吐かれ、少しムッとしたソナチネだが彼の毒舌には慣れたものだった彼女は軽く流した。

彼―レジェロ・スケルツァンド、今は王宮に仕える文官である―はソナチネの幼馴染の一人であり、かつて一緒に国王アレグロの遊び相手として王宮に上がっていた頃からの付き合いだ。成長したアレグロが遊び相手を必要としなくなり、同時にソナチネも騎士団に入るため馬術や剣術を習い始め多忙となったのでそれからほとんど会う機会などなかったが。

確か最後に顔を見たのは――

「６年前かな、陛下の即位式の祭典で会ったような、会ってないような」

「相変わらず可哀そうな頭だな。耳まで悪くなっていたのか？さっさと出て行け」

「だからさ、それはないんじゃないの？会ってもないのに私が何かした？」

「ふん、じゃあ言い方を変える。俺は忙しいんだ。お前に用もないし」

すげなく追い返そうとする彼にはかまわず、ソナチネは室内に無造作に置かれた椅子に腰掛けた。彼の態度がツンケンとしているのは子供の頃からで、当時からそれを無視してずけずけと入り込むことが彼女にとっては当たり前のことだった。

「へえ、ここって文官の部屋でしょう？今は何してるんだっけ？」

「…本当に相変わらずだな。もうちょっと相手の都合を考えろよ…」

思い切り苦虫を噛み潰した顔をしたレジェロは深いため息をついた。久しぶりに会うというのに以前の力関係が少しも変わっていないことに深い慨嘆をおぼえる。

レジェロの外見はあまりパッとしない。くすんだ灰茶色の髪と茶色い瞳、顔立ちも地味だし、風景に溶け込んでしまいそうなほど人目にとまらない。昔から室内派で体を動かすことが得手ではないので体格も良くはなく、その上猫背だ。彼の王宮内の仕事部屋も、部屋の主に合わせてか一応は整理整頓されてはいるが机の上は書類で埋め尽くされる程度の荒れ具合、家具調度も王宮から支給された品で、ごくごく普通の仕事部屋だ。

だがレジェロの服装は少し変わっている。派手で珍妙な格好という

意味ではない。官吏に支給される制服ではないのだ。黒いフード付きローブのそれは普通は魔術師が纏う物だ。

「きいていい？」

「駄目だ」

ソナチネの視線の先から、その内容を察し即答する。

「いつから魔術師になったの？確か弟子入りしようとしたら断られたって…」

「駄目だって言ってるだろうが！？　お前はそんなことを質問しに来たのか？　今さら」

「でも魔術師のローブでしょう？資格のない人間は着ちゃいけないんじゃ」

この国では魔術師は貴重だ。彼らはほとんどが国に仕える王宮魔術師で、その継承は師弟制によってなされる。だから魔術師になりたい人間は皆王宮魔術師に弟子入りを志願するのだが、大抵は断られる。何故なら魔術師になるには素質がなくては不可能だからだ―魔力という絶対的な素質が。そして魔術師になれるほどの魔力を持つ人間はめったにいない。

魔術師たちは国から最低一人以上は弟子をとることが義務付けられているが、それほどの魔力を持つ人間がめったにいないため彼らは自分で魔力の強い人間を見つけ出し半ば強制的に弟子にするのが彼らの慣習となりつつある。

そのため自分から弟子入りを志願する魔力のない一般市民は誰でもすげなく追い返されるのだが魔術の有用性や待遇の良さに憧れ結局志願する者は後を絶たない、というのが現状なのだ。

「…これはっ、魔術師長が直々に着用の許可をくれたんだ。俺は確かに魔術師じゃあないが、魔術理論は勉強したから。色々と研究して、それが役にたったからその褒美で」

魔術師は子供の頃からのレジェロの夢だった。だから王宮魔術師全員のところへ弟子入りを志願しに行ったがその全員に断られた。全て同じ、「魔力が（からきし）ない」と。

当時は絶望した。幼いレジェロは今と変わらずあまりパッとしない子供だった。それぞれに優秀だったり、家柄が良かったり、見目麗しかったりと特出していた王子の遊び友達の中で彼は完全に埋没し、また周りも彼を軽んじていた。彼の拠り所は大人になったら魔術師になって国に仕える夢を叶えることだけだった。

夢を絶たれたすぐには立ち直れなかったが、レジェロはこれでなかなか執念深かった。文官として王宮に仕えながら独学で魔術理論を学んだのだ。努力を惜しまぬ上に頭だけは良かった彼は、普通なら魔力のない人間に理解できるはずのない魔術理論を修めることに成功し、挙句の果てにはそれを進化させたのだ。

その努力は周囲からも認められた。全く素質のないところから自分では使えない魔術を進化させてみせたレジェロに、魔術師長から魔術師にしか纏うことの許されないローブを贈られたのである。彼のためだけに作られた、特別製である。

レジェロがそこまで詳しく説明することはなかったのだが、それだけでも十分だった。

「えーっ！！すごいっ！どうしたらそんなことができるの！？レジェロは子供の頃から頭が良かったけど、そんなことまでできるんだ…すごいなあ」

レジェロにとっては予想外の反応だった。すっかり感服したソナチネはニコニコと笑いながら素直な賛美を送っている。その、真っ直ぐな感情を向ける彼女を前に一瞬呆けてしまう。

（…そういやこういうやつだったか。才能もないくせに諦めの悪い人間とか言われたからなあ…）

疑心暗鬼になっていた。魔術師長に認められたとき、それはそれはやっかまれたので。

子供の頃もソナチネだけは斜に構えることのない、素直な態度で接してきていた。王子の遊び相手として集められた子供たちの中で、二つ年下の女の子という彼女も浮いていた。最初の頃は、同じく周囲から弾かれつつあったレジェロによく纏わり付いてきたものだった。その後、ソナチネが男の子以上に活発だとわかると王子が自ら輪の中に引き入れ、同時に二人の交流もほぼ終わった。

それはそれとして。

「…結局、なんか用があるのか？」

「ん？　ああっ！！　そうだった。相談したいことが一つ」

「！！！？　頼むっ、それだけは止めてくれ！！　俺には責任は取れん！！」

「まだ何も…。その言い方はやっぱり何か知ってるんだ…」

「知らん。俺は何も知らん。お前もここには来ていない。そういうことにして頼むから今すぐ出てってくれ」

今度こそ実力行使で部屋から追い出そうと、ソナチネの腕を取ろうとするレジェロだが、そう簡単に素人に手をかけられるほど彼女も甘くはない。相手の動きを見て、椅子から立ち上がり身をかわした彼女は素早く彼の後ろに回りこむ。

「やっぱりわかってるじゃない！！ねえ、レジェロは頭がいいのが自慢でしょう。私の相談に乗ってほしいの。どうすれは私は逃げられる？というか陛下の異世界行きは止められないの？魔術師長と知り合いならわからない？」

一気に言ってしまう。これで聞かなかったことにはできないだろう。往生際悪くも耳をふさぐレジェロだが、ソナチネは彼の耳元でわめいたのだ。

「お前は疫病神だ…」

「そこまで言う！？　待ってよ、そんな深刻なの？　私、生き延びられる？」

がっくりと両肩を落とし、しゃがみ込むレジェロに詰め寄るソナチネだが、思いもかけない言葉を返される。

「いや…そりゃ死にゃしないだろう。なんだそんな心配をしていたのか？」

呆れ顔で言われ、肩透かしをくらうソナチネ。

「相談か…。言っておくがお前の相談に乗るのは今の俺にとっては非常に都合が悪い。だがそんなことで悩まれていても時間の無駄だな。特にお前の頭じゃ。しょうがない、きいてやるから一応話して

みろ」

失礼な言葉を挟まれムっとするソナチネだが、せっかくその気になってくれたのだから、と話し出す。

「……で、今は逃亡中、と」

一昨日からの一連の出来事を順を追って話した。自分で消化しきれないので、あったことをありのままに言うだけだ。

レジェロはというと、頭を抱えてうめいていた。

「～それで、なんで俺の部屋に入ってくるんだ…。理解できん。何故だ、嫌がらせか！？そんなに俺を恨んでるのか！？」

「は？　恨む？」

相談しているのに、いきなり心当たりのない話が出てきて、目を瞬かせる。子供の頃の話だろうか、ソナチネの方にはレジェロ恨むような思い出はない。むしろ姉のように頭のいい彼には憧憬を抱いていた。

「…もしかしてお前はきかなかったのか？」

「何を？」

「う、えーっとだな。うん、知らないならいいか。忘れてくれ」

再び予想外の反応をされて少し悩むレジェロだが、知らないのなら自分から蒸し返すこともないかと思い、なかったことにした。その過去の件で、ソナチネに対して弱味のあった彼は、自分の仕事は置

いて、ひとまず真面目に彼女の相談に答えることにした。

そこでようやく、二人とも椅子に座る。

「まず、陛下の異世界行きだが。確かに騎士団長が人を送り込んで調べてるな。魔術師長も探られていることに気づいている。だが…」

難しい顔で手をあごにやる。考え込むときの彼のクセだ。

「お前には気の毒だが、陛下を止めるのは無理だろう。この異世界行きの魔術を作ったのは陛下ご本人で、魔術を行使するのも陛下だ。つまり陛下がその意思を変えない限り、まわりから阻止することはできないな」

「陛下は魔術が使えるの！？　初めて聞くわ」

「ああ。元々魔力お持ちで、そのお立場から、師について修行をするということはなかったそうだが…コトネ様のためにこの３ヶ月で魔術を修めたそうだ」

ソナチネは、どこまで執着心が強いのだろうと背筋を凍らせる。魔力を持つとはいえ、魔術の修行とは普通は何年もかかるのではないのだろうか。

「それなら、コトネ様を連れて戻ってくればいいじゃない！！」

「いや、おそらくだが、あちらに一度渡ってしまえば戻っては来られないという話だ」

「じゃ、行けるかどうかまだ試してないってこと？」

「そうだな、理論は完成しているだろうが…術者である陛下本人がその場で調整する　んだろう」

「そんな無茶なことを…するつもりなんだ」

なんという執念。やはり国王は普通ではない。

「とにかく、アレグロ陛下を国に引き止めるのは不可能だ。それはいいな？」

「よくはないんだけど。」

「だろうな。あとは王位の継承権か？　そうだな…それに関しては言い換えればコン・フォーコ家とコン・ブリオ家の争いってことになるな」

「コン・ブリオ家の当主は確かに老齢だし、病気も重い。その弟もマルカート伯の言った通りだ。この二人は除外していい」

「そんなに簡単に考えていいの？本人がお年寄りでも自分の子孫に王位を継がせられるなら、国王になろうと考えたりしない？」

昨日からの疑問を差し挟む。

「いや、どうだろうな。コン・ブリオ家の兄妹についてはお前の方が詳しいだろう？あの二人が国王にっていうのは、親でもためらうぞ」

「そ、そうかな」

顔を引きつらせたソナチネはコン・ブリオ家の二人のうち、妹のフェルマータのことを思い出す。思い浮かんだのは最後に見た彼女の凄まじいとしか言いようのない姿だ。

あれは、そう、一年半ほど前のことだったか。

文官の状況判断　そのいち（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の状況判断　そのに

１１　文官の状況判断　そのに

当時、姉はまだ国王の婚約者だった。将来の王妃として彼女は様々な夜会に参加しており、ソナチネもアレグロの参加できないような場合はその付き添いとして出席していた。そして事件は姉妹二人で招待された、ある夜会で起きた。

「あら、誰かと思えばコン・フォーコ家のじゃじゃ馬ではないの」

まずは、標的である姉ではなくその妹に爆弾は投げつけられた。

声をかけたのは、派手なドレスに身を包み豪奢な宝石類をつけたコン・ブリオ家の令嬢フェルマータであった。ソプラノと同い年で美しい黒髪を持つ艶麗な姫君だが、この日は少し様子がおかしかった。彼女の長年の横恋慕は有名だった―ソナチネの姉・ソプラノの婚約者である国王アレグロをなんとか自分のものとしようとなりふりかまわず行動していたので、王都の庶民でさえそのことを噂するほどだった。

両親であるコン・ブリオ家の当主夫妻は、娘の行状を諫めるでもなく放置していた。本来なら、フェルマータとて大貴族の令嬢だ、早い段階で適当な相手と娶わせるべきであろうに。

一方、ソプラノだって鬼ではない。何より婚約破棄をソプラノ本人が望んでやまなかったのだから、さっさと譲ってしまえばよかったのだが―フェルマータその人に問題があった。

淑やかに手に持った扇で口元を隠し、罵るフェルマータ。

「いつ見ても、貴族にふさわしくない無骨で貧相な格好ね。まった

く、こんな妹を放置するソプラノにも呆れるわね。国王陛下だって、婚約者の妹がこんなのでは恥ずかしいでしょうよ」

性格が悪いのだ。ついでに口も。何とか国王を手に入れようと努力するのはいいのだが、彼女の場合ひたすら敵―すなわちソプラノ―を攻撃する形となっている。

ことあるごとに悪評をふれ回られたり面と向かって罵られることに、ソプラノは苛立った。フェルマータと違い体面を気にする性質であった彼女は表立って対立することはできず、いつも言い返さずに笑顔でかわすばかりだったからだ。そんな理由もあって素直に婚約破棄をしてフェルマータを喜ばせることは願い下げだった。

恋敵を罵るフェルマータ嬢とそれを儚げな笑顔でかわすソプラノ嬢。そんな評判がたち、評価の落ちたフェルマータはさらに攻撃を増した。その対立が頂点に達したのが、この夜会であった。

＊　＊　＊

「それで、気が付いたらフェルマータが姉上に飛びかかってたのよね」

今でもソナチネにはよくわからない。何故そこまでフェルマータが荒れていたのか。それまで普通に言葉をかわすだけであったのが（一方的な罵りだが）、突然フェルマータはソプラノめがけて飛び掛り、その頬に爪をかけようとしたのだ。横にいたソナチネだけではなくまわりにいた招待客も加勢して、ようやくフェルマータを抑えることに成功したが、それまで暴れに暴れた彼女のドレスも髪もめちゃくちゃだった。姉に怪我がないことが何よりだった。罵られて

いたこちらではなく、フェルマータがなぜ暴れなければならないのか。

「女の世界はわからん、が。ソプラノ様は完璧過ぎたんだろうよ」

「うーん。まあ、嫉妬だったのはわかるけど」

女性としても人としてもソプラノにはかなわない、そんな想いに追い詰められていたのだろうか。

「やっぱりあの件があるから、フェルマータ嬢を女王に、という話にはならないだろう」

案の定この事件の話は王都に広まり、父であるコン・ブリオ家当主はフェルマータを屋敷から出さなくなった。この一年半、彼女の姿はとんと見られない。それはソプラノが婚約破棄しても、国王とコトネの結婚が発表されても同じだった。ソプラノと同い年の彼女も立派な嫁き遅れの範疇なのに大丈夫なのだろうか、と自分もその範疇に入りつつあるソナチネは思わずにはいられない。

「でもそれならフェルマータの兄上様は？　会ったことがないわ」

「俺も直接会ったことはないな。歳が離れているから今は３０前くらいだったと思うが」

それなら国王として丁度良いのではないのだろうか。２１歳のソナチネでは若輩だが、３０前なら落ち着きも経験もそれなりに備わっていることだろう。女王より王の方がまわりの混乱も少なくてすむ。

「だが、あの人の噂を知らないのか？」

「うわさ？」

「ああ。あー、でもな、何の噂かは俺の口からは言えん。噂は噂だからな」

「何よ、そこまで言っておいて」

「噂を吹聴したりしたら、俺の品性が落ちる。とにかく、センツァ様のことは気にしなくていい…本人も国王は願い下げだろうよ」

そんな風に言い切れるということは、その噂とやらはかなり確実性が高いのではないのだろうか。事実、コン・ブリオ家の長男・センツァが王位に相応しくない事情を抱えているのなら、ここで教えてくれてもいいのに、と腑に落ちないソナチネであった。

「まだ何かあったよな。そうそう、マルカート伯の思惑だろう。他の重臣たちも」

それほどまでに話を変え、さらには追い出したいのか、急いでソナチネの悩みを解消しようとするレジェロは早口で言った。

「伯爵のことは心配するな。評判通りの温厚な人物で大体合っている。確かに野心はあるだろうが、早いうちから女王にとりいっておいて今の地位を磐石にしようってところだろう」

「陛下が味方につけている他の重臣たちも似たようなもんだ。お前なら操りやすい、誰でもそう考えるだろ」

「…いつも思うんだけど、私ってまわりに馬鹿だと思われてない？

そりゃ姉上ほど頭良くはないけどさあ。そこまで馬鹿じゃない、はず」

「そうか？今、馬鹿にした憶えはないけどな。そんなこと言ったか？」

「あれ？　そう？　私の考えすぎ？」

自分で証明したようなものである。どこまでもバカ素直なソナチネに少しばかりの不安をおぼえるレジェロだった。

ついでに大臣一人ひとりの詳細まで噛み砕いて説明した。ソナチネにしてみれば、なんとなく思いつきで訪ねただけなのだが、思いの外、良い人物のところへ来たと言える。

ソナチネの目下の悩み、まわりの思惑などが少し把握できたが、知らぬ間に長く話し込んでいたおかげで時間の経過に気が付かなかった。

大方の話が終わった頃だった。

「…もう日が陰ってきてない？」

「ん？　もうこんな時間じゃないか！？　あああ、仕事が…」

ソナチネとて時間がない。いくら彼女でも舞踏会そのものをすっぽかすつもりなどない。いつまでも逃げていてはいられない、立ち上がり急いで部屋を出ようとさっさと扉に手をかける。

「じゃ、ありがとう！！　このお礼は必ず！！」

「えっ、おい。ちょっと」

散々つき合わせておきながらあっさりお礼を述べ去っていくソナチネに、レジェロの伸ばした手と言葉は届かなかった。ひっかき回すだけ回していった、突然の嵐のような幼馴染の訪問はようやく終わったのだった。

「…あれが女王か…」

暗くなりつつある仕事部屋に一人残されたレジェロは先行きに大いに不安を感じた。さらに「あいつ背ばっか高くなって…」とあまり身長差がなかったことにちょっとだけショックを受けるのだった。

文官の状況判断　そのに（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

くすりと笑える後書きって好きですが、中々浮かばないもんですね…。

魔術師の申し込み（前書き）

魔術師とか出てきますが、魔法はカケラも関係ないです。
ひたすら会話と人間関係の描写に徹してます。

魔術師の申し込み

12、魔術師の申し込み

レジェロの部屋を勢い良く飛び出したソナチネだったが、彼女にしては珍しく、この後どうするかちゃんと考えがあって行動していた。

近衛の詰め所や騎士団の宿舎へ行くと、すぐに伯爵の迎えに捕まるのは目に見えている。今は捕まりたくないソナチネは、人目を避けながら自分の計画通りに動いた。

＊　＊　＊

その夜、伯爵家の屋敷で開かれた舞踏会は招待主の心意気を示してか、個人で主催するものにしてなかなか盛大なものだった。飾られた花々は南国から特別に取り寄せた一級品、美しい音楽を奏でる楽団も一流どころである。伯爵邸の舞踏室、大広間や客間などが開放され廊下を挟んで一続きの会場として設えられている。代々続くマルカート伯の屋敷には歴史ある立派な調度品が揃い、踊ることに疲れてもそれらを鑑賞しているだけで楽しめる。

招待客は紳士貴顕や騎士候たちまで幅広く、また着飾った令嬢たちも混ざって華を添えている。彼らが集められた表向きの理由は伯爵夫妻の結婚記念日を祝うものなので、少々幅広すぎる感もあるが、現職の法務大臣の主催である、異を唱える者などいなかった。

招待客が揃い、舞踏室で一曲目のダンスが始まった頃、いきなり姿

を消して伯爵夫妻に非常に気を揉ませた影の主賓がようやく伯爵邸へと自らやってきた。

影の主賓―コン・フォーコ公爵令嬢ソナチネが会場に足を踏み入れたとき、その衣装を見て驚いた招待客が半分、驚かなかった招待客が半分だった。

ソナチネの衣装は非常によく似合っていた―白が基調で要所には青を配し、金のボタンの並ぶそれは、彼女の所属する第一騎士団の式典用の礼装である。顔を上げ、礼装用の白いブーツで颯爽と歩く彼女はどこから見ても凛々しい騎士である。

普通なら全員が驚くのだろうが、これがソナチネにとって夜会でのいつもの正装である。驚かなかったのはこの舞踏会が彼女の婿探し（？）であることを知らない一般の招待客や令嬢たち、驚いたのは彼女の婿候補として呼ばれた青年たちとその関係者及び伯爵邸の人間である。それが丁度半々だったということだ。

ソナチネが舞踏室に入っても、しばらくは誰も声をかけなかった。主催者である伯爵夫妻は二人とも主催者として最初の一曲を踊っているところ、本来ならダンスが始まる前に婿候補を彼女の元へ紹介しておくはずだったのだがそれができなかった。

また、婿候補たちも騎士の礼装で来たソナチネに自らダンスの申し込みをかけることもできなかった。彼らの方は夜会服がほとんどだが、同じような服装をした人間をダンスへと誘えるものだろうか。

そんなソナチネに、夜会での恒例の行事が起きた。

「あ、あのソナチネ様。ご機嫌よう」

「ああ、これはアマービレ様ではありませんか。ご機嫌よう。今宵は楽しまれておいでですか？」

爽やかに、挨拶をしてきた顔見知りのご令嬢に笑顔をかえすソナチネ。その笑顔に頬を赤らめるのは可憐なご令嬢。

夜会でのソナチネはご令嬢たちの憧れの存在である。凛々しく整った顔立ち、騎士の正装の映える細身の長身、さらにいつも紳士的な態度が崩れず優しい。そして何より同性であることは、特に若く初心な令嬢たちの心の垣根を取っ払いやすい。

最終的に、ついたあだ名が「白銀の騎士様」だ。ソナチネの銀髪と白い正装からついた、ご令嬢たち憧れの男装の麗人の呼び名である。

一人が勇気を出して声をかけると、あとはぞろぞろと湧いてくる。あっという間に、パートナーそっちのけとなったご令嬢たちに囲まれたソナチネはますますダンスに誘いづらい存在となる。その姿はむしろ男性たちの羨望の的だった。

しばらくは4、5人のご令嬢たちに囲まれ、ダンスに参加することもなく隅に置かれた長椅子で談笑していたソナチネだった。が、ふと顔を上げるとここにいるはずのない人物を見かけた気がして、思わず輪の中から出てしまった。そこへご令嬢のものではない声がかかる。

「不躾なお願いなのは承知していますが、少しお話できませんでしょうか？」

心の中で舌打ちし、声に振り返る。せっかく作ったご令嬢たちの壁を自分からでてきてしまった。

そんな内心を覆い隠し、（ソナチネにだってそのくらいはできる）

声の主、歳の頃は２０代半ばくらいの青年に向き合った。

「ああ、これはご無礼を。本当はマルカート伯爵に紹介いただく予定だったのですが、伯爵は多忙なようでして。自分で紹介させてください。私は宮廷魔術師を勤めます、ヴィーデ・スピリトーゾと申します。以後お見知りおきを」

口で言っているほど遠慮の色のない、余裕さえ見られる笑みで挨拶した度胸のある青年・ヴィーデを見て、ソナチネは驚いた。

（すごい！！これは陛下以上なのでは…）

国王アレグロや美女と名高い姉のおかげでソナチネは美形に耐性がある。ヴィーデはそんなソナチネをして目を見張らせるほどの超絶美形である。濡れたような輝きを放つ黒い髪は肩下までのばされ、瞳は煙るような灰色の入った紫、白皙の顔は達人によって彫刻された一級品の芸術であろうかというほど完璧な男性的美をかたどっている。その低い声までもが心地よく響いて美しい。

ここで彼がソナチネの手をとり、口付けでもして見せたら大した見世物となっただろうが、そこまで気取るつもりはないらしい。そんなことをされたら彼女だって全力で引いただろうし。

「魔術師でいらっしゃる？　あ、えー私はソナチネです。ソナチネ・コン・フォーコです」

思わず聞き返してから、我にかえり自分も名乗る。

「ああ、もちろん存じていますよ。それに、私は正真正銘、宮廷に仕える魔術師です。と言っても、ここに杖はないので証明できませんが。伯爵もいませんし」

その美貌で朗らかな態度に出られると、なかなか圧倒されてしまうものがある。

「あの、いえ、疑ったわけではなく。失礼いたしました。それで…？」

「もちろん、一曲お相手願えないかと。いかがでしょうか？」

余裕の美形さんは、少々あせるソナチネに追い討ちをかけるような言葉を発する。

彼女は動揺を表に出さないようなんとか踏み止まっているつもりだが、突然始まった二人のやりとりを、固唾を呑んで見守っていたご令嬢たちが一気に色めきたったので本人の努力はあまり報われなかった。

つまり、ソナチネが舞踏会で異性からダンスに誘われたのは、本当にこれが初めてのことだったのだ。

これまで姉についてさまざまは夜会に出席していながら、ソナチネは舞踏会へ女性用のドレスで行ったことはなかった。何しろ自分のお披露目でもズボンだったのだ。

その代わり、女性と踊ったことなら何度もあった。ソナチネから誘ったのではなく、いつも勇気を振り絞ったご令嬢から声をかけられる。そんなとき、彼女は愛らしいご令嬢たちに目を細めながら相手をする。

「…私はかまいませんが」

嘘である。

とてもかまう。ソナチネはいつも女性とばかり踊るので、男性パートなら自信があるのだが、女性パートとなると最初に舞踏の教師に

ついて習って以来踊っていない。だが、ここでそれをヴィーデに告げるわけにもいくまい。しかし、彼は本気で騎士の服を着た人間と踊るつもりなのだろうか。

ええい、なるようになる！！と破れかぶれとなりながら差し延べられた手をとろうとしたソナチネに、救いの神が現れた。

「ソナチネ様！こちらにいらっしゃったのですね。お出迎えもせずに申し訳ありません」

忘れかけていたが、今回の主催者マルカート伯爵夫妻がようやくダンスの輪を抜け、ソナチネのもとへとやってきた。遅刻し、勝手にやっていたソナチネが悪いのだから、彼らが謝る点はどこにもない。

「とんでもありません！　遅れた私が謝罪しなければならないところです。せっかく色々とご用意いただいていましたのに…」

救いの神に、ドレスやら装飾品やらの準備の件も込めて恐る恐るといった体で謝る。確信犯だったのだからもう少し堂々としているべきではないだろうか。

「まあ、ソナチネ様。お気になさらずに。また次の機会がありますわ」

伯爵夫人の最後の一言に戦慄をおぼえるソナチネ。

「それで、ソナチネ様はもうスピリトーゾ君と会われたのですね。ほら、例の件の一人ですよ、彼は」

伯爵の言葉の後半はソナチネ一人へ密かな声で告げられた。婿候補

という意味だろうが、さすがにソナチネにだってわかってきている。やっぱり私バカだと思われてない？といらない方向へ思考を向けていたソナチネに無情な声が突き刺さった。

「どうやら邪魔をしてしまったようですね。どうぞお二人でお楽しみください」

救いの神が降り立ったのはほんの一瞬であったらしく、気を利かした伯爵夫妻はあっと言う間に別室へと消えた。

先ほどの危機的状況は何も変わっていなかった。

横合いから声をかけられ少し調子を崩してしまったが、再びダンスを申し込むヴィーデに、今度こそ大人しく手をとられるソナチネだった。

「…もう少し楽にして下さったらいいんですよ。エスコートは私の役目です」

ダンスが始まってしばらく経ったところで、ヴィーデが話しかけた。はたから見ると奇妙な二人組である。ソナチネはその衣装と耳のあたりまでしかない髪のせいで男にしか見えず、まるでヴィーデと二人、男同士で踊っているようなのだ。そのせいで周囲の視線を集めてしまい、彼女の慣れない女性パートでの踊りはますます覚束ないものとなっている。踊っているとは思えないほど、足がついていけていない。

「…申し訳ありません。足だけは踏まないように気をつけます」

こうなると完全に赤面してしまい、いたたまれないソナチネは普段の彼女からは考えられないぐらいの小さな声で詫びる。緊張のあまり、喉までうまく機能してくれない。

「いえ、大丈夫です。…失礼なことをおききしますが、ダンスは不得手で？」

むしろ少し上機嫌となったヴィーデが尋ねた。彼は長身のソナチネよりもさらに背が高い。彼の目には俯いた彼女のつむじが見えるだけで、その姿は彼が前評判として聞いていた「白銀の騎士」というあだ名からは想像すらしなかったものだった。初対面の彼は彼女を「こんなに緊張しているとは、純情で可憐な姫君ではないか」と何か違う方向へ印象を抱いたのだった。

余談だが、ヴィーデの方もなかなかすっとぼけた人物だ。彼はいつも己の美貌が視線を集めることに慣れているためか、自分たちが周囲の注目を引く理由をあまり深く考えてはいなかった。いつもと違い相手のドレスに躓く心配がないことも、ソナチネの手が剣だこで硬くなっていることも、甘い香水の香りが漂ってこないことにも普通なら違和感を感じるはずなのだが。

「いいえ、そういうわけではないんです」

女性パートが苦手なだけです、とは心の中の言葉だ。

「ところで、ソナチネ様は私がお誘いした理由はご承知ですよね？」

ダンスのステップを合わせることに必死のソナチネだが、その言葉に早速おいでなすったか、と身構える。

「承知しているつもりです。あの、ヴィーデ様はどうお考えで？おかしな話だとは思われませんか？陛下のことです」

状況に負けていられない、とばかりに強く尋ね返す。

「ああ…。私は宮廷魔術師だと申し上げましたね？実は陛下の魔術の完成に微力ながらもお手伝いさせていただいたのです」

おかしなことだと思っていたら手伝いなどしませんよ、と言外に伝えてくる。

「…では？」

「はい。もちろん、名乗りを上げさせていただくためにこうしているのです」

ここぞ、とばかりに効果音さえつきそうな破壊力抜群の美形の微笑みでソナチネの顔を覗き込むヴィーデ、さすがの彼女も元から紅潮した顔がさらに温度を上げていくのを感じた。このまま腰砕けになってしまいそうな自分を、鍛えた筋肉と騎士の根性がなんとか支える。

（どど、どうしよう。心臓苦しい。え、何、恋に落ちたとか？　私は面食いだったの！？）

経験したことのない動悸が胸を襲う。いや、いくらなんでもだめだ。婿候補が美形だったので決めたとか、恥ずかしすぎる――――。

「少し、私自身のことをお話してもよろしいでしょうか？私の両親は幼い頃に亡くなり北の地方の孤児院で育ったのですが、１２歳の

とき現在の師に見出され、魔術の修行を始めました。今は魔術師長のもとで、魔族との間で共同で魔術の研究を行う計画がありその調整役を務めさせていただいています」

すでにダンスどころではないソナチネを置き去りに、自己紹介を続けるヴィーデ。相手の空気を読んでないあたり、やはり彼は大物だ。

しかし、これで調整役が務まるのだろうかと心配にもなる。

「今は国内におりますが、魔族との連携が本格的になりましたら、行ったり来たりの生活になるかもしれません」

上機嫌のまま話すヴィーデは、そうはなっても決してソナチネ様に淋しい思いなどさせませんよ、安心させるように笑った。

再び動悸が激しくなるソナチネだが、それでもふと疑問がわく。

「そういえば、先の魔族との戦争のときにはどうされていたのですか？」

魔術師なら、一緒に従軍していたのではないのだろうか。しかしヴィーデの容姿なら話題にならにはずもないのに一度も彼の名をきいた覚えがない。

途端に悲痛な表情を浮かべるヴィーデ。美形の苦しげな表情はそれだけで絵になる。

「実は魔族の侵攻が起こった当初の頃、私は西の地方の駐屯地にいたのです」

ここでダンス曲が一旦終了したのだが、話が途中だったのでヴィー

デの導きでひとまず二人で端の長椅子に落ち着いた。ソナチネは慣れないダンスがようやく終わり、話をきくことに専念できた。

そして、ヴィーデの話によると。

ヴィーデと、彼が派遣されていた西の防衛を担当する第三騎士団は当初、魔族の侵攻に対し不意打ちをくらった形だった。駐屯地が突然の攻撃にさらされた時、運悪く魔族の魔術の最初の一撃をくらったのがヴィーデ達だったそうだ。

「予想外のことでして、防御が間に合いませんでした…。私はこうして運良く生きていますが、一緒にいて亡くなった騎士の方もおられました…私の責任です」

「そんな…不意打ちだったなら仕方がないです」

「いえ、それが事実です。しかしその時私は重傷を負いました。怪我を負った私を助けてくださった方がいて、すぐに王都へ送られました。その後は王都で怪我を治すことと、私の受けた魔族の魔術の特殊性を研究する役目をまかされたので掃討軍には従えず、ずっと王都にいたのです」

「しかし、失礼ですがそれでは今のお役目はおつらいのでは?魔族に…恨みはないのですか?」

「そうですね…親しくしていた騎士の友人を一人亡くしました。しばらくは彼のことを思い出して、申し訳ないといつも謝ってばかりでした」

その悲しみと後悔が消えたわけではないことが、抑えた表情から伺えた。

「しかし、友人は豪気な人間でした。いつまでも私が謝ってばかりいると死んだ彼が背中を叩きに来るぞ、と彼の奥方にも言われました」
生前からそういう男だったもので、と儚げに笑う。

「私の中に魔族への恨みがないと言えば嘘になります…ですが、後ろばかり見ているのはやめようと思いまして。魔術師長の命令を受け入れました」

あれで彼らはけっこう普通の人間と変わらない感覚を持っているのですよ、と締めくくって笑った。

話が終わったヴィーデは「いつまでもあなたを独占していては恨まれますから」といってあっさり別室へ下がっていった。だが、最後に「私の気持ちは真剣です」と跪いてソナチネの手を握り、彼女の顔を再び真っ赤に染めていった。

魔術師の申し込み（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の言い訳

13.　文官の言い訳

ヴィーデが言っていた通り、彼が誘ったことで勢いがついたのかその後のソナチネにはひっきりなしにダンスの申し込みがなされた。自分なりに仕組んだ防衛策も失敗したようだ。ソナチネは元来、運動神経の良い女性である。最初のはボロボロだったが、なんとか勘を取り戻し次々と現れるパートナーの相手をうまくはないが大過なく終えることができた。

十数人ほど踊っただろうか。体力のあるソナチネでもさすがに限界を感じ、またそろそろお開きの時間が近づいてきたこともあり、彼女は伯爵夫人に頼み少し休憩のできる部屋を用意してもらった。婿候補の顔見せはほぼ終わったのだから帰ってもよいのだろうが、その前に少し休みたかった。

通されたのは二階の客間の一室、冷たい物をお持ちしますわ、と案内してくれた侍女に言われ、部屋にあった寝椅子にソナチネはもたれ込んだ。

（疲れた…このまま寝てしまいたい。）

だが、病人でもあるまいし他人の屋敷で寝るわけにもいかない。

（でも、あんまり候補者たちも乗り気でないのがいたような…）

今までの婿候補たちのことを思い出す。

はっきり言って、最初に踊ったヴィーデ以外はあまり印象に残って

いない。まあ彼の後では誰も彼も霞んでも無理のない話なのだが。

（なんて言うか、外見も中身もいい人っぽいし。あんな人よく見つけてきたものだわ）

伯爵もヴィーデが一押しらしく、あの後も彼について何かと教えてくれた。

（それにあっちから断られちゃあなあ…）

他の候補者の中には踊りだした途端ソナチネの耳に飛んでもないことと囁いてくれた者もいた。「父には話していないが、自分には他に心に決めた相手がいる」ときたのだ。さすがに彼女も苦笑するしかない。

（重臣たちの関係者が多かった、かな？）

重臣の親類縁者が多かった。皆、文官だったのはソナチネが武官だからだろうか。重臣たちに後押しで来た者の中には本人は乗り気でないのでは、と思えた人物も先の彼だけではなく少なからずいたのだ。彼女にとってはこれまた失礼極まりない。

それでも本気で申し込んでいると見られる候補者たちはヴィーデを含んで４，５人はいただろうか。十数人から４，５人まで絞れたのだ、ソナチネにとっては楽になったと言えなくもない。

（それにしても、昼間に教えてもらっておいて助かった。あんなに次々紹介されても何がなんだかわからないもの）

重臣たちの力関係も、さらにいうとその名前も役職までもソナチネは疎い。レジェロの説明がなかったら、彼らの名前から誰の縁者なのだろうと推察することさえできなかった。

「ん？」

ガバリと寝椅子から起き上がる。今の今まで完全に頭から抜け落ちていたが、ソナチネをご令嬢たちの壁から抜け出させるきっかけとなった人物を忘れていた。

「お待たせいたしました。檸檬水をお持ちしましたわ」

丁度そこに入ってきた侍女に詰め寄る。

「招待客たちはまだいる！？」

「え、は、はい。お帰りになられた方も少しいらっしゃいますが…」

いきなり詰め寄られ、お盆を取り落としそうになりながらも、侍女は教えてくれた。

「ありがとう、すぐに戻ってくるから飲み物は置いといてもらえる？悪いわね」

侍女の返事も聞かず、ソナチネは部屋を飛び出した。

＊　＊　＊

もう帰ってしまったのではないかと思ったが、意外とまだいた。

「ちょっと、何でいるの」

「ちっ、帰る時間を誤ったな。…それで何か用か」

「来るなら来るで、何で昼間に言わないの!?　あなたのせいで私はクタクタよっ」

昼間に散々世話になったレジェロである。伯爵邸のバルコニーに隠れるように手すりにもたれていた。確かに彼を見かけたせいでソナチネはご令嬢たちの壁を出てしまったのだが、それは別に彼の責任でもない。

ソナチネの言いがかりにムっとするレジェロは、昼間の妙な格好とはうって変わってきちんと男性用の夜会服を着込んでいた。つまり正式に招待された客の一人だということだ。

「悪いか。俺だって国王陛下の署名入りの招待状が来たら、出席しないわけにいくもんか。それに話す前にお前が出て行ったんだ」

「…それはつまり」

「言っとくけど、俺だって不本意だ。心配すんな、お前の邪魔はしないから」

レジェロの言葉に、バルコニーの手すりへがっくりと両手をつく。

「有能な青年達、かあ」

成る程、ソナチネの一つ年上、２２歳にして文官として一つの部屋を与えられている待遇を鑑みるとレジェロは優秀なのだろう。重臣たちに関してあれほど情報を持っていたことからもそれは察せられる。その上彼は魔術師長とも交流があることで知られているのだ、見るところから見れば適任なのかもしれない。

「で、どうするんだ？」

さっきより何故か楽しげなレジェロがきく。

「今、きかれてもねえ」

一日で何を決めろというのだろう。４，５人に絞ることはできるかもしれないが、本人が乗り気かどうかだけで決めていいのだろうか。

「ヴィーデのことだよ。あんなの中々いないぞ。はっきり言っておく前には勿体ない」

「彼のこと知ってるの！？」

再びカチンとくる言葉が最後にきたが、恐らく大本命の彼は事実勿体無いような人物なので言い返さない。そういえば、魔術師長と懇意なレジェロなら知っていてもおかしくはない。

「ああ。一年ほど前からだが。あんなんだから他の女も放っておかないが、あれでけっこう硬いんだ。今のところ浮いた話もきかないな」

そりゃ、あの歳まで異性と関係がなかったなんてことはないだろうが、と付け加える。

「裏のあるような人間とも思えない…きいたかもしれんが、あいつは天涯孤独だ。口を挟んでくるような親類もいないから身軽なもんだぞ」

「ふうん。そうか…天涯孤独かあ」

「大した後ろ立てもないのに、ここまで来たんだ。立派なもんだよ」

夜も更け、冷えてきたのかため息が白く曇る。多少ひねくれた所のあるレジェロが人を褒めるのは珍しい。

「へえ。レジェロが人を褒めるなんて珍しい。丸くなったのね」

そういうと、レジェロは苦笑した。

「俺だって本当に優秀なら認めるさ。何より憧れの魔術師様だ」

話は終わったのか、少し苦い顔つきで「じゃ、寒いから俺は帰る」とレジェロはバルコニーを去った。

しばらくソナチネは一人でその場に残っていたが、客間に飲み物まで用意してもらったことを思い出し、あわてて部屋に戻った。舞踏会はいつの間にかお開きになったらしく、他の招待客は帰宅の準備に忙しかった。

文官の言い訳（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

不審者の告白（前書き）

緊迫するような雰囲気だけ、そんな話です。

不審者の告白

１４．不審者の告白

マルカート伯爵邸を辞したソナチネは、馬に一人騎乗し帰宅の途につこうとしていた。

舞踏会に乗馬で来る公爵家の姫君というのも前代未聞だが、ソナチネの場合はよくあることなので、いまさらだ。愛馬であるアニマート号は王宮の第一騎士団の厩舎にいるので、今乗っているのは自宅であるコン・フォーコ公爵邸にいた馬だ。

夕方、レジェロの部屋を出たソナチネは人目につかないよう注意しながら、大昔に子供だった国王アレグロたちと偶然発見した王宮の抜け道へと向かった。庭園や建物の裏、井戸端などをぬってつけられた道を辿り、どうにか見つからずに王宮を抜けだすことに成功した彼女は王都の内にある自宅へ帰ったのだ。

姿をくらましたことで、自宅へもすでに追っ手が来ているかと危惧していたのだが、幸いソナチネが王宮を出たことには気づいていないらしく、そこはいつもの閑散とした平和な場所のままだった。

自宅は現在の公爵である甥ラルゲットが母や祖母とともに領地へ引っ込んでいる上、ソプラノは嫁いで、ソナチネは騎士団の宿舎でほぼ寝泊りするので公爵家の人間は誰も住んでいないという状態になっている。

もちろん屋敷に人がいないのでは無用心であるし、建物や庭の世話をする必要もあるので管理人を置いてある。

ソナチネが今来ている騎士の正装は、その管理人夫婦の妻に繕いを頼んでいた物で、彼女はそれを着て舞踏会へ行けばご令嬢たちの壁

を作れることを思いつき実行したのだ。結局、失敗に終わったが。

馬を返さねばならないし、夜遅く王宮の宿舎まで帰るのも面倒なのでとりあえず自宅へ向かおうかと、伯爵邸の門を出たソナチネは馬を自宅の方向へと向けた。そこへ声をかける者がいた。男の声だ。

「ソナチネ嬢ですか？ソナチネ・コン・フォーコ嬢」

深夜にいきなり声をかけてきた者に対し、不審者かっ！！と咄嗟に馬首を伯爵邸の方向へ巡らす。騎士とはいえ女一人、夜更けに声をかけてきた正体不明の相手の人数も目的もわからず対峙するのは無茶だ、騎乗しているのだから逃げるが得策である。

「お待ちください。不審な者でもあなたに害をなす者でもありません」

相手はソナチネによく見えるようランタンを持ち出し、自分の姿を照らしだした。伯爵邸の門の外に灯りを見た覚えはないから、覆いでもかけてあったのだろう。

「よく見てください。私は一人です。武装もしていません」

なるほど相手の言うとおり他の人影は見えず、ランタンを持っている以外は手ぶらであることが掲げた手からわかる。闇夜に浮かんできたのは男物の夜会服姿、冷えてきたての外套なしでは相当寒いのではないだろうか。

しかし、相手がどんな武器を隠し持っているか定かでないし、仲間が隠れていないとも限らない。ソナチネは油断することなく大きな声で警告する。

「馬に蹴られたくなくば、その場を動くな！！」

「おや、それは痛そうだ。では動きませんので、よくご覧ください」

どこかおかしそうな柔らかい声で相手は答えた。先ほどの警告の声が伯爵邸の門番に聞こえていれば出てきてくれるだろう。新手がいないか周囲に気を払いながらも、男の姿を観察した。

夜会服姿だが、かぶっていた帽子をとったので見えるようになった顔は先ほどの舞踏会で見かけた覚えはなかった。風采は悪くはなく、外套を着ていない不自然さ以外は普通の貴族の青年に見える。歳は３０前くらいだろうか、髪色は暗く夜の闇に沈んでいる。

「何者だっ、答えよ」

そう簡単に名乗るとはソナチネとて考えていないが、助けを呼ぶ意味で再び大きな声を出す。

「私の名を聞けば、驚くと思いますよ。何しろあなたと同じ渦中の人物だ。私はセンツァ、センツァ・コン・ブリオです」

確かに驚いた。だが、そんな言葉に信用のおけるはずもない。

「…言うに事欠いて、公爵家を名乗るか！！センツァ様が何ゆえこのようなところにいるというのだ！！」

「いやあ、それが本当にこのようなところに立っているのです。信じてください、ほら」

男は懐から出した何かをソナチネへ向けて放った。飛び道具かとソ

ナチネは馬ごと避ける。

「見てください。別に爆発したりしませんから」

投げられたそれは月明かりをよく反射し、小さな物であるにもかかわらず夜闇に紛れてしまうことはなかった。それは小さな金属製の何かで、宝石が散りばめられているらしい。

だが、馬上からかろうじてわかるのはそれだけだ。馬から降りた途端襲われることも考えられるのでこれ以上近づきようもない。

そこへようやく救援が現れた。

「ソナチネ様っ！！」

伯爵本人が屋敷の男手を連れてやってきた。だが、伯爵はランタンを持つ不審者の顔を見て、驚愕の声を上げる。ナイスミドルがかなり乱れてしまっている

「っ！　センツァ様ですか！？　一体ここで何を！？」

「えっ！！」

信じられないその言葉に、ソナチネも二の句が継げない。

「ほら、言ったとおりでしょう？　困りましたね、ひっそりお会いしたかったのですが」

人物証明ができたことを当然のことと受け入れ、なぜか残念そうな不審者―コン・ブリオ公爵家の嫡男・センツァ―はゆっくりソナチネに歩み寄った。

センツァはソナチネの馬を刺激しないようゆったりとした動作で先ほど投げた物を拾った。

「見てください」

柔和な顔に笑顔を浮かべて、その小さな物をソナチネに差し出した。

「これは…」

それはペンダントトップだった。だが普通の品ではない、金の台座の上にコン・ブリオ家の紋章が宝石で描かれた、お金も手間も相当かかっているだろうと伺わせる逸品である。

なるほどこれを持つ人間は限られるだろう。盗品でなければの話だが。

「こんな時間に何ゆえ我が屋敷の前にいらっしゃるのです？」

そこへ伯爵から当然の質問がセンツァへ向けられる。伯爵は顔見知りらしく、既に警戒は解いているがかなり訝しげだ。

「こちらのソナチネ様にお話がありましてね。妹のせいで、普通に訪ねても門前払いをくらいそうなので、会えそうな場所に来てみたのです」

センツァはコン・フォーコ家の姉妹とは因縁深いフェルマータの実兄である。確かに訪ねて来てもそう簡単に会おうとは思わないかもしれない。

「ですが…。」

「伯爵、こちらは本当にセンツァ様なのですか?」

「面識はございませんでしたか?その通りです、我が家はコン・ブリオ公爵家とは少々縁がありまして、センツァ様とも何度もお会いしたことがあります」

伯爵のおかげで腰の剣を抜く前に知れてよかった、こっそりため息をついたソナチネだった。彼の意図がよくわからないが、確かに彼は渦中の人物だ。その考え—他の人間が誰も彼を国王に推さない理由を知りたくもある。

ソナチネは馬を降りるとセンツァに向き直った。

「知らぬこととはいえ、ご無礼をいたしました。それで、お話とは?」

「いやあ、本当に騎士の方なのですね。凛々しくていらっしゃる」

対するセンツァは、ソナチネの颯爽と馬を降りる仕草や、その前の勇ましい態度を思い妙に感心してみせている。

「そうそう、お話があるのです。ここで話しますか?私の現在の自宅がよいでしょうか?それともフォーコ家へご厄介になっても?」

「ソナチネ様、部屋は我が屋敷にご用意いたします。センツァ様も、時間が時間なのです、若い女性を連れまわすものではありませんよ」

あわてて割って入った伯爵によって、ソナチネはさっきくぐったばかりの伯爵邸の門を逆戻りした。今夜は眠れるのだろうか、と頭の

端で考えないでもなかった。

＊　＊　＊

伯爵邸の客間の一室にいるのは三人、ソナチネとマルカート伯、センツァである。

「伯爵、部屋をお借りしておいて図々しいことをお願いしますが、ソナチネ様と二人きりにしていただくわけには参りませんか？」

「しかし…」

これまでの行動が十分非常識だった相手の申し出に、ソナチネの安全が心配になったのか、それとも二人きりで何を言い出すのか不安なのか伯爵は逡巡する。

「私は大丈夫です。ご心配なく」

伯爵の視線を受け、腰に挿したままの剣をさりげなく示して請け合うソナチネ。相手が丸腰の上、その身のこなしから特に武術などを嗜む様子のないことを看破していたので彼女には自信があった。

伯爵はしぶしぶ部屋を出て行った。

「伯爵のおっしゃる通り、時間も時間だ。手短にお話しましょうね」

フェルマータも外見はあれでなかなかの美女と評判である。その兄センツァも整った容姿の持ち主であった。だが、その柔和な顔立ちには妹にはない温かみがあった。それでも彼女の兄だ、油断はでき

ない。

「私には王位につくことのできない事情があります。が、それを第三者に説明させては誤解や行き違いが起きないとも限らない、そういうわけで自ら説明しに参ったのです」

もうすでに、センツァの話に何の期待も寄せてはいなかったソナチネだが、それでもその肩が少し落ちる。

「…納得したわけではありませんが、わかりました。続きをどうぞ」

「なかなか苦労されているようですね。お察しします」

苦笑を浮かべたセンツァだが、すぐに表情を真剣なものに改める。

「私には現在、大切にしている生活と、大切にしている人がいます」

「私は彼と二人で生きることを選び、既に家を出ました。ブリオ家は妹が継ぎます。父も今では私を無いものと扱っています」

「……彼？　というと？」

何だろう、友達だろうか、それとも外に作った息子とか？

意味のわかっていないソナチネに噛んで含めるように言い直すセンツァ。繰り返すが彼は真剣だ。

「私の恋人です。私は同性しか愛せないのです」

「……っ！！」

驚愕で言葉を発せないソナチネ、大声を出さなかったことを褒めてほしいと思った。あまりに告白に無意識に身を引いてしまう。

そりゃ、誰も説明をしたかないわ、と頭のどこかで納得した。

不審者の告白（後書き）

お約束ですね。

読んでくださってありがとうございます。

国王の訪問（前書き）

底にあるのは軽いノリだけです。
そういうわけでここで早速折り返しです。

国王の訪問

15. 国王の訪問

その夜は、結局伯爵邸で泊めてもらったソナチネは、翌朝まだ暗いうちに自宅であるコン・フォーコ公邸へと帰った。帰り際、朦朧としている彼女に伯爵が「ソナチネ様はしばらく休暇扱いになります」と伝えてきたので急いで帰る必要もなかったのだが。

（そんな、もう仕事にも来るなってこと？　もう私は騎士ではないの？）

このまま、流されるように女王にされてしまうのだろうか。

暗澹たる思いを抱え、朝早く、ソナチネはようやく自宅へ帰ることができた。

ひどい顔をしてやっと帰ってきた令嬢の姿に、公爵邸の管理人であるカランド夫妻はおおいに慌て、ソナチネの世話を焼いてくれた。彼女が生まれる以前より公爵家に仕えている人たちである、幼い頃から実の子供のように可愛がってくれている。

しばらく王宮へ行かなくてもよいことを伝えると、カランド夫人より「では、しばらくお休みくださいませ」と強制的に自室の寝台へと押し込まれてしまい、疲労困憊であることは昨夜から自覚することであったソナチネは素直にその言葉に従った。

＊　＊　＊

「ネネ様、ネネ様」

慣れた寝台の中で深く眠りにつき、中々覚醒しないソナチネに優しいが有無を言わさぬ声でその幼な名を呼ぶ者がいる。慣れ親しんだ自分の寝台というのはそれだけで安らぎの象徴だ、そう簡単に起きる気配もない。

「ソナチネ様！　起きないとグラーヴェ先生からお説教ですよ！！」

昔の家庭教師の名前を出され、一気に目が覚めたソナチネはガバリと体を起こす。

「え！？　え！？　グラーヴェ先生が！？　今日は授業！？」

ソナチネとソプラノの家庭教師だったグラーヴェ女史は、非常に厳しいことで有名だった。優秀な姉と比べると、普通よりも少し鈍いかな？という程度で、勉強よりの外で体を動かすことの好きなソナチネはよく授業を抜け出したので頻繁にお説教をされた。一度など、逃げようとしたソナチネを捕まえた女史は、彼女を一日中正座させたままお説教を垂れた。声を荒げるわけでもネチネチと絡むわけでもないが、延々と正論を叩き込まれたソナチネはその日以来いまだに女史が恐ろしい。

そんな懐かしい思い出の名前を使ってソナチネを起こしたカランド夫人は、混乱し子供時代の頭に戻りかけた彼女を現実へと戻し、さらにどん底へとつき落とす。

「ソナチネ様！　大変です！　国王陛下がこちらにいらっしゃると、

使いの者が来ていました！！」

「なんで！？　もうやだ――――！！」

＊　＊　＊

起きた当初は完全に取り乱したソナチネだが、なんとか国王その人を迎えるに相応しいよう、身支度を整えた。といっても公爵令嬢らしいドレスに着替えるわけでもなく、白いシャツに細身のズボンという小姓の平服のような格好だ。不敬かもしれないが、相手が「お忍び」なのだ。正装でなくとも文句は言えまい。

午前中に来た国王の使者はソナチネがまだ寝ていることを伝えると「では昼食後になさるよう陛下に申し上げておきます。」と言い置いていったそうだ。起きていたらすぐにも来ていたのかもしれない。ソナチネが起こされたのは昼食前、その後急いで湯浴みをしたり、昼食をとったりしたので忙しかった。

「この度の我が家へのご来臨、心より嬉しく存じます――――」

現公爵は領地にいて使用人もほぼいない公爵邸だ、ソナチネ自ら本当にやって来た国王アレグロを出迎えた。

「ああ、堅苦しい挨拶はよい。ここはそなたの家ではないか、楽にせよ」

アレグロは美しい顔に笑顔を浮かべて、軽く手を振り公爵邸側のもてなしは不要と伝えてきた。

「突然やって来てすまないが、例の件で少々打ち合わせておきたい

ことがあってね。ソナチネが今日から王宮に来ないことを思い出したので私の方で訪ねたのだ」

公爵邸の厳格な雰囲気の漂う応接室に落ち着いた二人だった。アレグロにはもちろん近衛がついていたのだが、今は部屋の外へと追いやられている。

「…お呼びいただければ、参上しましたが」

むしろこんな風にいきなり訪ねて来られると心臓に悪い。察してほしい。

「頼みごとをするのだ。私から出向くのは当然だ」

その頼みごとの内容を思うと、逃げ出したくなるのは仕方のない話だ。黙ったままのソナチネにかまわず、国王は続けた。

「一月後に私の退位式を行う。そなたも知っての通り、わが国では国王は一度即位すれば死ぬまで国王だ。退位した国王などこれまではいなかった。…私が退位した最初の国王ということになる」

今日も麗しい声に自嘲がにじむ。

「だが、私の退位は悪しき習いとなると言えなくもない。よって、これから開く議会で私は退位を宣言するが、それはこの一回限りの特別な処置とする、と王室典範に記載させるつもりだ。ここまで理解はできたか？」

「つまり、陛下が退位した最初で最後の例となる、と？」

「そうだ。私の例を引き合いに出され、そなたが即位後に何かあって退位を迫られても困るであろう？」

「え？　いえ私は困りませんが…」

辞めてもいいと言ってもらえるなら、これほど気楽なこともない。

「王の足元がぐらついていては、国のためにならん」

美しいその顔で渋面を作る。国を思う気持ちまで失せたわけではないらしい。

「そなたには、私が退位式を終えたらすぐに即位式を挙げてほしい…ついでに結婚式も」

「…恐れながら、子供の頃、私は陛下を友達だと思っておりました」

すでに驚くことに慣れてしまったソナチネは、落ち着いていた。「ご無礼をお許しください」と続ける。

「しかし、陛下がお父上を早く亡くされて今の私よりも若くに即位され、遠い方になってしまわれました。ですが…陛下はご立派に国を治めておいでです。魔族の侵攻が起きたときも、その後の交渉時も陛下が国王で良かったとどれだけ思ったか！！　…私はその陛下にお仕えできて本当に幸せだと思っておりました。今でもそうです」

「ありがとう…それで？」

「私には無理です。何度でも申し上げます。どうか…私たちをお見捨てにならないでください…！！」

座っていた長椅子から立ち上がり、頭を深く下げるソナチネ。
だが。

「……すまない」

永遠かと思われる長い沈黙のあと、苦しげな声が落とされた。

国王の訪問（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

女騎士の出奔

16. 女騎士の出奔

話が終わると国王はすぐに王宮へと帰っていった。なんでも明日早速議会を開くそうだ。

自室へ引き上げたソナチネは寝台に再び倒れこみ、頭を抱えた。

（これでは決定的なこととなってしまう…。）

国王の突然の退位も、ソナチネの即位も。

（無茶だ…議会が納得するはずがない。）

議会は貴族だけではない、平民の中から選出された者たちもいる。貴族になら根回しがきくかもしれないが、平民出身の議員に承認されるのは至難の業だろう。最悪ソナチネは反逆者扱いだ。

（私にその覚悟もない、と。）

困難を乗り越え即位してみせようという覚悟も、国を治めようという気概もないのに。

（ひどい。）

どうしてこんな災難が降ってわいてきたのだろう。

＊　＊　＊

「ソナチネがいなくなったですって!?」

エネルジコ第一騎士団長夫人であるソプナノは、夫の言葉に大いに動揺した。安定期に入っているとはいえ彼女は身重だ、あまり興奮するのはよろしくない。

夫のレントはいつもの魔王皺を眉間に寄せ、その長身から美しい妻を見下ろす。

「ああ、今陛下が騎士団を召集して、捜索している」

国王アレグロによる公爵邸への突然の行幸の翌日である。今日もソナチネは名目上では休暇扱い、実際は自主的に自宅で謹慎していた。彼女に特に非はないはずなのだが、あまり出歩いて何かあっても問題なので、周囲もそれを歓迎していた。

議会は一時中断され、国王より捜索の命が出された。

「アニマート号は？　騎士団の厩舎に？」

「いや、昨日騎士団の者がソナチネに頼まれて公爵邸へ連れて帰っていたそうだ。公爵邸にはいないらしい」

「そう、ならあのこが自分で抜け出したのね」

姉は俯いて考え込む。昔から妙に抜け出すのが得意な妹だった。公爵邸でも、王宮でも。

「まずいな。まだ陛下の件は広まってはいないが」

二人の頭には同じ危惧が、思いつめたソナチネが何かとんでもないことをするのではないかという考えがあった。

「ええ、一人でいさせては危険だわ。探さないと」

ここでソプラノは夫の顔をひたと見つめた。顔を上げた拍子に癖のない銀の髪がサラリと背中を流れる。

「あなた。お願いがあります」

＊　＊　＊

「…ここにいたのね」

ソナチネが一人佇んでいたのは寂れた場所だった。

王都の中でも特にひとけのない場所―墓所が集まる地域である。その中でも貴族の墓が集中しているそこは、冥府の神や動植物をかたどった石像でそれでも飾られている方である。訪れる人間も時折いるらしく、花の供えられたものもあった。

「兄上が亡くなって、5年も経つのね」

「…父上は3年です」

コン・フォーコ家は立て続けに拠り所となる人物を失った。ソナチ

ネが一人立っているのは父と兄が葬られた公爵家の墓所の前だった。愛馬は墓所の外にでも繋いだのか、姿が見えなかった。

「お亡くなりになったばかりの頃はよく墓参しましたが、最近はご無沙汰していましたので」

妹はやっと、横へ立った姉へと顔を向けた。ソプラノもその身分には相応しくなく、供の一人もいない。

「姉上、お体に障りませんか？」

「平気よ、これくらい。うちへ寄ったら、カランド夫人にたくさん厚着をさせられてしまったわ」

確かに姉の厚着はかなりのものになっている。外套はもちろん、襟巻きに手袋、履物まで分厚い毛皮で覆われていた。

姉妹ふたり、しばし無言で父と兄の眠る場所を見つめる。公爵家の墓には代々葬られてきた当主たちの意向でさまざまな意匠の石像が置かれている。

父が生前より決めていたのは――鋤と鍬だ。

しかし、父が存命中にそれらに触ったことがあったかどうかすら疑わしい。これは彼の土地を耕す領民への愛を表しているらしい。

公爵家であるコン・フォーコ家にはその家に生まれついた人々の性情を表していつしか呼ばれるようになったあだ名がある。

いわく、「わが道を行く公爵家」だ。

コン・フォーコ家は昔から変わり者が多いことで有名だった。星を

捕まえるためと称し、領地に高い塔を建設し最終的にはそこから落下し死んだ公爵や、飲み屋の歌姫に入れ込んだあげくとうとう廃嫡になった嫡男（笑って家を出て行ったという）、義賊になると言って出奔し、騎士となった実の兄に捕まった三男坊など変人伝説には事欠かない。

彼らの非凡なところはいずれもそれが徹底していたところだろう。誰の反対も受け付けず、皆が己の道をつき進んでみせた。

そしてそれは現在の公爵家でも変わらない。ソナチネももちろん、公爵家の評判に一役買っている。

姉妹の父・アジタートはその中では奇跡的なほど正常の範囲内には入る部類だ。彼は権力を揮うことへ己の偏愛を注いだ。その権力志向は強く、もともと生まれがよいこともありとうとう先王の代に２０代の若さで宰相の地位につき、そのまま３０年以上も力を握り続けた。真っ当なほど、正しい公爵としての姿勢といえる。

その父の生き方の最大の悲願であったのが、長女・ソプラノといずれ国王となる王子・アレグロの婚約だった。アレグロに数多くあった他の縁談を全て排し、己の娘を王室へ入れることに成功した、と父は思った。

父の死後、他ならぬ娘本人によって、それはあっさりと反故にされてしまうが。

そんな、権力に取り憑かれたような父だが己の領民は大事にしたのでその支持は高かった。父の方でも慕われることに気を良くしたので、ますます彼らを慈しんだ。挙句の果てに父の墓を飾るのは、農業を営む領民の象徴である「鋤と鍬」となった次第である。

一方、二人の兄・ジョコーソがその奇人の愛を捧げていた対象は―

――

「いつ見ても、兄上のは壮観だわあ…」

二人の目前にあるのは、音楽を奏でる楽団をまるごと再現した石像だった。これも兄本人が生前から意匠を話していたものだ。８人の石像がそれぞれの楽器を演奏する情景が象られているのだが、それらは普段貴族の館で演奏しているようなお上品なものではなく、街の酒場で見られるような簡単な打楽器や笛を持っており、言ってしまえば俗な楽団なのだ。

それもそのはず、彼女たちの兄は吟遊詩人だったのだ。それも自ら楽団を率いて地方を旅していた。ジョコーソは子供の頃から貴族の社会には全くなじまず、市井で平民の子らと遊んでばかりだった。どういった経緯があったのか家族は誰も知らないが、吟遊詩人を志した彼は、最終的に家を出た。そして自分で楽団を立ち上げると、王都を出て地方を巡業するようになっていた。

当然、父は激怒したがそこは「わが道を行く公爵家」、気づけば息子はどこからか貴族の娘を花嫁として調達、彼女を公爵家に置き去ると、めったに王都には帰ってこなくなった。

正確にいうと、兄・ジョコーソは公爵家の当主ではないので、彼の墓を飾る石像は作られないはずだ。だが家を出た兄が、楽団を率いての旅の途中で馬車に轢かれそうになった子供を助けて死亡すると、父はそれまでの怒りをといて非常に嘆いた。その死を悼むため、兄の墓は当主のための物のように、彼が生前愛したものによってその公言どおりに飾られることとなった。

「でも、楽しそうですね」

石像の意匠をどうやって決めたのか知らないが、兄の楽団は皆楽しそうに演奏している。

「…これを見ていると兄上がどうして家を出たのかわかる気がします」

ソナチネがこぼすように呟く。妹の横顔が消え入りそうに儚いことにソプラノは気付いた。

「ソナチネ？」

「皆好きなように、好きなことをして去っていってしまいます」

「父上も兄上も。…今度は陛下まで」

俯くソナチネ。その肩は震えていた。

「そんなに、ここには何もないのでしょうか。何が悪いのでしょう？みんな去っていってしまいます、私に全てを押し付けて！！」

とうとう膝をついて、両手で顔を覆って嗚咽をこぼし始めてしまった。いつも凛々しいはずの妹の弱い姿に幼い頃のことを思い出した姉は、同じようにそばに膝をつくとそっと震える肩を抱いた。

「ソナチネ…そんな風に思っていたのね」

「うっ、ひっく、あね、うえ。冷えてしまいます」

「大丈夫よ…私はいなくなったりしないから。ずっとあなたのそばにいるわ」

成長すると姉妹でもそうそう抱きついたりしなくなる。特に二人は、

仲は良いがじゃれ合うような関係を築く性格でもない。
それでも今は―たった一人の妹が不安でたまらなくなった様子なのを見て、ソプラノは彼女を抱き寄せた。自分がいることを、温もりで伝えようとして。

思えば、ソナチネはずっと傷付いていたのかもしれない。幼いころ、慕っていた歳の離れた兄が家を出たことに、父がずっと彼女を省みなかったことに。

ソナチネが生まれたとき兄は13歳、その頃にはすでに家をでてふらふらと王都をうろつくようになっており、その後ソナチネが口をきけるぐらいになってもあまり兄妹らしくしてはいなかった。折り合いの悪い父や、彼のその風来坊の性情もあったのだろう、家族の輪に入ることが絶えていた。
一方で父は従来、娘を将来の王妃にすべく働きかけていたので、どうしようもなくなった長男よりも聡明で美貌の片鱗を見せはじめた長女・ソプラノにばかり目をかけるようになっていた。それは忙しい父を支える母も同じであった。
姉に二年遅れて生まれたソナチネはいつしか家族の中で置き去りとなっていた。そんな淋しい幼な子に、何を思ったのか兄は時折きまぐれのようにかまった。彼なりに愛情があったのかどうか、幼い彼女はいつしか、両親よりも兄を慕い始めた。

だが、慕う妹をあっさり置いて兄は家を、貴族社会を、王都を出て行った。

そして、父は相変わらず姉にばかり目がいっている。
しかし、そんな淋しい子供にまた新たな転機が訪れた。

見事に王子の婚約者の地位を射止めてみせた姉とともに王子・アレ

グロの遊び相手として王宮に挙がることとなったのだ。

「へいかは…兄上みたいに思っていたのにっ！！」

王宮で会った王子は、出て行った実兄の場所をそのまま埋める存在だった。最初こそ2歳も年下のソナチネは遊び相手の他の少年たちに爪弾きにされたが、彼女が一緒に遊びたがっていることに気付くと、アレグロはすぐにその輪の中に入れてくれた。ソナチネが普通の女の子と違い、走ることも飛び跳ねることも、棒っきれを振り回したり、意味なく石を蹴ったりすることも大好きだとわかると、どんどん他の遊びも教えてくれた。

「へいかがいるからっ！国に、王宮に仕えようと決心したのにっ！」

現在のソナチネはアレグロとの出会いで育まれたようなものだ。彼が男の子の遊びに彼女を引き入れなかったら、ここまで凛々しい騎士には成長しなかった。兄のように慕う彼がいなければ、騎士になってでも国に奉仕しようとは思わなかった。

「なのにっ、なんであんなに変人になってっ！！昔の陛下はあんなんじゃなかったっ！！あんなのをこの歳まで尊敬していたなんてっ！！」

「へっ？」

知性的なソプラノの顔に珍しい表情が浮かぶ。

「ねえ姉上？どうやったら国王陛下とあろう人があそこまで無責任になれるんでしょう？」

「言っちゃあ悪いですが、恋ですよ！？たかが一時の感情にそこま

で賭けます!?ああ賭けましたっけ、姉上も」

所詮姉上も恋する輩というわけですね、とふっと自嘲の笑みを浮かべる。

「どうせ私には、恋人の一人もいませんよ…ていうか恋愛感情すらわかりません。無骨に生きてきましたから。私のような唐変木な人間は、恋人たちの犠牲になるしかないんです」

みんな、私の屍を超えて恋を成就していけばいいんです…そう締めくくったソナチネはぐったりと両手を墓石の前につけて深いため息をついた。ソプラノがこれまで一度も見たことのない、深い深いため息だった。

「…気持ちはわかるわよ?」

たぶん。恋する輩であることは否定できないが。

「ソナチネは…無理やり女王にされるのがつらいのではないの?」

「もちろん!今まで、私なりに積み上げてきたものが全部無駄ではないですか!」

豹変したように、勢いよく顔をぐりんとソプラノへと向ける。姉は姉で妹の形相に思わずのけぞった。

「ですけど!　ちょっとだけですよ!?ちょっとだけ、諦めがでてきたとういうか。姉上だっていてくださるわけですし」

悲観した陛下に自害でもされたら同じことです、ともごもご続ける。

姉上のくだりでは少しはにかんでいた。ソプラノの言葉も耳には入っていたらしい。

「でも一度くらい、恨み言を言ってもかまわないかと思って」

父と兄に。二人が生きていたらこんなことにはならなかった。それでソナチネはここへ来たというわけだった。人騒がせな妹だ。

そう、人騒がせと言えば――

「――陛下も、レントも、騎士団も、皆探していたわよ」

「そうですか、申し訳ありません。見つからなくて姉上の手を煩わせることになったのですね」

帰りましょうか、そういえば姉上はどうやって来られたのです？お一人ではありませんよねと、立ち上がりすぐにでもきびすを返して行きそうなソナチネの手をとり、ソプラノは引き止めた。

「待ちなさい。いい契機だわ、私に全て話してみてはどう？」

女騎士の出奔（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

敵対者の襲撃（前書き）

まともなアクションが書けません。
お見苦しいものをお見せします。

敵対者の襲撃

17. 敵対者の襲撃

「全て…とは？」

ソナチネは賢い姉の前で取り繕うことなど滅多にない。何をしても姉にはお見通しだ。
だから今だって本心から語っていた。他に何があっただろう。

「私はこの世でたった一人の妹の、コイバナをこれまで聞いた覚えがないわ。姉妹というのはお互いの恋愛事情に通じているものではないの？」

ぶはっ、とソプラノの言葉にむせるソナチネ。

「ここ、コイバナですかっ！コイバナ…」

何よ鶏みたいよあなた、それよりもコイバナってなんですかなんて返したら承知しないわよと姉は眉を上げる。

「…わかってるつもりではいたの。こういう話が、あなたにはつらいことだと」

「姉上…」

「あの事件の後…私も母上もあなたを腫れ物のように扱ってしまったから」

話が長くなりそうだからとりあえず帰りましょうかと、今度は姉が墓所の出口へと進もうとした。ソナチネも頷く。

その時のことだった。

「…姉上っ！　私の後ろへ！」

力強く、だが突き飛ばさないようにゆっくりと、ソナチネがソプラノを己と背後にある兄の壮麗な石像の間に押しやる。

「…どうしたの？」

妹が、いきなり騎士の顔となったことに少々動揺したソプラノは頼りなげな声で呟いてしまった。

「しっ、姉上は私の後ろにいてください…」

自分たちの進行方向、すなわち墓所の出口へ続く歩道の方を見つめながら女騎士はすでに腰の剣の柄に手をやっている。

「何者かっ、姿を見せよ！」

鋭い誰何の声に応えるように、生垣や他の墓所に身を隠して近づこうとして者たちが現れた。

「・・・・・・」

無言で現れたのは5人の男たち、みな覆面で顔を隠している。それぞれ剣を手にじりじりと姉妹の方へ距離を縮めようとしていた。身なりは悪くないので街のゴロツキには見えない、つまり強盗目的の

者とも思えない。

「…切られたくなくば、それ以上近寄るなっ」

ソナチネに圧倒的に不利だ。背後には身重の姉、ソナチネには剣一本、使える自信はあるが5人を一遍に相手どることはできない。一人に切りかかって来られたら、相手をするその間に姉に危害が及ぶ。

「姉上、走れますか？」

こちらから切りかかり、できるだけ相手の戦力を減らすことで姉が逃げ延びられる確率を増やすか。一緒に逃げた方が良いのかもしれないが、いずれ追いつかれて同じことになってしまう。

「っ！」

こちらを囲もうとする相手の意図をその動きから読み取り、迷っている場合ではないと腰の剣を一瞬で放つ。手で合図を出していた、男たちの首領と思しき男へと向かっていった。

「ぎゃっ」

剣をもって向かってくる相手に遠慮は無用、とばかりに首領の左にいた別の男の右腕を横なぎに切りはなつ。落ちる剣。直前まできていきなり矛先を変えたソナチネに、女二人と侮っていた左の男は急所―右腕の腱をあっさりと切られてしまった。

「っ、この女っ」

ソナチネの騎士の剣が決して飾りではないことを悟った首領は、ソ

プラノを捕らえようと仲間に手で合図を出す。

「姉上っ！」

自分で考えていた以上に姉から距離をとってしまった。ソナチネは姉のもとに戻ろうと身を翻す。それを阻むように間に入る首領。

「おとなしく…」

しろ、そう言いたかっただろう言葉は途切れて消えた。

ぎゃあっ、とソプラノへ手をのばそうとしていた男の叫び声が響いた。姉妹二人の危機に飛び込んできたのは一本の矢、さらに続けざまに飛んでくる矢は確実に襲撃者たちの急所を捉えていく。

「姉上、動かないで…」

自分たちを避けて飛んでくる矢に、味方の到着を知ったソナチネは流れ矢に当たらぬよう、姉に注意を促す。見覚えのある矢羽だ、これは騎士団の…。

「無事かっ」

飛んでくる矢がおさまると、駆け寄ってくる人物が一人。

「レント…」

「義兄上っ」

ソプラノには夫、ソナチネには義兄であり上司でもあるレントであ

った。現れた義兄の姿にはっとしたソナチネは姉のもとへ急いだ。

「姉上、お怪我はありませんか！？」

血相を変える妹に、少し青ざめていたソプラノはそれでも安心させるように微笑んでみせた。荒事に慣れているはずもないのに、気丈なことである。

「大丈夫よ、ないわ。おかげ様でね。あなたこそ怪我はないの？」

「私は平気です。…申し訳ありません、危ないところでした」

「全くだ！　だから護衛に何人か連れて行けとあれほど…」

最後のはようやく姉妹のいる公爵家の墓所の前にたどり着いたレントである。ソナチネ以上に顔色を変えている彼は魔王皺が５割増しだ。その皺をチラっと見たソナチネが、骨まで皺がついてそうだ、と場違いなことを考えてしまったことは秘密である。

「やっぱり姉上お一人で来られていたのですか！？」

「ああ。姉妹水入らずで話したいと行き先も言わずに…」

「そんな話は後でいいでしょう。それより…」

ソプラノは妹と夫をかき分けるように前へ進み出た。いつの間にか、何人かの騎士団の者たちが来ており逃げようとする男たちを拘束している。

「素晴らしい腕前ですのね…」

一人だけ弓を持ち、騎士団の者に指示を出している夫の副官・ジュストがその視線の先にいた。

「奥方様、ご無事で何よりです」

安堵の笑みを浮かべたジュストが進み出て、右手を胸にあてて軽く会釈する。王都一と謳われるソプラノの美貌を前に、心なしか顔が赤い。彼の弓の腕前は有名だ、男たちに刺さっている矢は全てその腕から放たれたのだろう。それが無ければ、ソプラノは人質にとられたかもしれない。

「ありがとうございます…。命の恩人ですわ」

「いいえ、ご婦人の危機とあらば身を投げ打ってでもお守りするのが騎士の務め」

お礼を言っていただくには及びません、と続けるジュストはソナチネの目から見てもたいそう男前だった。

（これぞ騎士道…。）

いいなあこんな風になりたいなあ、とソナチネらしい感想を持つのだった。

敵対者の襲撃（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

公爵の謝罪

18. 公爵の謝罪

「彼らは一体何者なのでしょうね？」

ソナチネの問いである。

場所は変わって、今は義兄の屋敷にある姉の居間だ。あの後、襲撃者の処理は騎士団の者にまかせ、とりあえず姉妹二人は帰った。騎士団長のレントが国王へソナチネの無事を報告していることだろう。

ソプラノが墓所へ来たのは妹のためだが、彼女はコン・フォーコ家で馬車と御者を借りて来ていたそうだ。その御者も墓所の外で意識を失ってはいたが命に別状はなく公爵家で治療を受けている。

ソプラノも念のため診察を受けた。

「そうね…察しはつくのだけれど」

二人でお茶を飲みながら、危険が過ぎたことにほっと息をついているとレントが帰宅したという連絡がきた。何やら客人を伴っているらしく彼女たちを応接間へと呼んでいるそうだ。

＊　＊　＊

「これはこれは…。お二人ともご無事ですか…」

大きく息をつき、感極まったのかどさりと応接間の長椅子に座り込

んだのは６０代後半と思われる老人だった。貴族らしく身なりはよいが、足が悪いのか杖を携えている。

「コン・ブリオ家のご当主様…！」

足が悪いにもかかわらず、姉妹を迎えるにあたりわざわざ立ち上がっていた老人は王位継承権第一位の、コン・ブリオ公爵モデラートであった。

「閣下は二人にお話がおありだそうだ…よろしいですか？」

この屋敷の主、レントも含めて４人がそれぞれ着席したところで、改めて挨拶を交わした。ソナチネは彼の顔など忘れていたが、名前をきいて彼の息子の衝撃の告白が頭をよぎる。きまずい。

「いやはや…騎士団の方々が間に合って本当に良かった…」

ソナチネの決まり悪げな顔に気付かぬ様子の公爵は、姉妹の無事に何故だかしきりに頷いている。

「実は…いや、はっきり申し上げましょう。先ほどあなた方を襲った狼藉者は私の屋敷に仕える者どもです」

「えっ…！」

あまりのことに腰を浮かすソナチネ。だが驚いているのは彼女だけ、あとの二人は落ち着いたものだ。レントは軽く息を吐き、ソプラノは「やはり」と小さくつぶやく。

「ソナチネ、閣下のお話をおききましょう？」

姉の言葉で我に返り、席に戻った。

「我が娘フェルマータの仕業です…。あなた方とあれの因縁は、父である私にも責任のあること、重ねてお詫びをいたしましょう…」

そういうと公爵は再び立ち上がり、その頭を深く下げた。

残りの3人には驚きが走る。通常、公爵ともあろう者が国王以外の前で頭を下げることはまずない。

「あれは妄執にとり憑かれてしまったようです…」

公爵の顔は苦渋に満ちていた。

その話によると、ソナチネたちを襲ったのはコン・ブリオ家に仕える従者や警護人だそうだ。公爵の知らぬ間に、彼らはフェルマータの命を受けソナチネの生命を奪わんと襲ってきたらしい。

だが、従者たちとていくら主人の娘の命令とはいえ、他人の生命を奪うことはおいそれとはできない。とりあえず捕らえてフェルマータの元へと連れて行くつもりだったそうだ。

「彼らはずっとソナチネ嬢を見張っていたそうですが、エネルジコ夫人が来たことが予想外だったのでしょう。報告のために屋敷へ戻ってきたのです」

その時、たまたま娘と従者の話を聞いてしまった公爵は、急ぎ王宮へ伺候し騎士団へ知らせたというわけだ。

「フェルマータのやったこととというのはわかりました…。閣下、ど

うかお座りください」

生命を狙われたのだ、許したわけではないが足が悪そうな上に持病があるという老公爵をいつまでも立たせておくわけにもいかない。姉の視線を受けたソナチネは彼に着席を促した。

「何があったのかはわかりました。ですが理由は？」

自分だけならまだしも、大事な体の姉が一緒だったのだ。一歩間違えばお腹の子も危なかったかもしれない。そう思うと自然と声がきつくなる。一年半前の件だけでは納得がいかない。

「…この度の件であれは少々思い違いを抱いたようです。その前に、私も国王陛下から一度打診を受けましたが、この体です。お断りを申し上げました」

息子も娘もその器に足りぬことを知っていた公爵は、子供たちの王位継承も辞退した。内密の話を持ってきた国王も、彼が断ることを承知していたのかすぐに引き下げた。

「しかしその後何をどう考えたのか、娘はソナチネ嬢が陛下の元へお輿入れするのだと思ったようです」

「はあっ！？」

ソナチネの声が跳ね上がる。

最近までソナチネは近衛として国王の傍近くに仕えていた。さらに毎日のように陛下の休憩時間に呼び寄せられている。彼が王妃となるはずのコトネを失っているのは周知の事実なので、当事者のいな

いところであらぬ噂がたっていたようだ。

「なるほど…。そこへ先日の舞踏会ですね」

姉は納得顔だ。

噂のあるところへ、ソナチネのために開かれた舞踏会である。その前から国王とマルカート伯と打ち合わせていたことも含めて決定的となったのだろう。舞踏会には国王本人が不在であったにもかかわらず。

憎いソプラノは他の相手と結婚、コトネは帰還、敵がいないはずとなった王妃の座を今度はソナチネに奪われようとしていると思いこんだフェルマータはいてもたってもいられなくなったという。

「ひどい勘違い…」

女王となるか、アレグロの王妃となるか。究極の二択だが、ソナチネは今だったら前者を選ぶ。他の女への死ぬほどの恋情に燃える夫はさすがに願い下げだ。

姉妹への謝罪を終えると、公爵は自分と娘は領地へ隠棲するつもりだと話した。公爵家は遠縁の者に継がせ、妻も一緒に親子3人田舎で暮らすという。もちろん娘には監視をつけ、二度と誰かを狙わせるようなこともさせないと約束した。

「自然に囲まれた生活なら、あれの妄執も解けるやもしれません。ソナチネ嬢のお許しをいただけるなら、今回のことを不問としてはもらえませんか…？」

随分と虫のいい話だが、ここで許さなければまた禍根が残る。本来なら王位継承者と呼ばれるソナチネの命を狙ったことは反逆罪だが、この話はまだ公にはなっていない。
隣の領地であるコン・フォーコ家からも監視人を送ることで話はついた。

公爵の謝罪（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

侍女の来襲（前書き）

驚くしか能のない主人公に飽きてしまわれないか心配です。

侍女の来襲

19. 侍女の来襲

「あーあ、いつまでこんなことが続くんだろ…」

その後、夕食をご馳走になったソナチネは引き止める姉の言葉を辞して、義兄の屋敷からコン・フォーコ公爵邸へと帰宅した。ソナチネからも国王へ無事を報告すべきかもしれないが、珍しく魔王様が優しいところを見せて代わりにもう一度王宮へ行ってくれた。

今は自室の寝台の上だ。灯りは落とし天井を見つめる。

暗い室内で、友人だったコトネのことが頭に浮かぶ。彼女さえいてくれればこんなことにはならなかった。

立場上、近づきづらかった姉とは違いソナチネは彼女と共にいる時間が長かった。遠征時に、女性であるコトネに付けるには同性の者が、また年の近い者がいた方がよかろうとされたので当時一番若い女性騎士だったソナチネが護衛の一人に選ばれたのだ。

自国の者が犯した罪ー拉致監禁・危険な遠征への同行の強制・さらに危険な役目をさせようとしていることーを考えると従軍中はコトネに罵倒されてもそれは甘んじて受けなければならない、それでもこの命に代えても彼女を守ろうとソナチネは考えていた。だがコトネには志願してついて来ていた身の回りの世話をする侍女・ヘオンがいたので、初めはほとんど直接口をきくことすらなかった。

(初めて会ったときの意味不明な言葉…「リアルタカラヅカ」だっ

たかしら。あれはどういう意味だったのだろう。）

ソナチネの災難はコトネの責任ではない。だが。

（また何かの拍子で戻ってきたりしないのかなあ…。）

姉にはそろそろ腹を括ったような言動をしておきながら、往生際の悪いソナチネだった。

＊　＊　＊

「おはようございますっ。ソナチネ様っ、あっさでーす」

カランド夫人は随分と声が若返った…、寝ぼけた頭でそう考えたところでソナチネはハっとなった。落ち着いた物腰のカランド夫人がこのような挨拶をするはずがない。

「～～トオンっ」

元気良く挨拶してそのままソナチネの寝台へ寄り、彼女の上掛けを剥ごうとしているのは王宮にいるはずの侍女、トオンであった。

「ふふふ、ソナチネ様ったら本当は朝弱いんですね」

今日からは私が起こして差し上げますわ、と楽しげに上掛けを畳み持ち去ろうとしている。

「えっ、ちょっ」

洗顔のお水は水差しですわよー、とトオンはさっさと部屋を出て行った。

「なんで…」

ソナチネのつぶやきはむなしく響いた。

＊　＊　＊

「…今日からですか？」

トオンがいきなり部屋にやってきた理由がソナチネに知らされたのは朝食の席でのことだった。

今朝早くに王宮からの使者と一緒にトオンと、今ソナチネの給仕をしてくれているヘオンが来たそうだ。公爵邸には現在、他に一族の者がいないので一人の食事だ。

「はい、ソナチネ様。アレグロ陛下の命で本日よりトオンと二人、あなた様にお仕えいたします」

優雅な手つきでソナチネのお茶を注ぎながらヘオンは肯く。

彼女たちとはつい先日まで同輩だったはずだ。それがいきなり立場が大きく変わっている。

「それはつまり…」

「ええ。いずれ玉座におつきのソナチネ様には私たちが側付きとなります。今から慣れていただくためですわ」

慣れるも何も友達だったのだ、顔合わせなど必要ないではないか。そんな考えが表に出ていたのだろう、ヘオンが付け加える。

「ソナチネ様。女王となられるのを簡単に考えておいでではありませんか？」

いえそんなつもりは、むしろいつ私がその話を了承しましたか…そんな言葉はソナチネの口からは出てこれなかった。食事中なので口に物を入れたところだったのだ。

「ソナチネ様は召し上がりながらお聞きください。いいですか？国王というのは国の顔であらせられるのですよ？　女王となられたらソナチネ様には種々の儀式や祭典において主役として重要な役割がございます。また、魔族や外国との折衝の場ではあなた様の一挙手一投足にその後の外交関係を変えてしまう力がございます。さらには…」

国王の日々の暮らしにもこまごまとした決まり事があるなど、ヘオンの説明だか説教は朝食の間ずっと続いた。

要するに、彼女ら二人はソナチネの女王としての生活や作法、儀礼（ついでに美容関連のお手入れまで）の教師として派遣されたらしい。彼女らだけではなく、マルカート伯なども今日からソナチネの教育のため日々の業務からわざわざ時間を割いて政治経済その他の知識を授けに来るそうだ。

何をどうやったのか議会での承認が無事に済み、国王アレグロの退位まで一月足らずとなった今、それらを受けることがソナチネの仕

事であり義務となった。

墓参りなどに行かず逃げるべきだった、今頃になって悟るソナチネだった。

侍女の来襲（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

女子会の陰謀

20. 女子会の陰謀

午前はヘオンたち、午後は王宮から来る様々な分野の人物から授業を受ける日々が7日ほど続いた。柔らかい子供の頭脳の時期を過ぎたソナチネの理解力と記憶力が教師たちを悩ませる時間も同じだけ経過した。

その間、ソナチネは墓参りの件もあって完全に自宅から出してもらえなくなった。もともと甥公爵が不在で手の足りてなかった公爵邸に、それでは不自由だろうということでヘオンたちだけではなく他の女手や近衛一つこの間までの同僚一まで王宮から送り込まれてしまったからだ。騎士団からはフィーネまでも寄越された。

「…可哀そうなことになってるわねえ」

今はそのフィーネを囲んでヘオンたちと4人、女子会をしている。場所は公爵家の居間、お茶とお菓子を用意しての息抜きだ。この日は教師の都合がつかないのか午後の予定がすっぽり空いていた。

「本当に…」フィーネにそう相槌を打ちたいのをヘオンからの視線を受けてこらえたソナチネは長椅子でぐったりしている。午前中、なぜか幾何学を教わっていたのだ。

次期王位継承がほぼ決定事項となったソナチネには、フィーネも敬語を使わねばならないのだが、「今だけは忘れてください！」と涙目で頼まれたので普段通りの態度をとっている。

「でも、あなた王宮にいなくていいの？」

「ソナチネ様は、お勉強だけが仕事ですからっ」

楽しそうに答えるのはトオン。

フィーネの疑問は最もだ。国王の仕事を覚えるのなら、アレグロがいるうちに側で見ておいた方がいろいろとわかりやすい。

「王宮は様々な人間が出入りしますから…」

そうぼかすのはヘオン。どのような思惑を持っているかわからない人物を、あまりソナチネに近づけたくはないというのが本音だろう。

と、そこへ廊下に続く扉から声がかかる。

「ソナチネ様。お客様がお見えですわ」

カランド夫人の言葉に、両手で顔を覆うソナチネ。

「またか…。」

「はい。今日はヴィーデ様とおっしゃる方です。陛下からいただいた名簿に名前がございましたので、応接間にお通ししましたわ」

扉を開けて入ってきたカランド夫人の顔がほんのり赤い。あの美形ならさもありなん、とソナチネが一人ごちる。

「というわけで私は失礼します。せっかくなのですから3人とも今日は休んでください。近衛の方についてもらいますから」

護衛のため、立ち上がりかけたフィーネに「私の代わりに楽しんでください…」と弱々しく微笑んで押しとどめた。
不思議なことにヘオンまでそう薦めるのでフィーネは居間に残った。

＊　＊　＊

「…で？」

引き止めたのは何か話があるのだろう、とフィーネが促す。

今のソナチネに面会を申し込むには国王の許可が必要となっている。
ソプラノのような家族は別だが、アレグロが作らせた名簿に名前のない者は門前払いを喰うのだ。

その名簿に載っていて、教師役でない者というと…。

「ヴィーデ様って、漆黒の魔術師様ですようっ」

「へえ、そんな人まで名乗りを挙げてるの？」

情報通のトオンは美形の情報にも詳しい。

「はい。こないだの舞踏会にもいましたし、一番目にソナチネ様と踊ったんです！　フィーネ様は見たことあります？　すっっごい綺麗なお顔なんです！　それでソナチネ様ったら、お顔を真っ赤にして踊ってらしたんですっ」

その場にいなかったはずなのに見てきたかのように語る。そんな相棒を呆れて見やり、ヘオンが続けた。

「そうですわね。外見も見栄えの良い方ですけど、中身も優秀と評判ですわ。人柄にも悪い噂は聞きませんわね」

ほおっと息をつき、淑やかにお茶を口にするヘオン。「少なくとも今まで来た方々よりは随分上ですわ」と辛らつに締めくくる。自分で淹れたお茶の味に満足したのか一つ頷いた。

この7日の間、連日ソナチネの婿候補が訪ねてきている。授業中でも彼らが来ればソナチネは相手をしなければならないので、ヘオンからしてみれば少し迷惑なのだ。

「ねねっ、ヘオンはどう？　誰がソナチネ様の婿になるのがいい？　やっぱりヴィーデ様かしらっ」

だってあんなに格好いいだのものっ、とはしゃぐトオン。叫んだ拍子にテーブルの足に当たっている。茶器が音を立てた。

「よしなさい。同じ屋敷にご当人たちが揃っているのよ」

聞こえやしないでしょうけど、とヘオンが軽くにらんだ。王宮の侍女とは思えないほど雑なトオンに内心眉をひそめている。

「フィーネ様、ごめんなさい。私、お聞きしたいことがございますの」

気を取り直し、ヘオンが真剣な目でフィーネを見つめた。侍女二人のやりとりに苦笑していたフィーネも居住まいを正す。

「お気になさらず。で、何を？　ソナチネのことですね？」

「はい…。私たち二人はこれから一生あの方をお支えする覚悟でここに参っております。そうよね、トオン？」

「当然っ！　悪くすれば共倒れだわ、私だって必死ですっ」

必死と言う割りには少々軽いが、それがトオンの持ち味だ。

「そういうことです。…私がソナチネ様と出会ったのは3年前、フィーネ様はそれ以前からあの方とご懇意にされてますわね？」

「ええ。私はあの娘が騎士団に入ったときから知っています。では、お聞きになりたいことというのはやはりラメンタ砦の一件ですか？」

「ご存知でしょうか？　話していただくわけには参りませんか？」

「知ってはいますが…本人のいない間にききますか？」

言外にその悪趣味を指摘するフィーネ。あの事件がソナチネにとって触られたくない過去なのを彼女はよく知っていた。

「重々承知しております。決して興味本位でお尋ねしたのではございません。ですが、ソナチネ様本人からお話していただくのを待っている時間はないのです。アレグロ陛下はあと一月もしないうちに去ってしまいます。それまでに…ソナチネ様のご夫君を決めねばなりません。あの一件について知らなければ、私たちはあの方を傷つけてしまうのではないか、と心配なのです」

フィーネの目を見つめたまま、己の覚悟を見定めてもらおうと言い募るヘオン。その手は関節が白くなるほど強く握り締められている。

「…いいでしょう。ソナチネの心情までは知りません。ですから公式記録にも載っているようなことと、私が人づてにきいて知ったことをお話します」

女子会の陰謀（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

魔術師の本気

21. 魔術師の本気

女子会で己のことがとり立たされているとは知らないソナチネは、応接間で噂の美形さんと対峙していた。

こうして面会に来る人物はソナチネが舞踏会で「本気かな？」と思っていた4，5人に絞られている。消極的だった人々は知らぬ間にマルカート伯によって振り落とされたのだろう。同じ人物が何度も来るのだが、ヴィーデが来たのはこれが初めてだ。

「お忙しいところ、お時間を割いていただきありがとうございます」

輝くような笑みは舞踏会と同じ、昼間の光の中で見ても麗しい。今日は魔術師らしくローブを纏っている彼は、その黒い衣の効果で神秘的にすら見える。

「いいえ、今日は講義もなく予定が空いていたのです」

お気になさらず、と続けたソナチネは彼の顔をまともに見られなかった。

（だめだっ、顔を見て話すのは無理。まとも会話もできないなんてどうしたら）

二度目なら慣れているかと思ったが、ヴィーデの美貌は三日で飽きるような代物ではないらしい。

ところで、応接間にいるのはソナチネとヴィーデの二人ではない。

扉の前に一人、窓の側に一人、それぞれの場所で内外に気を配っている近衛がいる。彼女の初心な反応に対して彼らからは生暖かい空気が伝わってくる。

「あの、ご用件は？」

最初から用件を尋ねるのは失礼にあたるが、生暖かい空気に耐えられずソナチネは口火を切った。

「舞踏会ではあまりお話ができませんでした…。私のことをきいていただいたので、今度はソナチネ様について伺えないかと」

「わ、わたしについてでしか、じゃなくて、ですか」

焦りすぎて噛む。思わずヴィーデの目を見てしまい、灰紫の輝きに紅潮したまま固まってしまう。そんな彼女にテンポよく質問が投げられた。

「はい、月並みな質問ですが、ご趣味は？」

「え？　えーっと、乗馬と剣の手入れです」

「特技は？」

「馬術、ですかね。公爵領の馬術大会で優勝を」

「それは素晴らしい。では好きな色は？」

「え？　えー、何でしょう。白とか」

言ってしまってから恥ずかしくなる。愛馬の毛並みが浮かんだのだが、己の二つ名「白銀の騎士」のことを思い出したのだ。

「好きな言葉は？」

「好きな言葉？　うーん、『考えるな！感じろ！』です」

「ほう、それは初めてきく言葉です。出典を伺っても？」

「コトネ様に教わったのです。神子様の。何でも彼女の『神』の言葉だそうで」

「なるほど、異世界の聖典からですか」

格言通り、深く考える前に感覚で質問に答えることで知らぬ間に普通の会話が展開している。
ついでにおかしな勘違いも。

この会話が耳に入ってしまう近衛の二人は、ソナチネの元同僚なのだが彼女のことはよく知らなかった。それゆえ、最初の質問の答えに少々コケそうになったのだが、最後の質問では二人とも完全に脱力した。
（なんだそりゃ…）

また、図らずもコトネの香港映画オタクが発覚したのだが、残念ながらこの場にそれを指摘できる者はいなかった。

思ったより会話が弾んだ？ことでソナチネはほっとしていた。笑顔らしきものを浮かべた彼女に気をよくしたヴィーデはある提案を出した。

「乗馬がお好きなら、遠乗りにでも参りませんか？」

＊　＊　＊

しかし、遠乗りには行けなかった。

軟禁状態のソナチネが、不特定多数の人間のいる王都近くの森や丘などの乗馬に適した場所へ行くことは国王の許可が出なかったのだ。だが、ほとんど公爵邸から出ていないことを哀れに思った近衛の一人が王宮へ戻り、王宮内の騎士団の馬場を使用する許可をもらってきてくれた。騎士団の連中が鍛錬に使っていることは確実だが、ソナチネの安全は間違いなく確保される。

（来るんじゃなかった…。フィーネも冷たかったし…。）

久しぶりに愛馬の背に乗ったソナチネの顔は暗かった。

騎士団の、お互いにその性格を存分に知る者たちの前で、ヴィーデとともに言葉を交わしながらゆっくり馬を歩かせているソナチネは後悔していた。同僚たちの遠慮のない好奇の視線の前で、ヴィーデの顔をまともに見ることもできない醜態をさらすことになっている。フィーネも一緒に、と頼んだのだがヘオンたちと大事な話があるからとにべもなく断られた。

「…どうかされましたか？」

ソナチネが浮かない顔をしていることに気付いたヴィーデが声をかけた。空気を読まない彼でもわかるほど、元気がない。ここに来る

までは会話も（ヴィーデの中では）楽しんでいたのに。

「いえ、何でもありません。久しぶりに来れて楽しいです」

お前もつまらなかったろう、とアニマート号へも声をかける。本心では、風を切るほど早駆けしたいと思っていた。

「そうですか？　よかったです」

少し馬の足を早くし、会話を再開させた。

「――私からの質問の続きです。ソナチネ様の初恋について伺っても？」

答えにくければ理想の異性像とかでもかまいませんよ、と続いた。

「え……。」

ソナチネの顔には質問がいきなり艶めいたことに対する驚きだけではない、他の感情があった。

騎士団の者が大勢いる場所。質問の内容。その全てがソナチネを凍りつかせた。

「…少々不躾でしたか。忘れてください」

相手の愕然とした様子に、さすがのヴィーデも引き下がらざるを得なかった。

その後、なぜか再び萎れてしまったソナチネを見たヴィーデは、己の話で場を持たせた。存外に気配りのできる面もあるらしい。

＊　＊　＊

「…今日はありがとうございました」

楽しかったです本当に、とソナチネは言うがその表情が言葉を裏切っている。

夕刻までという約束だったので、日が翳り始める前に乗馬を切り上げ公爵邸に帰ってきた二人である。ヴィーデはここまで彼女を送ってきた。もちろん近衛もついている。

「…また会ってもらえますか？」

公爵邸の壮麗な作りの屋根の乗った、正面玄関の前でのことだ。ヴィーデが何故かすがるような目でソナチネを見つめていた。本当に破壊力のある表情だ。

「？　はい。ここまで訪ねていただかねばなりませんが…」

不安そうなヴィーデを訝しく思って、ソナチネは答えた。彼女は自分と彼の立場も半分忘れかけているようだ。

ソナチネに拒絶されなかったことに安堵したヴィーデは、ここで勝負に出た。

「ソナチネ様」

ソナチネの前に片膝をつき、その手をとる。

「私の気持ちを伝えるにはまだ早いのでしょう…。ですが私が真剣

であることをあなた様に理解していただきたいのです。どうか、あなた様のこの手をとる権利を私にいただけませんか…？」

その美形で下から見上げるという反則技を使われ、頭が一気に沸騰したソナチネが返せる言葉は一つだけだった。

「……。考えさせてください…」

噛まなかっただけでも褒めてほしい、とは後日のソナチネの言葉だ。

魔術師の本気（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

次話、長い上に暗いです。

女騎士の過去（前書き）

暗くて長いです。

主人公が肉体的・精神的打撃を受けます。人死にもあります。
直接的な表現はしていないつもりですが、ご不快に思われる方もいるかもしれません。
ごめんなさい。

女騎士の過去

22. 女騎士の過去

自宅に戻った後もソナチネの様子は変わらず、他の女子会3人はたいそう心配していたのだが、何故かそっとしておいてくれた。そのことには気付かなかったソナチネだが、放っておいてくれること幸いとしてこの日は早めに就寝した。

その真夜中のことだ。

「――――っ！」

ソナチネを過去の悪夢が襲った。うなされて夜中に飛び起きてしまった。

「はあ…」

目覚めたことで悪夢が現実でないことを悟り、大きく息をついた。
両手で顔を覆う。

（昨日のことみたい…）

あの、顔。目に焼きついて離れてくれない。
突き刺さる視線の感覚を思い出す。

「初恋」という言葉とまわりにいた騎士団。その後のヴィーデの告白。昼間の出来事をきっかけに5年前の惨劇がソナチネの脳裏に鮮

やかに蘇る――――。

＊　＊　＊

「今日からやっと出発ですねえ」

お天気もいいし、幸先が良いですと嬉しそうに話しかけたのは彼女が見習い騎士として仕えるようになったばかりの騎士アッラ・マルチャだ。アッラも女性だが、１６歳のソナチネよりも１０歳以上歳の離れた大先輩であり尊敬する女騎士だ。

１０代の細い体つきそのままのソナチネと違い、アッラは貫禄のある女性である。女丈夫という言葉そのままのたくましい体つきの、黒髪黒眼の彼女は馬上から目を細めて横を歩くソナチネを見下ろした。

「そうね。初めて赴任するのだから、嬉しいでしょう？　でも、親元を離れるのだからここからは甘えは捨てなければいけないわよ」

騎士団に入った頃から何かにつけソナチネを気にかけていたアッラは、可愛い後輩がはしゃぐ姿に微笑みながらもたしなめた。

「もちろんです！　アッラ様、見ててください。ちゃんとお仕えいたします！」

王都を離れ、向かうのは王国の東の守備を勤める第二騎士団の駐屯地の一つ、ラメンタ砦である。そこへ向かうのは二人だけではなく、新たに砦への赴任の命を仰せつかった、２０数名の騎士団の同僚と一緒だ。

その中には新たに見習いとなった者がソナチネの他にも１０名近くいる。騎士は皆騎乗しているが、見習いたちは徒歩だ。

気分良く歩いていたソナチネだが、実はこの旅立ちには喜びが半分、憂鬱が半分あった。喜びというのはもちろん、騎士団に入って一年経ちひたすら鍛錬だけを受ける日々が終わって騎士らしいことができるからだ。半人前なのは同じだが、鍛錬だけではなく彼女らにも役割が与えられる。また王都と違って毎日自宅へ帰らないので四六時中、騎士の面々から教えを請える。

そしてもう半分、憂鬱の原因は――。

（あ、まただ。）

上天気の出発だというのに、どこか暗い顔の少年が、ソナチネと同じように、騎士の横を歩いている。

斜め後ろから背中に感じる強い視線。それはその少年が放つものだった。

少年、コーダ・ペルデンドシはソナチネと同じ頃から騎士団に入り、今はこうして共に見習いとして赴任する仲間である。

だが、貴族の中でも武を重んじる家風のペルデンドシ家の少年は、彼女を毛嫌いしている―少なくとも彼女はそう思っている。

王子の遊び相手として王宮に上がった時、年上の少年たちから爪弾きにされた経験があるので、ソナチネは嫌われることには慣れていた。時間をかけて自分を知ってもらえさえすればいつかきっと仲間に入れてもらえる、と信じるからだ。

事実、騎士団に入った当初も一人だけ女の子だったソナチネは他の

少年たちから中々相手にしてもらえなかった。だが、半年かけて彼女の騎士への気持ちが本物であることを示し続けた結果、打ち解けるとまではいかないが、挨拶くらいは普通に交わせるようになった。

コーダ以外とは。

入団した日から、コーダには悩まされていた。当時はまだ、女であるソナチネの髪は長く、腰まで伸ばしたそれを一つの三つあみにして背中に垂らしていたのだが、それを見た彼は彼女の背中に言い放った。「なんだかしっぽ生やしたやつがいるぞ。鬱陶しいな、切ってこいよ」と。

ひどい侮辱だった。長い髪は、女の証だ。髪を切られるのは罪を犯した者だけ、それがなければ名誉ある女性とは見なされない。娼婦のような扱いを受ける。

当然ソナチネは怒り心頭に達したが、その場で決闘を申し込もうとするところをアッラにたしなめられて泣く泣く諦めた。

その後も何かにつけコーダはソナチネが女性であることを侮辱し続け、そんな彼がいるものだから他の少年までもが彼女を避けることを当たり前のこととするようになった。一年経っても挨拶ぐらいしかできないのはコーダのせいだと彼女は信じる。

そんなコーダと同じ赴任地。ソナチネの憂鬱はそこだった。

（しかし、なんでああも睨んでくるのかなあ…）

親しく言葉を交わしたことなどないのだが（侮辱の言葉はいつも明

後日から聞こえてくる）、視線を感じて振り返るとよくコーダがソナチネを睨んでいる。彼女が振り返るとすぐに視線を外すが、気が付くとまたこちらを凝視している。

（前途多難だなあ…）

空はこんなに綺麗なのに。

＊　＊　＊

ラメンタ砦に無事到着した第二騎士団の面々は交代で王都へ帰還する者と入れ替わり、元々配置されていた人員と共に恙無くその業務を開始した。国境の監視・防衛、時折発生する山賊の掃討、周辺の治安維持が主な仕事だ。

ソナチネも見習いとしてアッラに仕えながら騎士の心得を学び、剣や弓、体術馬術を鍛える日々を過ごし始めた。

東の隣国とは友好的な国交が続いている、特に重大な事件もなく比較的平和な日が続いた。

「監視所に物資を届けるんですか？」

厩舎で馬の世話をするソナチネに、命令が与えられた。馬の世話は厩舎係の仕事なので彼女がやる必要はないのだが、馬の好きな彼女にアッラがそれならばと己の愛馬をまかせてくれたのだ。

朝の運動が終わり、馬房の掃除もやってしまったので後は厩舎係に任せることになっている。

この後いつもは自分の鍛錬をするのが日課なのだがこうしてその日

は予定が変わった。

その後もそんな日常的な日々が続くはずだった。

砦を離れ、国境線の傍にある監視所へ食料などの物資の補給へ向かわされたのはソナチネのような見習いが5人と騎士が3人だった。物資を積んだ馬車を操る御者も入れて計9人で監視所へ続く森の道を進む。この日はいつも移動は徒歩が基本の見習いたちも馬を与えられ、御者以外の全員が騎乗している。

（こうして護衛が必要ってことは、山賊でも出るのかしら。）

その人員の中に見習いを多く含むということはさほど危険でもあるまいが。それでも帯剣の許可が出たのでソナチネも腰に挿してきている。

「監視所とはどのような場所ですか？」

質問は馬に乗った見習いの少年から出た。答えるのは先輩騎士だ。

「そうだな。この森が切れたところにあるのだが…少し小高い丘で隣国がよく見える」

「そうなんですか！！　じゃ向こうからも丸見えなんですね」

「監視所なんだから当たり前だろ。では、国境のすぐ向こうに隣国の監視所もあるのですか？」

同輩に突っ込んだ後、先輩騎士に尋ねたのはコーダだ。そう、どん

な不運かコーダもこの任務へ就いている。
のんきな会話を交わす彼らにソナチネは疎外感を感じる。

（なんでまた一緒なんだか…。）

早く行って帰りたい。そう思いながら、馬を進めるソナチネだった。

簡単な任務。大きな事件もない平和な日々。それが彼らを油断させていた。

最初は矢だった。
石弓から放たれたと思しき矢がのんきに馬を進める彼らに目掛けて次々と飛んできたのだ。

「なっ！」

突然の攻撃にさらされ、見えない場所から飛来する矢に対して一瞬全員が硬直する。経験を積んだ先輩騎士がすぐに態勢を立て直すため指示を出そうとするが、その一瞬が命とりとなった。

「全員…っ」

二列になって進んでいた先頭の騎士の一人の防具のついていない首に矢が突き刺さる。言葉もなく崩れ、落馬する。

わあっと一気に現場の混乱が進む。実戦経験のない見習いたちは目前で起きた突然の凶行にこれまで積んできた訓練や教えを忘れ、動けずにいる。

「荷を捨てて砦へ逃げろっ」

形勢不利を悟った騎士が、叫ぶ。騎士としては不面目極まりないが、見習いたちにはまだ実戦で己の命を勝ち取るほどの力はない。

だが、それも遅かった。

二列になっていたことが仇となり、慌てふためいた彼らは馬を方向転換させることがうまくできない。馬の方も矢から逃げようとする本能と手綱の指示に惑っている。

まごつくうちにも、左右から凶器は降り注ぐ。

ついに、同じように馬を返そうとまごついていたソナチネにも矢が当たる。彼女の肩と彼女の馬の首、間をおかずに突き刺さった。肩の衝撃と馬が痛みで棹立ちとなったことで彼女はそのまま振り落とされた。

「ソナチネっ！」

落馬と肩の衝撃で意識を失う直前、名前を呼ばれたことは覚えている。しかし、何かを思う間もなくソナチネの意識は落ちていった。

＊　＊　＊

（重い…）

意識を取り戻したソナチネが感じたのは、痛みと体全体にかかる重圧だった。目を開けようとするが、地面にうつ伏せに倒れているら

しくそれができない。ならば、なんとか起き上がろうと痛みの無い方の腕を動かそうとする。が。

「動くなよ…」

声が聞こえた。消え入りそうな小さな声が。

自分の怪我の具合も、置かれた状況もわからないことに怯えたソナチネがなおも動こうとすると、再び声がする。

「動くなって…。慰み者にされるぞ」

耳に聞こえるというより、体に響いてくるような近さで感じる小さな声。この声は。

「コーダ…？」

「声を出すな…死体のふりしてろ」

状況がわからないなりに、整理する。肩に矢を受けた後、自分は意識を失っていたのだろう。その前に名を呼んだのは確かにコーダだった。察するに、それほど時間は経過しておらず自分は落馬して地面に臥したまま、外から見ると死体のような姿なのだろう。

さらに体全体に重さを感じるのは上から庇うようにコーダがのしかかっているからだ。だから声が近くに感じる。辛うじて呼吸はできるが、非常に苦しい。

どうして庇ってくれるの、そう問いかける前にソナチネの意識は再び暗転した。

＊　＊　＊

「コーダ…？」

どのくらい時間が経ったのだろう。気付けば地面についた部分が冷たくてなんだかとても寒い。

小さな声で重くのしかかっている者を呼ぶが返事がない。それに――

「コーダっ」

先ほど感じていた服を通した人間の体温。伝わってくるはずの息遣いや心音。

それら全てが、ない。

耐え切れなくなったソナチネは渾身の力を振り絞り、なんとか抜け出そうと試みる。動かせる方の腕を伸ばし、頭の上の方へと這い出す。

「はあっ、はあっ…」

脱出した彼女が見たものは。

＊　＊　＊

結果的にいうと、その時の生き残りはソナチネ一人だった。他の騎士や見習い、御者、８人全員が絶命しており、物資を積んだ馬車だけが無くなっていた。

ソナチネが目を覚ましたとき、すでに日が暮れてからかなり時間が経過しており森の中の現場は灯りのない真っ暗やみだった。
しかし、わずかな星明りでもその場の状況がわかるには十分だった。
一人立ち上がった彼女が見たのは先ほどまではのんきに会話をしていたはずの仲間たちの無残な姿だった。

それと――――信じられないその事実。

現実を受け入れることができない彼女は、他の生存者がいないか確認すらせず呆然としていた。しばらくそうしているとようやく異変に気付いた砦からの救援が来たのだった。

＊　＊　＊

砦に連れ戻されたソナチネは治療室で砦付きの魔術師に肩の傷の治療を施された。その後、怪我自体が重傷でなかった彼女は何があったのかをアッラに話した後、休むことを許された。
治療室でそのまま休むこととなった彼女は、その寝台の上でぐったりとしていた。

魔術による治療は、治るのが早いがその分体力を奪っていく。元より怪我をしたまま半日以上放置されていたソナチネの体力は落ちている。その上先ほどまで気力を振り絞っていた話をしたので限界に近い。休まねばならないのだが――――。

（…どうして）

あの時、立ち上がってみたもの。仲間たちの変わり果てた姿も大きな衝撃だったが、それ以上に、ソナチネの目に焼きついて離れない

姿。

傷を負い、地に臥していたソナチネは死んだ馬の横に並ぶように寝ていた。その彼女を馬の背と己の体で挟むようにして隠してくれていた者がいた。

コーダだった。ソナチが気を失う直前にその名を呼んだ彼は、そのまま彼女の元へ駆け寄ってきたらしい。そうして、彼女を庇ってくれた。

しかし――――。

（どうして私を庇ったの？　命をかけてまで）

コーダはソナチネを守るように、彼女を体の下に敷いたまま絶命していた。始めに彼女が目覚めたとき既に矢を受けていたのだろう、己も致命傷となる深手を負いながら必死に彼女に警告をした。

また、ソナチネの体は血だらけだった。彼女の怪我はそれほど出血はしていない。つまり―コーダは自分の血を彼女の体につけてまで死体の偽装を施したのだ。

（どうしてそこまでしたの!?　どうして私なんかのために…）

毛嫌いしていたのではなかったのか。嘲っていたのではないのか。

ソナチネの心を、いっそ死んでしまいたいほど苦しめているのはコーダの信じられない死に際の行動だけではない。

（どうして…笑っていたの）

コーダとてこんなところで、死ぬつもりなどなかったはずだ。まだ１６歳なのだ、これから長い将来があったはずだ。自分の命が尽きようとしているのに、その死に顔が笑っていたのは何故なのか。

星明りの中で見たコーダの死に顔。助けが来て初めて、その顔から目を離すことができた。

戦闘で命を落とした者のものとは思えない、とは救援に来た騎士の言葉だ。

＊　＊　＊

惨劇から8日が経過したが、ソナチネは治療室の寝台から未だ出られなかった。治療の魔術で怪我はほぼ治っていたが、その精神的打撃から、体力の方がなかなか回復しないためだ。

また、まだ見習いの上１６歳という若さで凄惨な経験をしたソナチネに、周囲も早い復帰を促さなかっ。アッラは頻繁に様子を見に来るが、優しく労わるような言葉をかけるばかりである。

昼間、アッラによって襲撃者が捕縛されたことが知らされた。ラメンタ砦の周辺でも、監視所のあった辺りは街道筋ではない。普段は行きかう人間などほぼいない森の中に潜み、彼を襲ったのは、山賊だった。商人たちが通うことのない監視所周辺に山賊が出没したことはなかったのだが、どういうわけか街道筋から流れてきた連中が通りかかった馬車の荷を狙ったのだ。山賊は手錬れぞろいだったのか、矢の雨から残った騎士や見習いたちには応戦した跡があったが、全員があえなく殺されていた。ソナチネ以外。

アッラは自分を含めた砦につめる騎士たちの油断が招いた事件だと言った。山賊が流れてきていることに気付かず、見習いたちに碌な警戒もさせずに送り込んだことに原因があると。

ソナチネは決して悪くない――、一人生き残ったことに罪悪感を持ってはいけない、そう言いたいのがわかった。そうは言っても、一緒に時間を過ごしてきた自分と同い年の見習いやあこがれていた先輩騎士たちが命を落としたのに、自分ひとりが生きているのだ。

（あのとき…どうしてあんなに油断していたの。もっと周りに気を配っていたら。）

見習いとはいえ、騎士となるべく積んでいた鍛錬は何のためだったのか。自分の身さえ満足に守れなかった者に、誰かを守れるのか。

（私は騎士になると決めたのに…誰かを守る人間になるつもりだったのに。）

自分が守られてどうする。

その晩遅く、眠れないソナチネは己の細い体を抱きしめるようにして、寝台の中で震えていた。打ちのめされた彼女は、何度も自分を責めた。

砦に帰還してから、治療室で眠れない夜ばかりを過ごすソナチネへ、その日は訪ねる者があった。

夜中だというのに、ソナチネ一人の治療室の扉を叩く者がいる。外から声がかかった。

「起きている…？」

「え…？　どなたですか？」

思わず聞き返す。アッラの声でも魔術師の声でもない。聞き覚えはあるが…。ソナチネの問いには答えず、訪問者は扉を開けた。

「ラレン」

現れたのは見習いの少年だ。先ごろソナチネと共に砦へやってきた一人でもある。誰だかわかると彼女の心は一気に暗澹とした気持ちへ落とされた。

彼はコーダの友人だった。

「怪我は…どう？」

「…」

コーダの友人だったラレンと親しくした覚えはない。こんな夜中にソナチネを見舞いに来るとも思えない関係の彼に、罪悪感とは別に警戒心が沸く。コーダを犠牲にして生き残った彼女に何をしに来たのか。

「何もしないよ…別に君をどうこうしても意味ないし。それに君のせいじゃないだろ」

答えないソナチネの警戒を読みとったのか、勝手に話し始めるラレン。寝台のそばまで来た彼は彼女が怯えないよう、少し微笑んでみせた。

「君もきいたろ、賊が捕まったって。だからってわけでもないけど、僕も少し落ち着いたから、来たんだ」

「…何しに？」

私を責めているのではないの、言外に問う。

「僕はコーダの友達だから…だったから。あいつが何を思っていたか、君に伝えないとあいつも浮かばれない」

もしかしたら冥府で怒っているかもしれないけど、と前置きして語る。

「コーダは君のことが好きだった。いつも君にはひどい言葉ばかり投げつけていたけど、本当はずっと君のことを想っていたんだ」

「え…」

考えてみたことすらない、ラレンの語る真実に凍りつく。

「コーダのせいで君が迷惑していたのはわかっている。君の方は嫌いだったろ？」

「うそだ…」

「嘘じゃない…。だったらどうして自分が死んでも君を守ろうとするんだっ！？」

思わずこぼしたソナチネのつぶやきに、ラレンは叫ぶ。平静なように見えたが、彼も内心抑えるものがあったのだろう。しかしすぐに後悔したように俯く。

「ごめん…。冷静に話すつもりだったんだけど…」

ソナチネは無言で首を振る。怒って当然なのだ、ソナチネはコーダの命を犠牲に、生きている。

「でも、わからなかった？　あいつ何かっていうと君の方ばかり見てたけど」

「そんな…あれは睨んでたんじゃ」

「いやいや。嫌いな相手をずっと睨んでるっておかしいだろ。好きだからこそ、つい見ちゃうんじゃないか」

普通気付かないかなあ、と頭をかく。

「それに、君はきいてない？　騎士団に入るとき、同期に女の子がいるって色めき立ってやつらがいたんだけど、上から手出すなって釘刺されてたんだよ」

「え、きいてない」

「そうなんだ？　だから皆、必要以上に君に近寄らなかったのに。見習いの間は指をくわえて見てるしかないって。コーダもそう」

「…彼は、私をいじめているようにしか思えなかったんだけど」

「ああ。それはあいつが悪い。優しくすることもできない相手にどうしたらいいかわからないからって、あれはないよな。ほら、子供のときって好きな相手をわざといじめたりするだろ？　あいつのはそれと一緒」

ラレンはそう言って少し笑った途端、その場にしゃがみ込んだ。手で覆った顔から嗚咽が漏れてくる。友人を失ったばかりの彼に、ソナチネはかける言葉が見つからない。

「…ごめん」

嗚咽がやんだ後もしばらくうずくまっていたラレンだが、ようやく顔を上げた。涙の跡が見えるが、ひどく凪いだ顔に苦しみの残滓はない。

「まだ信じられないんだ…あいつはいないんだよな」

再度、無言で首をふるソナチネ。謝ることなんて何もない。

「この話をきいて君は苦しむのかもしれない…。でも知らないとあいつの死を意味がわからないまま覚えていることになるだろう?」

「それはあいつにも、君にもひどいことじゃないかと思って来たんだ」

「どうか忘れないでほしい…コーダにとって君は『初恋』だったんだ」

最後に搾り出すように伝えたラレンは、再び込み上げてきたものをごまかすように急いで治療室を出て行った。

＊　＊　＊

ラレンが訪ねてきた翌々日、ソナチネはアッラに伴われて砦を離れ

た。体が回復しないことをうけて、彼女に王都への帰還命令が出たのだ。

騎士団に入れば、それまでの身分は関係なくなるのが普通だがソナチネは本来公爵家の姫君だ。その高すぎる生まれはそう簡単に無碍には扱えず、実家から圧力がかかったのだろう。ソナチネが本調子なら抗うが（もともと親の反対を押し切って入団している）、今の彼女には周囲のなすがままにしておくことしかできなかった。

女騎士の過去（後書き）

この話だけが異様に暗いです。すみません。

それでも、読んで下さってありがとうございます。

女騎士の現在（前書き）

前話の暗さを若干引きずっています。

女騎士の現在

23.　女騎士の現在

悪夢によって引き戻された、過去に起こった惨劇とその後に明かされた信じられない真実を回想するソナチネは公爵邸の自室の寝台から立ち上がった。

もう5年も経ったのだ――――あの事件から。

バルコニーへと出られる窓の側に寄り、外を見た。二階にある自室からは公爵邸の中庭がバルコニー越しに見下ろせる。月光の下の光景はどこか、全てが青白い。

事件後、家へと戻ったソナチネはそのまま自室から出られなくなった。閉じ込められたというわけではなく、彼女が出て行けなくなったのだ。あれほど屋内で過ごすことを厭っていた令嬢の変わり果てた姿に、公爵邸の人々は大いに戸惑った。

ソナチネを連れ戻したアッラはすぐに砦へと戻っていった。体と心に傷を負った後輩を最後まで気遣いながら。

部屋に篭った令嬢に周囲はなんとか慰めようと心を砕いたが、彼女は応えなかった。姉もいろいろと言葉をかけたが、直接的な言動を控えたためかうまくいかなかった。

そうした日々が続いた公爵邸にさらなる悲劇が訪れる。

嫡男・ジョコーソの訃報が届いたのだ。

突然の他界は家族に何の心に準備もさせなかった。その息子ラルゲットが生まれていたことと、本人がすでに廃嫡同然だったことを合わせても、公爵邸に激震が走ることには変わらなかった。

遺体が届いた後、慌しく葬儀が行われジョコーソは公爵家の墓所に埋葬された。

それら全てから―ソナチネは隔離された。最初、彼女には兄の死すら伝えられなかったのだが、公爵邸の騒ぎに気付いた彼女が姉に尋ねたのだ。実兄のことである、隠しておくわけにもいかず自身も大きな衝撃を受けていたソプラノは彼女に話した。

先の事件も合わせ、立て続けに身の回りで起きた出来事にソナチネは完全に打ちのめされた。兄の葬儀に出席すらできず、部屋に一人篭り続けた。

「ソナチネ…？」

と、過去を思い出していたソナチネの自室の扉が開かれる。

「ごめんなさい、いきなり。外の見回りの者が、あなたが起きているのを見たの」

フィーネだった。彼女の方はソナチネの護衛で夜中でも起きていたのだろう。

「いえ、いいんです。何か…？」

自分の部屋だ、夜中であろうと起きて立っていてもいいではないか。

「ううん、少し…心配だったから」

「え…」

確かに昼間の出来事で元気を失くしてはいたが、フィーネに心配されなくてはならないほど自分はおかしかったのだろうか。5年の間に自分なりに整理できているつもりなのに。

「入っても?」

ソナチネの表情に感じるものがあったのだろう、フィーネは意を決した。

「…どうぞ」

眠れないことはわかっていたソナチネは気心知る先輩を迎え入れた。

「何を見ているの?」

「別に…庭を見ていただけです」

「そう…座っても?」

椅子の一つを示す。

「ええ、どうぞ」

座ったフィーネはソナチネも向いの席へ呼び寄せる。

「実は昼間…ね。あなたの侍女たちにきかれたの。5年前のこと」

「どうして…」

先ほどまで考えていたことを言い当てられた気がして、唖然とする。

「？　私は所属が違うから詳細は知らないのだけど…あの頃は第一騎士団の中でも話題になっていたのよ」

あなたは知らないだろうけど、と付け加える。ソナチネの疑問を取り違えたらしい。

「それで、彼女たちには私の知っていることを話しておいたわ。信用できると思うの。あたなのために知りたいって、とても真剣だったわ」

自分の方こそ真剣な顔でフィーネはもうすぐ至高の位へつこうとする後輩を見つめた。

「何があったのか私は知らない…でもあなたはそろそろ解放されるべきではない？」

「わたしは別に…彼に囚われているわけでは」

口を滑らすソナチネ。

「そう？　あなた今まで誰に何を言われようと、受け入れたことないじゃない」

誰に何を。何の話か察したソナチネは少々あせる。

「ぶっ！　何で知ってるんですかっ！」

「そりゃ、誰でもこういう話は好きだから。噂を侮ってはだめよ」

浮いた話のないソナチネだが、騎士団の中は異性だらけだ。その中にはソナチネを憎からず思う者もたまにはいる。見習いの間は釘を指されるが、正式な騎士となれば話は別、そういう意味での申し込みをされることはあったのだ。ただ、受け入れたことがないだけ。かくいうフィーネとて、そうやって出会った騎士団の者と婚約している。

「…フィーネはどこまでご存知なんです？　というかどういう噂があるんでしょう…？」

恐る恐るたずねる。

「そうね。あなたとペルデンドシ家の次男が将来を誓い合った仲で、あなたは未だに彼に操立てしてるって」

わざと軽い調子で言いながらも、ソナチネの表情を探る。一気に核心をついたが、彼女の触れられたくない部分に触ってしまったのは確かなのだ。

一方、ソナチネは。ちょっぴり脱力した。

「…なんなんですか。それは」

そんな話が作られていたのか。

「え？　…違うの？」

「誓い合った覚えはありません。生前は彼を…仇敵のように思っていましたから」

今度はフィーネの方が驚いた。第一騎士団で流れた噂はガセなのか。

「…姉にも話すように言われました。あの後、誰にも話せませんでしたから」

目を閉じ、両手を握り込んで決意を固める。

「今なら話せると思います。きいていただけませんか？」

「…私でいいなら」

ありがとうございますと続け、ソナチネは5年前の惨劇とその後をフィーネ相手に語った。

＊　＊　＊

「それでその後、あなたはどうやって…その、立ち直ったの？」

「…何ヶ月も部屋から出なかったです。でもある日気付きました。コーダが生きていたらこんな状態のままの私は軽蔑される」

「彼はこんな私を救うため命を落としたのか、そう考えたらいてもたってもいられませんでした。彼の命に見合う人間とならなければ、

と」

それは自分でたどり着かなければならない結論だった。他の誰かに諭されたのなら、ここまで強い想いを抱けなかったろう。その時の決意どおり、ソナチネは努力した。騎士団に戻り、ついに正式に騎士として叙任された。

「それで第一騎士団に？」

「はい、私は第二騎士団に戻るつもりで準備を始めたのですが…両親の反対にあいまして」

「兄が亡くなったばかりで、私にまで先立たれたら、と。…もともと騎士団に入ることにも反対していたものですから、膠着状態でした」

「そこへ助け舟を出して下さったのが、義兄上です」

「団長が！？」

何故かとっても驚くフィーネ。哀れ団長。

「…。はい。赴任地の遠い第二騎士団ではなく、王都にある第一騎士団ならば両親も安心だろうと」

義兄上はペルデンドシ家の遠縁で、それで私のことも知ったのだそうです、と一旦締めくくった。

ソナチネは話さなかったが、彼女を第一騎士団へ誘うため公爵邸へ訪ねてきた時が義兄と姉の馴れ初めだ。よくわからないが、ソプラノの一目ぼれらしい。

「じゃあ結局、そのコーダを忘れられなかったのではないの？」

「そうなりますね」

「…だとすると、あなたが誰の誘いにも乗らない答えにはなってないんじゃ？」

「…彼のことを好きだったことは一度もありません。でも」

言いよどむソナチネ。過去にあったことを話すだけなら、できるようになった。だがここからは、彼女の内面に深く関わる。

茫洋と視線をさ迷わせながら、ポツリとこぼす。

「見られているような感覚が抜けないんです」

「見られている？」

小さく頷く。

「コーダは亡くなりました。ですが、その後もしばらく彼の視線を感じたんです」

「…お化け？」

「違うと思います。だから、私が囚われているものがあるとしたら…それですね。彼が私に何かを期待していたとも思えないので、勝手に私が囚われているだけなのです」

ソナチネは生きている。生きていれば気持ちも変わるし、記憶が曖

昧になって薄れていくものだ。彼女とて女だ、これまでにそういう申し込みを受けたとき心が揺れることも胸が騒ぐこともなかったわけではない。

だけど。

（そういう時に感じる、あの視線を）

コーダのことを今更想っているわけではない。それは断言できる。だが、ソナチネの心が揺れるたび、どうしても彼の視線を思い出すのだ。

そうして、悪夢を見る。コーダの笑った死に顔が脳裏に蘇る。

こうなるとソナチネの心は前へは進めない。だから、勝手に囚われているだけなのだ。

女騎士の現在（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

家族の帰還

24. 家族の帰還

フィーネに全て話した翌日からはいつものソナチネだった。以前の日常へ戻れるわけではないが、渋々ながらもヘオンや教師たちの教えを受け、婿候補の訪問を迎える。

「…つらいですねえ」

と、トオン。

今は午後、ソナチネは副財務大臣から経済の大事な授業を受けている。たぶん心は半分死んでいることだろう。

トオンとヘオン、フィーネは再び女子会だ。といってもお茶会をしているわけではない。公爵邸の侍女部屋で密会中なのだ。ソナチネからきいた話を本人の了解を得て報告した次第。

「今のままでは誰を選んでも同じですね。ソナチネ様は好もしく想う男性像はない、と以前おっしゃってましたけど…」

だからといって、こちらで全てお膳立てした相手を夫として、ソナチネは幸せなのか。ヘオンは悩ましげに額に手をあてた。

「…しかし、そうも言ってられないわね。本人が決めないからって待ってくれないわ」

サラサラとした金髪をかき上げて、フィーネも言う。彼女とてソナ

チネを可哀そうに思う。しかし、可哀そうと思って周囲がそっとしておいたからこそ、今でもソナチネは囚われたままなのだ。ソナチネが乗り越えてくれないことには外野が何を言っても変わらない。悩む3人だがあと半月ほどで国王が退位してしまう。時間は待ってはくれない、とため息をつく女子会だった。

＊　＊　＊

「ラルが王都へ帰って来るって？」

「はい。先ほど公爵領からの早馬がつきました。ご当主様と若奥様、大奥様は早ければ明後日にはこちらにご到着とのことです」

そうか、とソナチネは頷いた。経済に関する複雑怪奇な授業の後、自室で復習らしきものをしていた彼女にカランド夫人が伝えたのだ。

「準備は？」

「明日、至急人を入れて行いますわ。ソナチネ様はいつも通りしてらしてくださいませ」

騒々しくなりますがお許しくださいね、と忙しくなったカランド夫人は仕事に戻った。

「母上も義姉上も一緒か…」

公爵領で暮らす甥・ラルゲットがその母と祖母と共に王都へ帰ってくる。なんだかまた一波乱ありそうだな、と一人ごちるソナチネだった。

＊　＊　＊

甥たちが公爵邸へ到着した。大勢の使用人を伴ってのことである。が、現在公爵邸は王宮から送り込まれた護衛によって出入りが管理されている。ソプラノが知らぬ間に手を回して公爵家の使用人を屋敷に入れられるよう手配していたらしいが、それでも多少の混乱があった。

だが7歳の子供にとって、大人たちの騒ぎは祭りも同然だ。はしゃぎながら駆け寄る姿は愛らしい以外のなにものでもなく、ソナチネの癒しだった。

「おばうえっ！　おひさしぶりです」

全速力で駆けてきて力いっぱい抱きついてくる甥を、正面玄関で出迎えて受け止めるソナチネ。自然彼女の顔にも笑みが浮かぶ。

「ラル。ひさしぶりね。馬には触れるようになった？」

兄よりも義姉に似ている。薄茶の髪に灰色の目をした本当に可愛らしい子供だ。王都を離れたのは半年前、一年のうち半分を公爵領で過ごす甥と年中王宮の騎士団の宿舎で生活するソナチネは一緒にいる時間は少ないが懐いてくれる。

「はい！　ぼくの子馬がいるんです！　今度おばうえにもお見せしますよ」

それは楽しみね、と笑いながら甥の頭を撫でるソナチネに、ようや

く走っていった息子に追いついた義姉が挨拶をした。

「ソナチネ、久しぶり。元気だった？」

ふんわり笑うスラーは柔和な印象の貴婦人だ。だが、嫁とはいえ彼女も公爵家の一員、見た目に騙されてはいけない。

「…義姉上。お久しぶりです」

そちらこそお変わりありませんか、とぎこちなく返す。ソプラノから今度の件の話を知らされているだろうにそ知らぬ様子で「ラル、急に走っていっちゃだめでしょ」と息子をたしなめる彼女が怖い。それに…。

「ソナチネ」

「母上」

義姉の後ろから、母が呼んでいる。甥を義姉に返し、急いで母の元へ寄る。

「お久しぶりです…母上はお変わりありませんでしょうか」

孫がいるとは思えないほどの若さと美貌を保つ先代公爵夫人・シメレは、眼前にやってきて軽く頭を下げ挨拶をした娘の姿に目を眇めた。

「あなたも変わりの無い事…。まだそんな髪をしていて、それにその服装」

「…申し訳ありません」

実は、ソナチネは母と折り合いが悪い。いや、生前の父とも悪かったので両親ともそりが合わないと言った方が正しい。幼いころ、姉にばかり目をかけてきた両親とは、さらに騎士団に入るときに大喧嘩を繰り広げたせいでいまだに苦手意識が先にたつ。

「まあ、いいわ。いらっしゃい、話があるのよ」

甥のおかげで癒された心が重くなる。今回のことで母が何を言うのか、考えると。

「じゃ、おばさま、後でおばさまのお馬見せてくださいね」

無邪気な子供の言葉に送られて、後ろ姿が昔と変わらぬ母へついていくソナチネだった。

家族の帰還（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

母親の心情

25. 母親の心情

「さっきも言ったけど、ソナチネ、その髪はどうしたの」

何度伸ばせと言わせるのあなたは、と母は早速たしなめる。

母の部屋だ。二間続きの居間で二人座った途端母の説教は始まった。

「申し訳ありません…。でもこれは譲れないです」

ソナチネが今の耳のあたりまでの長さに髪を切ったのは、5年前の惨劇の後第一騎士団へ所属を変える直前のことだ。騎士となって一生を国に捧げる—その決意表明のため鋏をとって自ら切った。女であることは捨てたも同然と、見せ付けたかった。

あの時も両親が騎士団へ戻ることを猛反対し、言い合いになっていた。そこへ鋏を持ち出した娘は目の前で己の髪をジョキジョキ切りだしたのだ。

「そんな髪で女王となる気なの？　全く信じられないわ」

「！　髪の長さなんて関係ないでしょう！」

やはり知っているのか、と思いながら反射的に言い返す。

「何を言っているのあなたは。女王は国の顔なのよ？　そんな娼婦のような髪では国の恥です！」

「～誰も女王にしてくれなどとは、望んでいません！！」

「…そう。そうね、ならラルに譲りなさい」

「…やはり母上はそうお考えですか」

父と二人あれだけソプラノを王妃にしようと工作に協力していた母だ。玉座を手に入れるこの機会を逃すはずがない。だが、どうあっても次女を認めない気か。

「あの子は生まれたときから私がそばで見てきました。今は幼くともいずれ賢王となるでしょう。どの道あなたは結婚などしないのでしょう。ならばあなたの死後、ラルのものとなることには変わりありません。だったら今譲りなさい」

「…それは」

「議会が承知しない？　だったら今すぐ陛下に願い出てもう一度召集してもらえばいいでしょう。自分にその器がないことを認められないの？」

「…わかりました」

すっくと立ち上がるソナチネ、その足で真っ直ぐ扉へ向う。開けて出て行こうとする彼女だが、何故か扉が重い。
不思議に思いながらも、力を込めて開ける。

「…何をしてらっしゃるのです？」

開けた扉の向こうには、赤い顔をした義姉と女子会3人が揃ってい

た。

「義母上のお話が終わったら、今度は私の話をきいてもらえないかと待っていたの」

珍しく失調した義姉がいち早く回復し、その場を取り繕う。聞き耳を立てていたのは確実だが、名分があって待っていたと言われれば仕方がない。

「…急用ができました。後にしていただけませんか」

「だめよ。今、来なさい」

急に真面目な顔になった義姉はソナチネの手をとると強引に連れて行った。後には呆気にとられた女子会と室内にはあきれた母が残った。

＊　＊　＊

「悪いとは思ったけど、義母上のお話をきかせてもらったわ」

今度は義姉の部屋だ。こちらは昔、兄が使っていた。

「…押し付けるようで申し訳ありませんが、ラルにとっても悪い話ではないのでは？」

「…そんなわけないでしょう」

はあっと盛大なため息をついて両腕を組む。いつも気品のある義姉の仕草とは思えない。

「あのね、この機会だから言っておくけど、息子が公爵と呼ばれるのも私は嫌なのよ？」

「えっ…？」

「初めて私がジョコーソと会ったとき、彼はどんな格好だったかわかる？　吟遊詩人よ。その後もずっとそうだったけど」

「その上彼は自分の身分を隠して私を口説いたのよ？　私は結婚してここにくるまでジョコーソが公爵家の若君だなんて想像すらしなかったわ」

「彼の求婚を受けたのだって、彼が自分の楽団を率いるぐらい甲斐性のある男だったからだわ」

何でも義姉・スラーの実家の伯爵家は没落しかかっており、普通の貴族の結婚相手は最初から望むこともできなかったため、彼女は平民でも自分や両親を養ってくれる人物なら誰でもよかったらしい。公爵家を飛び出して自活していた兄はあれでひとかどの人物だったのだろう。

「私が夫に望んでいたのは一つだけ、平穏でお金に困らない生活を与えてくれることよ。…それは叶わなかったけど。彼は実家に私を一人置いて行ってしまうし」

あんなに早く逝ってしまったし、と苦笑する。

「…だから突然息子を国王に、なんて私には不幸以外なにものでもないわ」

いや、それは私も同じ…、とソナチネが言い返す前にスラーはガバ

リと身を起こし、ソナチネの手をとった。

「だから、ね？　ソナチネはこのまま女王となって、ついでに結婚して子供を生んでちょうだい」

「正直、義母上の影響下からラルを守るのだって一苦労なのよ。国王になんてされたら完全に私の手から取り上げられてしまうわ」

だからお願い、そう言ったスラーはソナチネが肯くまでそのたおやかな手を放してくれなかった。

母親の心情（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

姉の提案（前書き）

短いですね。
本当はもっと字数をかけるべきなんですが。

姉の提案

26. 姉の提案

甥たちが到着した夜は姉夫婦も公爵邸を訪れ、家族だけの晩餐会が行われた。大人たちは皆、内心の葛藤を押し隠し表面上は和気藹々と食事を楽しんだ。

食事の場で甥が義兄を指し、「魔王のおじちゃんだー」と叫ぶという椿事が起こったがそれはそれで微笑ましいものだった。義兄本人と、甥に余計なことを吹き込んだ犯人と目せられたソナチネ（濡れ衣）以外には。

ところで、義兄を捕まえて「陛下の異世界行きを阻止する計画はどうなりましたか」と尋ねると「…ソプラノに止められた」と返事が返ってきた。
ちっ、使えねーな。
そのときのソナチネの心情を端的に表すとこうなる。

＊　＊　＊

その夜は、墓参りのときに話せなかった5年前の件を姉に話すことができた。義兄だけが帰り、今夜は久しぶりに実家で泊まるそうだ。姉妹二人、同じ部屋で眠るのは子供の頃以外だ。今はソナチネの自室、寝台は姉に譲り自分は運び入れた寝椅子で横たわる。

「…そうだったの」

「私は恋愛感情を持つのが、無理なのかもしれません」

話し終えたソナチネは自嘲的な笑み浮かべる。

「では、どうするの？　陛下の決めた相手と素直に結婚するの？」

「…それも決心がつきません。本音では女王になることだって納得したわけではないです。私のような人間がなっていいものでしょうか？　母上だって反対しています」

「ああ…母上のことは忘れなさい。あの人は何もわかっていないのよ」

国王との婚約を破談にした長女を母はいまだ完全に許していない。晩餐会でも嫁や孫に話しかけるばかりで、姉妹と義理の息子はいないも同然だった。義兄にとっては本当に散々　な夕食だったと言える。

「…そうでしょうか。私には障りばかりがあるように思えてきました。ラルの方がましなのでは？」

「…今も視線を感じるの？」

「最近は…。ヴィーデ様に求婚されたとき、少し」

悪夢も遠ざかっていたのだが、その夜に久しぶりにみてしまった。

「そう」

ソプラノはそのまま黙ってしまった。身重なら急に眠くなることもあるか、と思い灯りを消そうとしたソナチネを、眠っていたわけではないのか姉が止めた。

「ねえ、ソナチネ。こう考えるのはどう?」

「姉上?」

寝台で目を閉じたまま、姉は言葉を連ねる。

「その視線はあなたを望んでいた者のものではないわ…あなたが道を誤らないか、見張っているものなの。あなたを縛りつけようとするものではなく、女王となったあなたが国事を誤り、民を傷つけないよう監視する目なの」

姉の言葉に、泣きそうになる。そんな風に考えたことはなかった。

「見張るって言い方が嫌なら、見守るでもいいわ。どう…?」

嗚咽が漏れる。姉の言葉が、この5年の呪縛を優しいものへと変えてくれる。気付けば涙が止まらない。溢れてくる熱い涙を拭いながら、言った。

「そうっ…か。うっ、ひっく。コーダ、が見守って、くれているん、ですね。ふえっ」

「そうよ、だからあなたは彼の目に恥ずかしくない女王とならなければ」

「はい…。」

全て納得できたわけではない。でもこの夜は一つだけ、ソナチネにも覚悟ができた。

死んだ者は帰ってこない。だからソナチネは努力し続ける、その理由ができた。

姉の提案（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

侍女の目撃談

27. 侍女の目撃談

「ソナチネさまー！！　きいてくださいっ」

公爵邸での晩餐会の後、二日ほど経った。国王の退位まで半月を切り、いよいよソナチネは忙しくなっている。付け焼刃の知識となることは目に見えているが、女王教育も佳境に入ってきた。ヘオンたちの行儀作法などの授業は終わり午前中も頭を悩ませるようなこ難しい話をする教師が送り込まれるようになっている。

母はまだうるさいが、姉の助言を受けて聞き流すことにした。

義姉は元の上品な貴婦人に戻った。時折すがるような目で見てくるので気持ちは変わらないのだろう。

ちなみに甥たちが公爵邸へ急遽帰ってきたのは、ソナチネの即位式へ出席するためだったそうだ。ソプラノだけでなく、国王御自ら筆をとって呼んでくださったとのこと。

午前中の授業が終わって、昼食で一息ついていたソナチネのところに王宮へ所用に行っていたトオンが血相を変えて飛び込んできた。

「トオン！　ノックしなさい！　走らない！」

子供にいうような注意をしてしまうのは給仕をしていたヘオンだ。

「そんっなこと言ってる場合じゃないのっ！　大変ですっ、ヴィーデ様浮気してますっ」

「はあっ！？」

「トオン…ヴィーデ様はまだソナチネ様の夫でもなければ、婚約者でもないのよ？」

驚いて言葉にならないソナチネに代わり、ヘオンがこめかみを押さえながらトオンに言う。

「今はそうでも同じことでしょっ！　ソナチネ様っ、どうしましょう！」

「どうしましょうって…。トオンは何か見たの？　誰かからきいたの？」

ヘオンの言うとおり、別に彼は婚約者ですらない。困惑するが、それでどうしろと言うのだろう。

ヴィーデは先日の求婚以来公爵邸を訪ねていない。だがあの時の彼は真剣だった。トオンの言うとおりなら、彼は真顔で嘘のつける人間ということである。それは確かに問題だ。

「見たんですっ！　この目で見たんですっ！」

「何を？」

「だからあ、浮気現場ですってば！」

トオンの話すところによると、彼女が所用を済ませて帰ろうとすると言い争う声が聞こえたという。声のする方へ行ってみると、そこにはヴィーデと若い女性がいて何やら言い合っていたそうだ。

「その上、すっごく意味深に見つめ合っていたんですっ！」

「ふーん」

「ソナチネ様反応薄すぎっ！　一大事ですって！」

「うーん。確かにね。陛下も彼がイチ押しだから、このまま行ったら彼にとっては一大事かも」

「彼にとってはって…」

「だって恋人がいても強制的に私と結婚させられるわよ？　一大事じゃない」

思わず突っ込んだヘオンを振り返る。ヘオンもさすがに苦笑いだ。

「ソナチネ様おかしいですよお。ヴィーデ様の方は二股する気かもしれないんですよ！？」

ああそっか、とそれでもソナチネの反応は薄い。

「トオン、女性の顔は覚えてる？」

「もちろんっ！　この目に焼き付けたわっ」

「ヘオン？」

「ソナチネ様。結婚前から嘘をつくような男は碌なものではありませんわ。…たとえどんなに顔が良くても！」

「だからソナチネ様、確かめて参りましょう」

可憐な侍女はそう言ってソナチネの手をとった。

侍女の目撃談（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

女子会の探索

28. 女子会の探索

ヘオンの指示のもと、午後の授業は仮病で休むことにした。そうしておいて、護衛のフィーネも巻き込み王宮の魔術院へ忍び込むこととなった。
自宅である公爵邸の抜け穴、王宮の抜け道両方を知るソナチネだからこそ可能なとこだ。

「今更だけど、こっそり行くのはまずくないかしら?」

「今頃何言ってるんですっ、フィーネ様っ」

行かなきゃいけないときもあるんです女にはっ、とはトオン。

ヘオンはソナチネが公爵邸を離れていないことを偽装するために残り、護衛のフィーネと目撃者のトオン、ソナチネの3人は王宮へ入ったところだ。

そうかなあ、正直に王宮へ行きたいって言えば出してくれるんじゃ、と未だにぼやくフィーネだが本気で止める気はないらしい。

「…まだ逢引中だったら、ただの覗きですよね」

「ソナチネ様っ、何てこと言うんです!? 浮気現場を押さえたって言うんですよっ」

「いや、そうじゃなくて。ぞろぞろ護衛を連れてやることでもないなあ、と」

「…そろそろ魔術院よ、黙ったら？」

フィーネの言葉で口を閉じた残り2人。しばし無言で歩く。

王宮の一角、魔術院の建物は独特だ。王宮の建物は大概が、王国の特産物である白花石で建造されており、すこし黄みがかった白の柔らかい色合いをしている。

が、魔術院だけは違うらしく、いかにもそれらしい毒々しい黒紫色をしている。形も一風変わっていて、規模の割りには塔が何本もあり、それらはどういう用途に使われるのか、外部の者には知られていない。

その魔術院の毒々しい建物の裏手と思われる場所に3人はこっそりと忍び込む。魔術に使うのか正体不明の物体（恐らく植物）が大量に日干しにされていて、妖しい雰囲気が漂う。

「…トオンはどこで彼らを見たって？」

小声でソナチネが確認する。

「ここじゃないです。外でしたけど、裏じゃなくて正面だっだのかなあ？」

あとの2人もだがトオンとて魔術院へ普段出入りするわけではないので、先ほど自分のいた場所があまり確かではない。

どうでもいいがトオンはこんなところで一体何をしていたのだろう、とはフィーネの疑問だ。

「どうしましょう？　さすがに中に入るのはまずいと思うんです。何が仕掛けてあるかわからないですもんね？」

「そうね…。侵入者除けの術が施してあるかもしれないわ」

トオンは当てにならないと他2人が相談する。

「そもそも入り口がわからないですし…、あ」

しっ、と指を立てるソナチネ。

毒々しい黒紫色の壁が続くばかりで、扉や窓らしき物が見当たらない。が、たまたま誰かが通りかかるのか、話し声が聞こえてきたのだ。

3人は控壁の影に隠れた。

3、4人の魔術師のローブを纏った男女が丁度建物から出てくるところだった。何やら話し合いに夢中らしく、彼女たちには気付かず行ってしまった。

「あれ、壁みたいに見えますけど扉ですね」

壁と同じ石で作られた扉が付いていたらしい。まぎらわしい。

「あそこから入れそうですけど、どうでしょうね…」

中に入ってみるべきか。しかし彼女たちも目的は忍び込むことではなく、ヴィーデの恋人？を見ることだ。外から眺められるならともかく、魔術院に入り込んではただの侵入者だ。

「…ソナチネ様っ。ここまで来て何言ってるんです？」

「うーん…。ま、別に積極的に見たいわけでも」

もう帰ろうか、そう言いかけた時、トオンが肩を掴んだ。

「あの人っ！　あの人ですっ！」

今度は、彼女たちがいる場所とは反対方向から魔術院へとやって来る人物がいた。

どうやら、トオンが目撃したヴィーデの恋人らしい。その若い女性、というよりは少女と言った方が正しいような年頃の娘はローブを纏っている。

２０歳に１，２歳届かないくらいだろうか、長い栗色の髪をお下げにし、パッチリとした紫色の瞳の印象的な可愛らしい少女だ。

「ほらっ！　あんな可愛い娘を口説いたんですよっ、彼！」

本当はああいうのが好みなんですヴィーデ様はっ、と地味にソナチネを傷つけるトオン。

「ん？　あれって確か。ねえ、フィーネ」

「そうだわ…あれは、あの方は」

何かに気付いた様子なのは騎士２人、トオンは驚きに声を上げる。

「知ってる人ですか！？」

「うん…、というより、トオン、何故あなたが知らないのかがわからない」

「えええっ!?　どういうことです!?」

「トオン、あれは副魔術師長よ」

「……えええっっ!!」

「王妃付きだったあなたが何故知らないの。あの方はコトネ様とはご懇意だったのではないの?」

「えーっと、そういえばちらっと見かけたことがあるようなないような…」

「トオンがコトネ様付きになったのは、あの方が一度失踪されていた後のことだから」

それ以前は、元の世界への帰還方法を探すため魔術師長と共に頻繁に会っていたが、コトネが一度この世界で生きることを受け入れてからは会う必要性がなくなったため訪ねて来なくなったらしい。情報通を自認するトオンとは思えない失態だ。

とはいえ。

「…あの方は確か、２０年くらい前から副魔術師長だったと…」

「そうね、記憶にある限り、副魔術師長といえば炎獄の魔女ピウ・モッソだわ」

「あんなに可愛い娘が！？　あの炎獄の魔女！？」

可憐な容姿と恐ろしい二つ名を持つ副魔術師長はほぼ伝説の人物だ。

「ハっ…てことは？」

トオンの見たものは。

「まあ、恋愛に年齢は関係ないとは思うけど」

「私、ピウ様の実年齢考えたくないなあ」

それだけで呪われそう、とソナチネ。

見た目が異常なほど若い炎獄の魔女の実年齢についてはともかく、こうなるとトオンの目撃したものが痴話喧嘩やそれに相当するものであるという話は一気に信憑性が薄くなる。恋愛に年齢は関係ないだろうが、伝説の人物がヴィーデのような若造を相手にするだろうか。そりゃ奇跡のような美形だが。

「…今度こそ本当に、帰りましょう」

「う…ごめんなさい」

ヴィーデの浮気疑惑で相手の顔を見に来ただけなのだ。とにかく、相手？の顔は見たので目的は達せられた。もうここに用もない。

３人が、抜け道へ戻ろうと振り返ったその時。

女子会の探索（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

女騎士の選択（前書き）

１５話目で折り返しと書いていた通り、すでに佳境です。

女騎士の選択

29．女騎士の選択

見咎められぬよう身を屈めていた姿勢から立ち上がり、来た方向へと戻ろうとしたソナチネに、ここでは聞きたくなかった声がかかった。

「ソナチネ、こんなところで何をしているんだ」

ギギギギギ。そんな音を立てそうなほど細かく震えながら、声の主へと振り返る。血の気が引いていくのを覚えながらも、何とか声を絞り出す。

「……へいか」

振り返った先にいたのは、国王アレグロその人であった。
今日も変わらず麗しい彼の金髪は陽光を弾いて輝いている。その瞳も青空に映えて美しい。
ついでに彼は、国王としての政務の途中なのか近衛だけでなく様々な人間を大勢従えていた。

我に返り、慌てて臣下の礼をとろうとする3人を国王自らが押しとどめた。

「ああ、挨拶はよいから…。しかし本当にここで何をしていたんだ？」

「はい。あのですね、ええっと。今日は本当によいお天気だったので…」

驚きと狼狽で慌てふためいたソナチネはほぼ意味のない言葉を連ねる。そこからどう言い訳に繋げるつもりなのだろう。

「恐れながら、国王陛下。ソナチネ様はヴィーデ様にご用がおありなのです」

フィーネの言葉をナイスアシスト！、と思ったのは一瞬だけだった。

「そうだったのか！　おお、よい巡り会わせだな、本人が来たぞ」

国王の言葉につられて後ろの建物を振り返ると、幾人かの魔術師が出てくるところだった。その中にはヴィーデや体重の戻りつつある魔術師長や副魔術師長の姿も見える。

どうやら裏手と思っていたこの場所は魔術院の表側、裏口のように目立たないわかりにくい扉は正面玄関だったらしい。

彼らは国王を出迎えに来たらしく、膝をついて臣下の礼をとった。

鷹揚に受ける国王。

両者のちょうど間に挟まれる位置にいた3人は横によけている。

ご用、の内容についてはいまだ白紙であり、窮地からまた別の窮地へと追いやられそうなソナチネがうろたえていると、渦中の美形さんが彼女の存在に気が付いた。

「ソナチネ様…？　何故ここに」

急いで歩み寄ってくるヴィーデの迫力に少々気圧されるソナチネ。

今日も鴉の濡れ羽のような髪は艶やかで、明るい日の下で見るその

顔は神々しいほど美しい。灰紫の瞳をひたとソナチネ一人に合わせた彼には他のものが映っていないかのよう。

ご機嫌よう、などと無意味な挨拶をあてどなく口にしてみるが、何もわかってないかのような国王が最悪の言葉を放ってくれる。

「ソナチネはそなたに用があるそうだ」

何、私のことは気にするな、と人の良さそうな暖かい笑みを浮かべておっしゃってくれる国王に殺意を覚えながら、鈍いながらも精一杯頭も働かせ言い訳を考える。

（こんな大勢の前で何を言えと…。ええとこないだみたいに趣味をきくとか？　いやわざわざここに来てまでやることでも。あと他に用事…まさか浮気について？そんな他の人もいるのに！　なんだろう用事って。何かあったかな…）

――あるだろう大きな用事が。周囲の目にはそんな思いが込められていたのだがソナチネに無言の訴えは通じない。

しびれを切らしたのか、他の思惑があるのか、一向に何も言おうとしないソナチネの目前にヴィーデが来る。彼女の両手をとって己のもので包み込んだ。灰紫の瞳が蒼い瞳を覗き込む。

「…ソナチネ様。私に会いにあなた様が来て下さったということは、少しは希望を持ってもかまわないということでしょうか。私は決して完全な人間ではありません。ですが、国を守りたい、良くしていきたいという想いに嘘いつわりではないのです。どうか、あなた様の隣に立ち、支えていくことをお許し願えませんか…？」

熱い眼差しで熱心に語るヴィーデを前に、ようやく鈍いソナチネが悟る。

（そういえば…こないだも似たようなことを言われたような。あれ？）

先日、一緒に王宮で乗馬をした後のやりとりがやっとソナチネの脳裏に蘇る。

（この状況…私はわざわざ彼に会いに来た…用事があって。つまり）

端から見ると、球根…違う求婚の返事をしに来たように映っているのではないか。そこまで思い至ったソナチネは青褪める。そんな、何の心の準備もしていないのに。

硬直した彼女の反応をしばらく見ていたヴィーデは意外とあっさり手を放して、少し下がった。

それが合図だったかのように、今度は国王の声が響いた。

「どうするのだ？　ソナチネ。彼で不足なら他の候補者もいるぞ」

どういうことだ、とソナチネが国王の方を見ると、確かに彼の後ろには他の婿候補で最後まで残っていた面々が揃っている。

さらには、よくよく見ると国王が引き連れていた様々な人間たちの中にはマルカート伯を始めとした重臣たち、義兄、神官長までが顔を揃えている。そして彼女の後ろには魔術師長。

何故国の重鎮たちがここに居合わせるのか。

そもそも国王はここで一体何をしているのか。

そして一考えたくはないが、ここへ来させることにやたら熱心だっ

たへオン。

鈍い鈍いと言われ続けているソナチネだが、その時は直感が働いた。

（は、嵌められた…）

衆人環視の前で堂々と申し込むヴィーデをおかしいと感じるべきだった。もちろんそれでも遅いが。国王の退位まであと半月、なかなか態度をはっきりさせないソナチネに周囲が気を揉んでいることはわかっていたが、こんな手に出てくるとは。

承知するにしても拒絶するにしても、国王や重臣たちの前でやれば引き返せない。受けるか断るか、それはソナチネしか決められないことだが、この状況からも周囲はきっと――本命・ヴィーデを受け入れるのだと思っている。

（だれも彼もがその思惑をぶつけてくる…）

女王となれば、ずっとこの調子ではないのか。誰かの思惑に流され、自分の決断なのかどうかすらわからなくなる。悲しいことに、ヴィーデだってソナチネ自身を望んでいるのではない、その動機は高潔だが女王の夫の座を欲しがっているだけだ。

進退窮まったソナチネは唇を噛む。

そこへ――。

王者の孤独の片鱗を味わうソナチネの視界にこの場の空気を読まない闖入者が入ってきた。他の者は彼女に注目しているので背後から

来る存在に気付かない。

彼は場の空気を読んでいないのではなく、そもそも完全に周りが見えてないらしい。何やら顔を突っ込まんばかりに分厚い書物を読みながら魔術院の反対方向より歩いてくる。器用なことだ。

しかし。

そこに舞い降りたのは神の啓示か、悪魔の入れ知恵か。

気付けばソナチネは叫んでいた。目を瞑って、ひとさし指を勢いよく振り上げて。

「わ、わたしが選ぶのはっ――　あの人です！！」

その指先の指す方向を、ソナチネを固唾を呑んで見守っていた全員が目を丸くして振り返る。ザザっと、その場にいる二十人以上の人間が振り返った気配で、本に夢中の彼もついに顔を上げた。

「へ？　なんだあ？」

今まさに自分の人生を力技で強引に変える災厄が降りかかったことを理解しない彼―レジェロはぽかんと口を開けた。

女騎士の選択（後書き）

次で「消えた王妃と白銀の騎士」は終わりです。

読んで下さってありがとうございます。

女王の誕生（前書き）

ここで、一旦完了です。

女王の誕生

３０．　女王の誕生

いつかの舞踏会でソナチネにダンスを申し込みすらしなかった幼馴染のレジェロは早々に婿候補から外されていた。本人も言った通り立候補する気などなかったので、彼にとってはこの話は終わったも同然だった。だから、何も知らずに魔術院へ足を運んだのだ。
そして、ソナチネ同様レジェロにも拒否権はないようだ。気の毒に。

そして――――。

「とうとうこの日がやってきたわね…」

あれから半月、今日は国王アレグロの退位式と女王ソナチネの即位式が立て続けに執り行われる。
国王の門出を祝い、新女王の誕生を寿ぐかのように、外には快晴の青空が広がっていた。

退位式というのは王国の歴史でも初めてのことなので、決まった手順というものがない。ただ、王冠を下ろせば済む話でもないので王宮の広い閲兵場では国民を集めて国王が何やら儀式を行っている。

「姉上…吐きそうです」

ソナチネとその姉は国王の退位式には臨席せず、直後に予定されている即位式のため王宮内にある控え室でその時を待っていた。

「しっかりしなさい…。後悔しても遅いのよ」

服の上からでも分かるほど目立ち始めたお腹を抱えて、妹を叱咤する。

「うう…重圧に押しつぶされそう」

この日のために用意された女王の衣装は分厚い緞子でできていて、非常に重い。スカートの中にはペチコートを何重にも重ねてあるのでさらに重量がかかる。その上頭には髪飾りと付け毛、耳と首、腕にも飾りを連ねている。それらは地味に肩を凝らせる。

ただ、ソナチネの言う重圧はそちらではない。

吐きそうだ。プレッシャーに負けて。

自分は耐えられるのだろうか。今、国王に向けられる国民の惜しむ声をきいていてもそう思う。退位が広く国民へ公示されたのは半月前、もともと有能と呼び声高いアレグロは魔族の件もあり、人気が高かった。彼の退位を誰もが惜しんでいた。

「殿下――。アレグロ様の退位式が無事終わったそうです」

部屋の外からマルカート伯が声をかける。

ソナチネは即位にあたり、形の上でアレグロの嗣子となっている。

そこで一時的にだが彼女は王女となり、殿下と呼ばれる。

（殿下って…それは）

自分ではなく王子だった頃のアレグロの呼び名だ。それが今や己に向けられている。それだけではない。

「ソナチネ…慣れるまで時間がかかるだろうけど、呼ばれて後ろを振り返るようなベタな真似はしないでね…」

そうだ。今日の即位式が終われば今度は「陛下」と呼ばれる。後ろにアレグロがいるのでは、と振り返らずにいられるだろうか。

項垂れるソナチネだが、廊下からマルカート伯が呼んでいる。打ち合わせは済んでいるのだからどうしたというのだろう。

「こちらへ――――」

案内された部屋にはアレグロ―今はもう陛下とも呼びかけられない―が待っていた。

窓の外へと顔を向けていた彼だが、ゆっくりとこちらに顔を向けた。一瞬目に光るものが見えたのは気のせいか。

「ありがとう」

晴れやかに笑い、言う。その穏やかな様子に、不思議とソナチネの心も落ち着いていく。

「へい…アレグロ様」

「ありがとう、ソナチネ。君のおかげだ。私は―行くよ」

「…行ってしまわれるのですね」

「ああ。その前にお礼を言わなくては、と。よく決心してくれた」

「…淋しいです。ずっと、アレグロ様を兄上のように思っていましたから」

「今は父上だ」

おどけて笑う。そういう顔をすると幼い頃の面影が蘇る。幼馴染の幸せそうな顔を見つめていたソナチネの、心が据わる。

「では父上様。最後に私のお願いをきいていただけますか？」

「…なんだい」

「コトネ様を…幸せにしてあげてください」

「実を言うと、昨日までここに来る勇気がわきませんでした。そうしたら出てきたんです…コトネ様からいただいた手紙が」

「あの方はこちらの字を読むことは最初からできましたが、書くことはできないようでした。文字を覚えるため熱心に学んでおられましたので、手紙を書くのも練習だったのでしょうね」

「書いてあることはとても他愛のないものです。陛下がうざ…いえ頻繁に訪ねてくるとか」

そう話しながら、窓の外へ遠い目を向ける。

「そうして初めて思い至りました…結局私たちはコトネ様に何を返せたのだろうと」

「コトネ様は国を救ってくださいました。まだ成人にも満たない少女だったのに。しかし、異世界に帰ってしまわれたコトネ様に我々は、何も恩返しができていない…」

「だから――我々はあなたを差し出します。このペザンテ王国から救国の神子への報酬は、アレグロ様、あなたです」

そういうことですから、どうあってもアレグロ様はコトネ様を見つけ出し、幸せにしてあげなければならないんですよ―そう言って、ソナチネは彼の目を見つめ、微笑んだ。

「――そうするよ」

かつての妹分から思いがけなく暖かいはなむけを寄せられたアレグロは堅く握った拳を胸にあてて誓った。

そして、部屋を出ようとしたソナチネは最後に言った。

「コトネ様に伝言をお願いします。『帰るところがないので、どうか捨てないであげてください』、とソナチネが言っていたと」

返答はきかなかった。

振り返ることなくソナチネは歩く。窓から差し込む光を浴びたその顔には先ほどまで見えた不安はなく、これから挑むものへの決意と勇気に満ち溢れている。足取りも勇ましい。

この後は――即位式の前に、まず結婚式だ。

彼女の顔は女王としては頼もしいが、式直前の花嫁のものではなかった。恐らく、結婚式の方は完全に頭にない。

そんな彼女の物語である。

＊　＊　＊

その後のペザンテ王国の歴史書によると、ソナチネ女王の治世下では魔族との交流がさかんとなり魔術が発展する一方、女王の夫・レジェロの尽力で王国の経済も安定していた。経済が安定し、気候も穏やかな日々の続いたその期間は女王の黄金時代とも呼ばれている。

女王の誕生（後書き）

ここまでお付き合い下さったことに心から感謝いたします。
誤字・脱字やつじつまの合わないところがあったとは思いますが。
暇つぶしよりもお目汚しとなっていたら申し訳ございません。

また、ノリと勢いだけの習作ですので、ご都合主義的展開をしております。

第一部完ですが、続きます。
その先の未来まで書いておいて、続かせる気です。

婚約者（仮）の憤慨（前書き）

話が戻ります。

もはや異世界トリップ関係ないです。

婚約者（仮）の憤慨

1. 婚約者（仮）の憤慨

「なんっでこんなことになってんだっ！！」

ソナチネの逆プロポーズ（？）の直後、騒然としたその場はとりあえず国王アレグロによって収められた。今は王宮の一室で国王、ソナチネ、レジェロ、神官長、魔術師長、副魔術師長、マルカート伯ともう一人ソナチネの知らない大臣らしき人、の８人で集まっている。

「ご…ごめんなさい」

国の重鎮の揃う場所であることを忘れ、わめくレジェロに対しソナチネは俯いて謝ることしかできない。その顔は赤い。

「俺は言ったよな？　お前の邪魔はしないって。それでなんでっ、お前が俺の邪魔をする！」

「邪魔って…誰か好きな女性でもいたの？　それなら今からでも白紙に…」

心底申し訳なさそうな表情をしたソナチネに、うっと言葉を詰まらせる。

「まあまあ、我々もソナチネ様を追い詰め過ぎました。ここは一つ、お二人とも落ち着いて」

思惑が外れたはずのマルカート伯が、見かねて口を出す。

「いえ、レジェロの言うとおりです。のんきに歩いているものだから、つい、巻き込みたくなって」

ひどい理由である。ソナチネ自身が選ばれた理由より、ぞんざいだ。

「おまっ、どんだけ失礼なんだ！！」

わなわなと震えるレジェロは怒りのあまり、それ以上続けられない。湯気が出そうだ。

「レジェロ、そろそろ口を慎みたまえ。彼女は次期王位継承者だ」

無言でやりとりを見ていた国王がたしなめる。

レジェロは「お前が言うかっ！」と言わんばかりに睨み付けた。元遊び友達、微妙に遠慮がない。風采の上がらない青年が神の化身のような容姿の国王に楯突くので他の人々は目を見張っている。

そんなレジェロを見て、ますます眉を下げたソナチネが懇願する。

「ですが陛下、そういうことです。私が軽率だったのですから、先ほどの件はなかったことに…」

「いいや！　これで良かったのだ。ヴィーデには少々気の毒なことをしたが、きっとすぐに立ち直るだろう。そうだな？」

最後の問いかけは副魔術師長・ピウに宛ててのものだった。

「さあ？　振られたことなんてなさそうだけど。でも、どうでもいいや」

あたしは私的なことには立ち居らない主義だからさあ、と自分の栗色の三つ編みをいじりながらぼやく投げやりな上司の一人。先ほどまでは重要人物だったのにどんどんヴィーデの扱いが悪くなっている。

「それよりも！　ソナチネちゃんは本当はどうしたかったわけ？　あたしから見てもヴィーデは優秀だよ。袖にしていいんだ？」

２０歳前にしか見えない年齢不詳の魔女がソナチネに詰め寄る。なぜか今度は真剣だ。

「…それは後悔していないです。不思議と」

「…へえ。じゃ、こいつを選んだことは？」

「それは…やっぱり軽率でした。レジェロの都合を少しも考えてなかったです」

「ああ、それぐらいは思い至るか。でも、ソナチネちゃんは？　こいつでいいんだ？」

師匠っ、と叫ぶのはレジェロ。魔術師長だけではなく、ピウとも懇意らしい。魔術師でもないくせに師匠と呼ばせてもらっているのだろうか。

「うるっさい。今は黙んな。ほらっと」

魔女が指で何やら文字を書くと、その途端「ふぐっ」と口を押さえるレジェロ。何か魔術でもかけられたのだろう。

これでますますいたたまれなくなるのはソナチネの方だ。レジェロは何も悪くないのに。

「こいつのことは気にしなくていいよ。いつものことだから」

で？とばかりに目で尋ねる。

「今ここで言うんですか？」

「もちろん。適当に決めたなんて皆信じるとでも？」

吸い込まれそうな大きな紫色の瞳が、問う。

「レジェロには昔から…我が侭が言えるんです。何でも。それで、つい」

お前の頭の中では夫選びの基準＝我が侭が言えるかどうか、なのか。勢いだけで生きるのもいい加減にしろ。

射殺しそうな目でレジェロが睨んでいる。まさか子供時代の延長のままの人間関係でいたことがこんな結果を生むとは。

「…レジェロは有能です、ヴィーデには悪いが私も推しましょう」

「その通りだ。彼は元々候補者だったのだから、別に支障はない」

何故か国王と魔術師長が肯き合っている。

そこへ、これまで口を開かなかった大臣らしき人物が口を開く。伯爵と同世代か少し上ぐらいだろう、短身でふくよかな腹部を持ち、綺麗に整えた口ひげがどことなくユーモラスな御仁だ。

「…こちらとしてはスケルツァンドが部署を離れるのは痛手なのだが」

外見を裏切る重々しい声である。機嫌もあまり良くはない。レジェロの上司なのだろうか。

「仕方がないでしょう。女王の夫というのは替えがきくものではありません」

諦めて差し出してください、とマルカート伯。表面から見ただけだが、反りが合わなさそうだ。

「悪いがレジェロ、君に拒否権はない。半月後、ソナチネの即位式の前に結婚式を執り行う。よろしいですね？」

これで話は終わりだ、とばかりに締めくくった国王が見たのは一切発言をしなかった神官長、前神官長があのような形で職を辞してから肩身の狭い神殿の長は、是と答えるのみだった。

婚約者（仮）の憤慨（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

子供の遊び　そのいち（前書き）

話がもっと戻ります。

子供の遊び　そのいち

2.　　子供の遊び　　そのいち

「こんにちはっ！　ねえ、あなたなにしてるの？」

気が付くと、少し年少と思われる女の子が至近距離に立っていた。
そんなに夢中で観察していたのだろうかと話しかけられた少年―こちらもまだ幼い―は驚きながらも訝しく思った。

少女は可愛らしい。陽光を弾き溶けるような白い輝きを放つ髪は銀、大きな瞳は蒼く好奇心に満ちており、生き生きとしている。いとけない小さな体はぽてぽてとしているが、それがいかにも子供らしく愛らしい。
着ている服は良家の歳のいかない女の子が纏うような上等の膝丈のワンピース、上に白いエプロンを掛けている。だが良家の子女にしては、笑顔をいっぱいに浮かべた顔も袖をまくった腕もよく日に焼けている。

「べつに…。観察」

思いがけず可愛い顔に出くわした少年は、不承ぶしょうながらも答える。
少年はさほど特徴のない灰茶の髪と目、こちらも身なりは良い。そこから伸びる細い手足は青白いが。

少年の前にあるのは薔薇の木の枝、花のつかない時期のそれは葉が青々として美しいが、それだけだ。その上、棘がある。

「ふうん。おもしろい？　それお花の木？」

「木を見てるんじゃない…ほら」

少年の指差すところには、何やら枝に茶色い塊がついている。虫のさなぎだ。

「！　なあに？　これ」

大きな目を丸くして少女が見る。

「さなぎ。ちょうちょになるんだ」

「これが！？　ちょうちょ？　ひらひらってとぶ？」

「そう。ばらは棘があるからあんまり虫とかつかないんだ。だけどこのちょうちょはばらにさなぎをつけることで、逆に生き残れるようにするんだって。めずらしいちょうだよ」

自分が知ったばかりの知識を披露したくなるのは子供の性分だ、最初は無愛想だった少年の顔が熱心に語ることで徐々に明るくなる。

「ふうん？　よくわかんない」

興味がないというより、本気で理解が追いつかないようだ。確かに子供には少々難しい。

だが、その返答が気に入らなかったのだろう、少年は不機嫌になる。

「…あっそ。じゃ」

一方的に会話を打ち切り、そっぽを向いてしまう。が、さなぎが気になるのか、その場を離れようともしない。少女の存在を無視してしまおうとする。

「ねえねえ。じゃあどんなちょうちょになるの？　きいろ？しろ？」

ももいろだったらいいなあ見たことないもの、と相手の様子を頓着せず勝手に話す少女。返答がなくとも気にしていない。

「ノノねえさまがね、ちょうちょの羽のはえたお姫さまのおはなしてくれたの。そのお姫さまのはねはももいろだったんですって」

「…」

こちらの都合を考えずしゃべり続ける少女に、少年の我慢の限界が来る。と、意地の悪い思いつきが浮かぶ。

「さなぎの前のちょうちょは知ってる？」

「？　いもむしでしょ」

庭師が前におしえてくれたもん、と当然の顔で答える。

「…じゃ、さなぎに入ったあと、いもむしがどうなるかわかる？」

少年の目論見は少々あてが外れたが、まだ続きはある。

「？」

大げさに首を傾げる少女の髪が、銀色の流れとなってシャラリと揺

れる。

「いもむしはさなぎの中でとけちゃうんだ…ドッロドロに。一度からだを全部とかしてからもう一回新しいちょうちょの姿に変えるんだって」

君の好きなちょうちょはぜんぶそのドロドロだったものだよ、と得意顔で締めくくる。少女の顔が嫌悪で歪むのを見ようとする。蝶の羽が人間についていることを夢想するぐらいだ、期待通り悲鳴くらいは上げてくれるだろう。

が。

「！！　すっごーい！　この中のことがわかるの！？　見えないのに」

意に反して、少女の顔はこれまで以上に嬉しそうに輝いていた。大きな瞳からはキラキラとした光が零れんばかり。

「おにいちゃんはすごいね。なんでもしってるんだ！」

屈託ない笑顔でそう言われると悪い気はしない。

褒められたことで機嫌の良くなった少年は、それからしばらく覚えたての知識を少女相手に語った。先日、遠い親戚から送られたばかりの百科事典で読んだ知識だ。

薔薇の植え込みの前で座り込み、２人で話す。少女はなんでも感心し、ニコニコと笑っている。理解しているかどうかは別として。

小一時間ほど経っただろうか。焦った声が聞こえた。

「ネネー！　どこにいるのー！」

「あー、ノノちゃんだ。かえんなきゃ」

少女は立ち上がり、声に応えた。

「おねえさまー、すぐ行きますー」

くるりと振り返り、ニコっと少年に笑いかける。

「おにいちゃん、ありがとう。じゃあね」

「う、うん。じゃあ」

少し淋しく思いながら、挨拶を返した。

たっ、とそのまま駆けていこうとした少女だが、すぐに引き返してきた。

座ったままの少年の前に立つと、ワンピースの裾を両手で少し上げた。

「おはつにおめにかかります。わたくしのなはソナチネでございます」

軽く膝を曲げ、淑女のような挨拶をしてみせた。驚いた少年も慌てて立ち上がり、礼を返す。

「僕はレジェロ・スケルツァンドです。どうぞお見知りおきを」

自分たちの肩に王国の将来が掛かっていることなどとは露ほども知らない幼い2人はこうして出会った。
ソナチネ6歳、レジェロ7歳の頃である。

ちなみにこの場所は王宮の中、ブリッランテ宮の庭園の隅だ。

どうして王室の私的な場所で子供2人が自由に過ごしていられるのか。ソナチネもレジェロも王子・アレグロの遊び相手にと王宮に連れて来られている。ソナチネは王子の婚約者である姉のコネ、レジェロはただ単に「歳が近いから」だ。
が、2人とももの見事に他の遊び相手の少年たちから弾かれている。レジェロの場合はこの日初めて王宮に来たソナチネよりも以前から。

パッとしない上に、身体能力の劣るレジェロは走って行ってしまう王子たちには付いていけず、なかなか仲間に入れてもらえない。一人王子の部屋に残された彼は、つい外へ出てしまい、庭で珍しい物を見つけてそのまま見入っていたのだ。

ソナチネも大方同じような理由である。彼女の場合は部屋で王妃（アレグロの母）と話している姉の側にいたのだが、飽きてこっそり抜け出したのだ。王子の部屋と王妃の部屋は子供の足では決して近くはない。どこをどう通って来たのか、植え込みに見入っている変な男の子をたまたま見つけてしまい、声を掛けたのである。

子供の遊び　そのいち（後書き）

園芸と昆虫に関する知識はありません。適当です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

侍女の失踪

3. 侍女の失踪

国王・重臣を含めた8人の談合が終わった後、ソナチネはそのまま王宮に留め置かれた。花婿が決まった以上、本格的に即位への準備が始まるそうだ。何の心構えもない状態で生家を離れることになってしまった。

「もう家に帰ってはならないのですか…」

さすがに寂寥感がわく。半月前までは家を出て騎士団の宿舎で暮らしていたとはいえ、生まれ育った場所だ。この先のことも相まって、不安になる。

「お気持ちはわかりますが、これからは王宮がソナチネ様のお住まいとなります。お慣れ下さい」

先ほどの部屋とは別の場所、かつてよく通ったブリッランテ宮の一室でお茶を淹れてもらっている。

お茶を淹れてくれているのは、王太后の側近と目される侍女長・グラツィオーソ伯爵夫人だ。自らお茶を淹れるような立場ではないのだが、それが趣味とのこと。

「ソナチネ様さえよろしければ、王太后様がお会いになりたいそうですよ」

いかがいたしましょう、とお茶を差し出しながら問うてくる。たい

そう良い花の香りがする。

「そうですか…」

正直、気が重い。これから息子を異世界へと旅立たせようとする母だ、何を考えているのか想像がつかない。どうしよう、とお茶に口をつけた途端。

「ソナチネ様ーっ！　大変です」

いきなり扉を開けてトオンが飛び込んできた。午前中の再現か。ごふっとお約束の反応をするソナチネ。せっかくのお茶が、だいなしだ。

「何です？　騒々しい、トオン」

グラツィオーソ夫人の言葉はそれほど強くなかったのだが、はいっ、とトオンが背筋を伸ばして立ち竦む。今までは見られなかった光景だ。夫人はそんなに恐ろしいのか。

「…今度は何が大変なの？」

一体今度は何を訴えに来たのか。いやそれよりも部屋の前まで物音一つ立てずにどうやって来たのかが気になる。息を切らしているのに、走る音などの何の前触れもなかった。

「見苦しいところをお見せして、大変失礼いたしました。わたくし、ソナチネ様が居をお移しになるので、あなた様のご衣裳やお道具等を荷造りさせていただくため公爵邸へと参りました。ですが、これを見つけ出し急ぎお持ちした次第でございます」

そう言って、頭を下げるとそのままソナチネの元へ手に持った物を捧げながら寄る。トオンとてやればできるらしいが、まだるっこしいことこの上ない。

「何？」

「ソナチネ様。公爵邸にヘオンがおりませんでした。代わりにこれが」

「！」

急いで渡された物―ソナチネ宛の書簡に目を通す。

「職を辞す！？　どうして！」

最後まで読んだところ、先ほどの魔術院での一件にヘオンが絡んでいることを謝っていた。手紙によると、トオンはヘオンによって魔術院におびき出されたので何も知らないこと、企んだのはヘオン一人で国王や他の人々はそれに乗っただけのこと、ということだった。主君であるソナチネを裏切ったことの責任は重大、侍女の職を返上する、と。

「そんな…だからって辞めなくても」

確かに計画的に嵌められたことは、気分の良いものではない。だが、なかなか夫を決められなかったのはソナチネ自身に原因があることで、周りが焦るのも仕方のないことだ。

それに。

「あれぐらいされなければ、最後まで決まらなかったかも…」

それでもアレグロは行くだろう。そうなれば、今度は女王の夫の座を巡り、表立った争いが起こったかもしれない。そんな自体は死んでも嫌だ。

「トオン、ヘオンの行き先はわからない？」

「はい。ヘオンは行き先を言わなかったそうです。ですが…」

「心当たりが？」

「はい。ヘオンの行くところは一つしかないと思われます。恐らく実家でしょう」

「そう。じゃ…」

今すぐ行きましょう、そう言いかけてグラツィオーソ夫人の方を見る。そういえば、王太后に（事実上）呼ばれていなかったか。

「…ソナチネ様、王太后にはソナチネ様はお具合が優れないと、申し上げておきますわ」

それまで黙って成り行きを見ていたグラツィオーソ夫人が頷いた。侍女一人を真剣に案じるソナチネに何かを感じたのか。

ありがとうございます、そう言ってトオンと2人部屋を出る。

だが。

護衛を引き連れて訪ねたヘオンの実家では、本人はおらず連絡も来ていない、とどこか退廃的な風情の母親が言った。

「一体どこへ…」

途方にくれるソナチネの横で、いつもの軽い持ち味を失ったトオンが呟いていた。

手を尽くして探してもらったのだが、その行方は杳として知れなかった。

侍女の失踪（後書き）

ここまで読んで下さって感謝します。

財務大臣の幸運

4、財務大臣の幸運

一方、何の前触れもなく理不尽な人生をつきつけられることとなったレジェロは。

「…何故あのようなことをおっしゃったのです？」

談合の後、王宮の廊下を上司である財務大臣ー口ひげの人ーと2人歩きながら問うた。レジェロも背の高い部類ではないが、前を歩く大臣の頭は彼よりも低い。

「ふん？　何のことだ？」

大臣―トラン・クイッロは貴族の生まれではない。今は男爵家の婿養子として入っているが、元は平民だった。平民が行政庁の長となることを阻む法は先王の代より撤廃されたのだが。

「閣下。ごまかさないで下さい」

喰えない親父であることは重々承知しているが、それでも言わずにいられない。

「…閣下があのようなおっしゃり方をすれば、マルカート伯が私を推すと踏んでいましたね？」

「ああ、そのことか。しかしよくやった！　いやあまさか、私の部

下から王室の一員が出ようとは、思いもせなんだ」

案の定、ひげ親父はしたり顔で振り向く。名誉なことだ、と。

「…お、私の自由意志は？」

「何が自由意志だ。女王を妻とできるのだぞ？　それにソナチネ様は…」

「今はそういう話をしているのではありません。私が入庁した時のことをお忘れで？」

「はて何だったか。やたら自信過剰な若い者がおるなと思ったが」

「…王室の一員となれば行政の長にはなれません」

「そうだったか？　しかし女王の夫としてそれなりに発言を重視されるではないか。意見を言うのは自由だぞ。どんどん提言するがいい」

「もういいです…」

この御仁には何を言っても無駄だ。前評判ではヴィーデに決まりかけていたソナチネの夫の地位が子飼いの者に何の拍子か転がり落ちてきたのだ。その上何が起きても大臣自身には痛くも痒くもないのだから。

何かあったらできるうる限り、目の前で跳ね飛びそうなほど軽い足取りの男を道連れにしてやろうと密かに決心する。丸い体が鞠のように見えるので蹴り飛ばしたい。

「ま、私の地位をお前にやれんのは残念だがな」

決心したところで、こんな言葉が飛んできた。

やっぱりわかってんじゃねえか。と、かつて生意気にも財務庁で働き始めた新米であったにもかかわらず、大臣の目の前で「私はあなたの後継者となってみせます」とほざいた青年は思った。

＊　＊　＊

（ソナチネの災難を傍観してる場合じゃなかったな）

自宅に帰ると、予想通り両親や長兄夫婦に囲まれた。王宮も手を回すのが早い。

ソナチネほど高貴な家柄ではない子爵家では、それこそ青天の霹靂だろう。特に昔から末弟を軽んじていた長兄は慌てふためいている。

「一体どういうことだ！　何故お前が王室に婿入りすることになる！」

「…兄さん。お忘れでしょうか？　俺はもともと候補に、と打診をいただいてましたよ」

認めているわけではないが、お前のような風采の上がらない男が何故と言わんばかりに詰め寄られると、反発心がわく。

「だが本命がいたのではなかったのか！　お前は辞退したはずだろ

う」

ほっといてください、と言おうとした弟だがそこへ母親が割って入った。心を鎮めてくれるような、穏やかな声だ。

「レガート。もうおやめなさい」

白いものが混じり始めた焦げ茶の髪と緑色の瞳の、ふくよかな貴婦人である。

「レジェロ、突然の話でさぞ戸惑ったことでしょう？　今日はもうお休みなさい。明日話しましょう。ね？」

横で父も訳知り顔で肯いている。なぜ。

「…それでは、失礼します」

そうして、自室へ引っ込んだ。

（…まずい時にまずいところへ居合わせた、か。）

あの時あの場所にいなければ、こんなことには。レジェロは呼ばれてもいなかったのに。他人事としていたのが仇となった。知っていれば決して近づかなかった。

（何なんだろう、この引きの良さ。いや、悪さ）

先日、ソナチネが仕事部屋へ押しかけてきたのも恐らく、自分が丁

度目の前を通りかかったのを見たからだろう。あの時話などしなければ、彼のことなど忘れていたかもしれない。

それに。

（あん時、コトネ様のことを知らぬふりを通していればなあ…。）

そう、一度王宮から姿を消したコトネを、偶然馴染みの大衆食堂が臨時休業だったために違う食堂へ行ったことで発見したのはレジェロである。そ知らぬ顔で見逃していれば、まわりまわって国王の阿呆が退位しようなどということにはならなかったかもしれない。

（それにしても『なんでも我が侭が言える』だと！？　あいつは自分の我が侭で俺の人生変える気か？）

ああ、返すがえすも子供時代の自分が愚かで憎い。いつも気が付いたら彼女の調子に持ち込まれてしまう呼吸が身に付いている。今だって―特に想い人もいない―結局、振り回されるような予感がひしひしと感じている。

寝台に突っ伏したレジェロは頭を抱えて自分の弱腰を呪った。他の人間相手ならいくらでも突っかかれるのが身上だが、なぜだかソナチネにだけはそうできない彼だった。

財務大臣の幸運（後書き）

ここまで読んで下さって感謝いたします。

魔女の問い（前書き）

この世界での魔術はドラ〇もん的都合の良さで働きます。

魔女の問い

5、魔女の問い

あれから5日経ったが、ヘオンは一向に見つからない。

「どこでどうしているのかしら…」

何か犯罪にでも巻き込まれてはいないか。見目麗しいヘオンを不埒者がさらって閉じ込めているのではないか。悪い想像が頭をかすめる。

自宅にいた時と変わらず、女王教育は続いている。今は各行政機関や議会の代表者との顔合わせが主だ。職業柄、文字を読むより計算をするより人の顔と名前を覚える方が得手なので、それほど苦ではない。

その忙しい日々の合間をぬって、ヘオンについて騎士団に情報がないか問い合わせるが、返答は芳しくない。

「ソナチネ様っ」

議長との（話についていけないソナチネだけがぎこちない）会談の後、一旦ブリッランテ宮に与えられた仮の自室に戻ろうとしていた彼女を、いつもの持ち味を取り戻したトオンが呼び止める。

「トオン？」

「先ほどからお部屋で副魔術師長様がお待ちでっす！　これからお

戻りですかあ？」

「ええ。ならすぐ行くわ」

急ぎ足で向おうとする。が、さすがに現在ソナチネは日中用の簡素なドレスを着せられている。がんばっても足運びが遅い。

＊　＊　＊

「や、元気？」

いつもながら見た目は美少女な副魔術師長が、居間の長椅子に座ったまま気安い挨拶をした。三つ編みのせいでどちらかというと素朴な印象を受ける。

と。

「ヴィーデ様…」

炎獄の魔女は、これまで見た中で一番凄みのある美形ぶりの漆黒の魔術師を伴っていた。

トオンは何故これを言わない。

「ソナチネ様、突然押しかけて申し訳ありません」

さすがに立ち上がってソナチネを出迎えたヴィーデは、軽く頭を下げた。そのまま彼女の前へ来る。

「いいえっ！　悪いのは私です！」

ヴィーデの顔を見たソナチネはガバっと直角に頭を下げる。何も考えずに動いたので、コルセットが妙な具合になってしまった。が、かまわず頭を下げたまま続ける。

「あんなところで恥をかかせるつもりではなかったのです！　なんというか…ええっととても戸惑ったというか、追い詰められたというか、その」

どう言い訳すればいいのか、わからない。嵌められたのはソナチネの方であるし。

下げたままの頭になかなか返答がこない。何か言ってくれない限り頭を上げるに上げられない。

「……やはり、私はあなたを追い詰めただけのようですね。頭をお上げください」

勿体ないことです、と長い沈黙のあとその美声が降ってきた。

「ですが、言って下さったら良かったのですよ？　心に決めた方がいらっしゃると」

驚いて顔を上げるソナチネの視界には穏やかに笑うヴィーデがいた。心に決めた方。

誤解を解くべきか否か一瞬迷うが、ヴィーデの後ろでピウがにやにや笑いながら首を振るのでやめておく。

「ええ、はい。そう言っていただけると嬉しいです…」

よくわからない答えになってしまう。

あいつを選ぶとはソナチネ様は見る目がありますよ、と悲しげに笑ってヴィーデは退出していった。相変わらず悲しそうな顔も妙に妖しく、綺麗だった。

＊　＊　＊

「さて、と。じゃ、邪魔もんはいなくなったし、本題本題」

部屋に残った炎獄の魔女は楽しげに手のひらをすり合わせている。ソナチネは向かいに座り、しばし休憩だ。

「？　何かご用がおありだったのですか？」

てっきりヴィーデを連れて来ただけかと思っていた。

「ん？　もちろん。あたしそんなヒマじゃないよ。っと、その前に」

急に真面目な顔で居住まいを正す。

「騙してごめんね？　許してくれる？」

「…て、じゃあ演技してたんですか」

「そう。ヴィーデはそこまでは知らないよ。あたしがケンカふっかけただけ。トオンちゃんにわかんないよう、この三つ編みをほどい

てね」

こりゃあたしの目印みたいなもんだからさ、と片目を瞑ってみせた。結果的には必要なかったのだが。

しかし、それではいろんな意味で彼が気の毒だ。やはりどこか、彼の扱いはひどい。

「許すというか…。それでは、お話の後で私の頼みをきいてはいただけませんか？」

別に不問にしてもいいのだが、ひとつ閃いたことがある。

「うん？　いいよ。んじゃ先にあたしの話ね」

魔女は鼻歌すら出てきそうな上機嫌だ。どうしたというのだろう。

「質問！　レジェロのどこが決め手だった？」

暇じゃないとか言ってませんでしたか。副魔術師長がこんな物見高い人物とは知らなかった。

「…申し上げたではありませんか」

それもあんな偉い人たちの前で。

「ええー、あんなんじゃだめ。他にないの？」

ねえ、とソナチネの背後に控えるトオンにまで同意を求める。

「そうですよっ！　ソナチネ様。あれではレジェロ様がただの都合

のいい人みたいです！」

「～～どうしてあなたが知ってるの！」

堪りかねて後ろを振り返る。少しばつの悪そうな顔をしていた。

「そりゃ、あたしが話したから。トオンちゃんはおもしろいね」

「…もういいです。どうせ私のことは筒抜けなんです」

「じゃ、筒抜けついでに教えてよ」

「なんて言えば納得していただけるのでしょうね…」

遠い目になる。

「…よく知っている人ですから。考えてみれば男性では、陛下の次に親しかったです。幼馴染ですから。言いたいことも言えますし。それに…」

「それに？」

「信頼しています。昔から」

「へえええ…。なるほどねえ」

そうかそうかうんうん、と何やらしきりに頷くピウ。なんだかとても嬉しそうだ。

「でもう、レジェロ様ってあの噂の張本人ではなかったですかあ？」

トオンの横槍が入る。

「噂？」

「えっと、あ、はい。やっぱりお気になさらず」

慌てて口を塞ぐトオン。

「あの噂の件か。…もしかして、ソナチネちゃん、知らないんじゃ？」

「何をでしょう？　噂って？」

ピウもトオンも何のことを言っているのだろう。

「だあれも本人には言えないってか。それが普通かね」

よっしそれならあたしが教えましょう、と身を乗り出すピウ。

暇ではないはずのピウとの会話はその後も続いた。

それが終わった後には憮然としたソナチネが残された。

魔女の問い（後書き）

ここまで読んでくださり、感謝します。

婚約者（仮）の要請

6．婚約者（仮）の要請

翌々日、近衛をぞろぞろと引き連れた国王とともに、ブリッランテ宮を出て王宮の公的な部分であるヴィーヴォ宮へ向おうとするソナチネを呼ぶ者がいた。

「ソナチネ様。お忙しいところ申し訳ありませんが、少々お時間をいただけませんか？」

言い方は遠慮しているが口調に有無を言わせぬものを込めたのは、気の毒な犠牲者もとい目下の婚約者（！）とも言えるレジェロだった。今日も彼は魔術師のローブを着ている。

「おお！　仲が良いな。ソナチネ、こちらはいいから二人で庭にでも行って来なさい」

満面の笑みで勧めてくれたのは、国王陛下。後は若い2人で、とでも言うつもりか。

対して、ソナチネは婚約者へ細い目を向けている。

「…私も話があります。行きましょう」

では失礼いたします、とさっさと歩き出す。難しい顔をしたレジェロも後に続いた。

目立たぬようにだが、何人かの近衛もついてくる。

＊　＊　＊

実用本位なヴィーヴォ宮には見所のある庭はないが、それでもベンチの置かれた簡単な東屋があった。が、２人とも仲良く座って歓談する気などないらしい。ソナチネの方が険悪な雰囲気を出している。

「ねえ。ピウ様に教えていただいたんだけど。私の噂を流してくれたんですって？本当にあなただったの？」

「噂？　今か？」

「！　そうじゃなくてっ！　魔族が来る前の話よ」

「ああ、そのことか。…そうだ、俺がやった」

あっさり認めたレジェロにソナチネは詰め寄る。

「！　どうして！？　そんなに私が嫌いだったの！？　あんな話…私が脳みそまで筋肉でできているだなんて！　ひどい！」

４年ほど前、王都の社交界ではある噂が流布した。曰く「コン・フォーコ家の次女は頭が悪い。脳みそは筋肉、その上腹筋は６つに割れている」と。ソナチネが男であったならともかく、公爵家の姫君である。醜聞以外の何物でもない。

「確かに鍛えてるけど、私は筋肉がつきづらいの！　六つになんて割れてないわよ！」

そこか。そこなのか。

「おかしいと思ったのよね。あの頃フェルマータは『脳筋、脳筋』ばっかり言ってきたし。なんだか、夜会へ行くたび、皆お腹見てくるし…。その上、いまだに会う人会う人みんながわたしをバカだと思ってるじゃない！　どうしてくれるの！」

それは本人にも責任があるではないのか。

「…誰も教えてくれなかったのか？」

「そうよ！」

「そりゃ、気の毒だったな。そこで、だ。…俺が噂を流したんだ、だからもうやめた方がいいんじゃないか？」

「何を！？」

「何をって…お前バカか。結婚に決まってるだろ」

呆れてため息が出てしまう。

「えっ…」

「もう俺の顔なんか見たくはないだろう。丁度良かった、俺は今日そのことを頼みに来たんだ。…他をあたってくれ」

そう言って彼は深く頭を下げた。

「…やっぱり他に好きな人がいるのね？　気付かなくてごめんなさ

い」

きっぱりとした拒絶で、急に悄然としてしまったソナチネは、頭を下げられたことを悲しく思っていた。彼が本気で言っていることがそれでよくわかる。

「…噂を流したことは怒っているわ。でも、それとこれとは別ね。私が嫌だからって、他の人を同じ目に合わせては駄目よね」

陛下に頼んでみる、とソナチネは請合った。

その悲しげな顔を見て、レジェロの手は一瞬動きかけるが、すぐに下げられた。

「悪い…」

「いいの。自分が恋愛できないからって、あなたにまで愛のない結婚を押し付けたりしないわ」

潤んだ目で言われると固い決心がぐらつきそうになるが、堪える。

「そういうんじゃないんだが…。もっと相応しいやつがいるだろう、たぶん」

「うん…。じゃ、あなたはその人と幸せになって。悪かったわ、本当に」

揃って苦い顔のまま、若い2人の歓談は終わった。

どうしてあんな噂を立てたのか、問い詰めることを忘れたことを思

い出したのは国王の元へ戻った後だった。

婚約者（仮）の要請（後書き）

ここまで読んで下さり、感謝します。

国王の苦労（前書き）

苦労っつーほど苦労してません。

国王の苦労

7．国王の苦労

「どうして駄目なんです！？　私が嫌だと申し上げているんです！」

先ほど婚約破棄したばかりのソナチネはすぐに国王に願い出た。もう結婚はいやだ、跡継ぎはラルゲットか姉のところの甥か姪がいるではないかと。

ヴィーヴォ宮の一室で人払いをしてもらっている。

「何を言っているんだ！　そなたは一度決めたことを今更引き返せるとでも思っているのか？　これは国事なのだぞ？！」

それに本気で一人で女王としてやっていけるつもりなのか、と見たことのない厳しい顔つきで国王は言った。それは確かにそうだが、こんな時に無駄に威厳を使わないでほしい。

「…陛下はずるうございます。ご自分はコトネ様以外を押し付けられるのがお嫌なのに、私やレジェロには強要されおつもりですか」

相手の痛いところを突いてやった。国王の顔が弱りきった普通の（それでも美形だが）青年のものになる。

「―そこを言うか。…だが、本気でレジェロは嫌がっているのか？」

「本気でした。最初から死ぬほど嫌がっていたではありませんか」

そりゃ私が悪いですが、と口を尖らせた。

「…私にはそうは思えん。実際、レジェロはその想い人とやらのことを言っていたのか？そんな相手がいると本人の口からはっきり聞いたのか？」

「それは…でも、はっきり言うと私が傷つくとでも思ったのかも」

「そうなのか？　そなたはレジェロに想い人がいると傷つくのか？」

「！」

思ってもみなかった点を指摘されて、目を見開く。

「そんなんじゃ…あれ、どうなんだろ」

御前であることを忘れて首を傾げる。初心な反応を前にした国王は、付け入る隙があることにほくそ笑む。

「ソナチネ、まだ少しだが時間はあるんだ。結論を急がずゆっくり考えなさい。一時とはいえ私もそなたの父となるのだ。レジェロと話してみよう」

意味の無い先送りの言葉を放った国王はこれで終わりとばかりにさっさと部屋を出て行った。後には首をひねるソナチネだけが残された。

＊　＊　＊

ソナチネを横に伴いヴィーヴォ宮で地方より報告に来ていた直轄地の代官との謁見を終えた国王アレグロは、早速彼女の婚約者を呼び出した。時間がないのだ、問題はさっさと解決してもらわねば。

謁見の間の横の控えの間で2人向き合う。ここは公的な場なのでアレグロは立派な革張りの椅子に座り、相手は立ったままだ。磨かれた石の床にその影が綺麗に写る。

「…承知してはいただけないのですか」

いろんな感情を抑えているせいか、声が平坦だ。

「承知も何も既に決定しておる。…死ぬほど嫌なら国外にでも逃げればよかったであろう」

偉そうにしているが、肘掛にひじをつき頬杖をついた国王の態度はかなり砕けている。

「恐れながら、陛下。私にも失いたくない物がございます。そうそう簡単に国や家を捨てて行けるわけがありませんでしょう」

そう言ってレジェロはアレグロの目を見返した。

「そうか、私とは違うと言いたいのだな。…だがそなた、その捨てたくないものに彼女も含まれるのではないのか?」

「…」

無言で片眉を上げる。答えたくないらしい。しかしアレグロはかまわず続ける。

「わからんな、今回のことはそなたには僥倖だと思っていたが。望外のものが手に入る絶好の機会ではないか」

それでも男か、としまいには言い出す。

「それに、大勢の前でそなたを望んだソナチネに恥をかかせる気か？　候補に挙がった時点でそなたから断ることは許さぬと申したはず。そなたの方こそ承知していたのではないのか」

「本命がいたではありませんか。今からでも遅くはありません」

「…どうしてそのように頑なになる」

「…私は女王の夫には相応しくない理由があります。それは…陛下もクイッロ卿もご存知ではない」

「理由？　そんなものがあれば最初から外されておる。何のことを言っているのだ」

まさかそなた、既に妻がおるとは言わんだろうな、とアレグロは気色ばった。

「そういうことではありません。…そうですね女王以外の夫なら、運が良ければなれる機会はあるかもしれません。既婚でも重婚でもありませんよ」

そう言ったレジェロは、子供時代をよく知るアレグロですら見たこ

とのない暗い顔つきで話し出した。
自分の…枷を。

＊　＊　＊

レジェロの話を聞き終えたアレグロは椅子に座ったまま、こめかみを押さえて頭痛を堪える仕草をしていた。レジェロは既にこの場を辞している。

夕暮れが迫っているのかそろそろ暗くなってきた室内で、一人悩むアレグロに突然声がかかった。

「～陛下。ちょっとよろしい？」

「うわっ！　て、副魔術師長か。どうしたのだ」

気配なく横から現れた炎獄の魔女に心底驚かされる。いつもこんな感じで現れるのだ彼女は。

だが、いつも飄々としている魔女が少しおかしい。何故だか、同じように額を指で押さえ、頭痛を堪えているかのような顔をしている。

「今のを耳に入れてしまいまして。それでお話が」

「なんだ？」

思わず聞き返す。

魔女は一つ頭を振ると、何かを吹っ切ったような決然とした光をその紫色の瞳に宿し、言った。

「陛下。　大丈夫です。　あの二人は、私が守ります」

ずっと、と。

彼女のものとは思えない優しい表情をしている。

その顔に浮かぶものには、他のどこかで見覚えがあるような気がした。

国王の苦労（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。

王太后の回想

8．王太后の回想

そして――――。

国王の横での地方の代官との顔合わせも終わり、ブリッランテ宮の仮住まいの部屋へと戻ったソナチネはとうとう王太后から再度召しだされた。彼女と王太后の予定が合わず、延び延びとなっていたのだ。

王太后・ソステーヌは北の隣国の王家出身だが、先王に嫁いだのはほんの少女の頃、流暢にこの国の言葉を話す。その外見にも外国人らしき片鱗は見られない。息子があれだけの美形なのだ、妙齢の頃には遠国にまで鳴り響く美貌を誇っていた。『巻き毛の豪奢な金髪は精巧な金細工、濃い蒼の瞳は深い海の色をそのまま映したかのよう』そう謳われていた美貌にも年齢による変化はあるが、それさえ美しさの一つへと変えている。

それだけでも威圧感がある。今、目の前に座る御仁には。

夕食後、王太后の居間にて向かい合うソナチネと部屋の主、一方は不安そうに、もう一方は謎めいた笑みを浮かべている。

「お久しゅうございます。王太后様」

「久しぶりね…わたくしの息子とあなたのお姉さまが婚約破棄して以来かしら」

そうだった。自分に起こるあれやこれやで忘れていたが、王太后にとっては息子を袖にした女の妹だった。それが、後を継いで女王になる、と。背中を汗が伝う。

「ええっと、その節はどうも…」

まて。どうもはおかしいだろう。

自分につっ込む。

「…姉のことをお怒りでしょうか？」

観念してきいてみる。謝り倒すべきなのだろうか。考えてみれば、姉と義兄の出会いの場を作ったのは自分なのだ。

「ふふ…相変わらずなのね、あなたは。率直なのは好きよ」

「は。あの、姉の件では多大なるご迷惑を…」

「ああ、いいのよ。そのことはとうに終わっているわ。ソプラノも嫁いで子供が産まれるそうだし、幸せになってくれれば私も嬉しいわ。少し、からかっただけよ」

小さい頃から知っているせいか、実の娘のように思っているのよ、とのこと。

優雅に扇で口元を隠しているが、目だけでも好意的な笑みを浮かべていることがわかる。

姉のことで叱責を浴びるわけでもないとわかったソナチネはほっと息をついた。

「わかりやすいこと。それで、今日あなたと会っている理由だけど」

「はい…私も突然のことで戸惑っております。…王太后様には、どれだけ衝撃的だったことか…」

「そうね、たった一人の息子ですもの。…まさか異世界召喚がこんな結果になるなんて、夢にも思わなかった」

確かに夢にも思うまい。立派に国を治めていたはずに息子がとち狂、いや、妻のために国を捨てようとは。

「でもね、それだけの相手と出会えるって、素晴らしいと思うの」

そう言った王太后は扇を下げ、少女のようは微笑みを見せた。

「…そうですか？」

「そうよ！　本当なら出会うはずのない二人なのよ！？　それが出会って、恋をして、全てを捨ててもいいほどの愛を育んだのよ。素晴らしいじゃない」

「…」

嫌な予感がする。もしや。

「わたくしもね、思い出したわ、亡くなったあの方を。最初はまだ子供だったから、仲良くなんかできなかったものだけど、いつしか二人には何物にも代えがたい愛の絆が生まれていたの…。政略結婚に本当の愛が芽生えたのよ？　素敵じゃない？」

素敵なのかもしれませんが。捨ててもいい全てに自分たちが含まれ

ているのはいいんだろうか。それにその愛の結晶である息子を失って本当にいいんですか。

半分死んだ目をしたソナチネを無視して、王妃の愛の思い出は語られる。

「あの方はよく小さな花束をくれたものよ…とても素朴で愛らしい。『君はとても美しい顔をしているが、私が愛するのはこの花を喜べるような愛らしい素直さだよ』って。でもわたくしが本当に嬉しいのは、素朴な美しさを二人で分かち合えることだったわ…」

「難しい顔で考えているあの方の額の皺をよく伸ばしてあげたわ…、この指で。『政務のことを考えるのは終わりよ。わたくしのことを考えなさい』って。そうしたら『君にはとてもかなわないな、私のお花さん』って微笑むの。あ、お花さんってわたくしのことね。それから……」

そうか、国王は母親似だったのか。その事実をかみ締めながら、息子に続きその母親のノロケ話をきくこととなったソナチネの夜はこうして更けていった。

王太后の回想（後書き）

軽すぎな気もしますが。
ごめんなさい。

ここまで読んで下さり、感謝します。

魔女のお手柄

9．魔女のお手柄

「ネーネちゃん！　朝だよ！　起きなって」

そんな声が突然降ってきた。つい最近もこんなことがあった気がする。

時は朝、昨夜王太后に付き合って就寝するのが遅かったソナチネは深く眠り込んでいた。

だが、それの何が悪い。自室として与えられた部屋の寝台で大人しく眠っていたのである、なのに何故こんな理不尽な起こし方されねばならないのだろう。

最初の声に応えず眠り続けたソナチネは、現在、寝台の端に正座している。　寝ていた状態から自分の意志に反して勝手に体が動き、気がついたら座っていたのだ。

目の前には腕を組んだ炎獄の魔女。不敵に笑っている。無駄に魔力を使わないでほしい。

「…おはようございます」

他にも言いたいことはいろいろあるが、まずは挨拶だ。

「うん、おはよ。早速だけど、見つかったよ。探し人」

前置きなしに爆弾を投げつけてくれる。こちらは起きぬけだというのに。

「…、探し人って、ヘオンが見つかったのですか！？」

そう、この前訪ねてきたピウにヘオンの捜索を依頼していたのだ。騙されたおわびに。

「そう、そう言ってるの。仕事が早いでしょ、私って」

「ありがとうございます！！　騎士団は見つけられなかったのに！　ピウ様はすごいですね」

「でしょ。もっと褒めて」

「本当に感謝いたします…！　それで、どこに？」

「ええー、もっと言ってくれてもいいのに。まあいいか。王都だよ。プレスト商会って知ってる？　知るわけないか」

ああ、また微妙にバカにされた。確かに知らないが。

魔女は続ける。

「王都で穀物を扱う商会だよ。ヘオンはそこで下働きの仕事を得たらしい。今日もたぶん働いているはずだね。どうする？」

「下働きを！？　王宮の侍女が？　どうしてそんなことを」

「さあね。見つからないようにしたかったのかも。で？」

どうするのか、視線で問う。答えは決まっている。

「…迎えに行きます」

「やっぱそうこないとね！　よっし、じゃあこの炎獄の魔女様にまかせなさい。騎士様を、塔から出してお姫さまのところへ連れて行ってあげましょう！」

＊　＊　＊

その日もソナチネの予定は詰まっていた。即位式まで7日を切っている、そろそろ式の手順を覚えねばならない。その儀式は神殿にて行われるのだが、予定では結婚式がその前にある、即位するソナチネの横には夫となった存在がいるはずなのだ。

が、この日は彼女一人で神殿にて神官の説明をきいた。国王が話したはずだが、どうなったのか結果をきいていない。

（やっぱり、断ってるんだろうなあ…）

今日は魔女が隙を見て、ソナチネを連れ出してくれることになっている。それを待つ彼女の耳に神官の説明は入らない。こんにゃく、いや婚約は保留となった相手のことをふと、思う。

（…そういえば、けっこう前に婚約した話をきいたんじゃなかったっけ？）

ついでに、そのことについて祝福の言葉を贈った覚えがある。だが、その後結婚式を挙げたともきかない。婿候補に挙げられたというこ

とは婚約継続中ですらないということか。まあ、貴族同士の結婚話など上がっては壊れていくものなのだ。

（その彼女が忘れられないのかな。）

そうだとしたら、やはりレジェロが気の毒だ。自分が泣いて嫌だといえば国王も折れるかもしれない。ヘオンを無事連れ戻したら一回やってみよう。

（…別に、いいもん。）

一人で全てを抱えることになろうとも。姉も義兄もいるし、甥も大きくなれば力を貸してくれることだろう。

それならば神官の説明を熱心にきくべきだが、そんなことを考えながら話を聞き流すという致命的な失敗をやらかしていることに気付かない。

と、そこへ声がかかる。後ろからだ。

「王女殿下、少々よろしいでしょうか」

王女殿下。一体それはどこの誰だ。

硬直するソナチネだが、昨日謁見の前に国王と一緒に署名した書類を思い出す。

（もうそんなことに…。）

トオンも誰もそうは呼ばなかったので失念していた。正式にアレグロの嗣子となる書類に署名し、国璽が捺されたのだ。まだ公示されてはいないのだろうが、それは効力を持つ。

のろのろと振り返ると、魔術師のローブが見えたが魔女ではなかった。知らない顔だ。

「国王陛下がお呼びです。今すぐいらして下さい」

「しかし、ソナチネ様は今…」

神官がすぐに異を唱える。が、相手も無表情に押し通す。

「すぐにお戻りいただけます。お越しください」

眉一つ動かさないまま、一歩も引かずに同じ主張を繰り返す。

「…仕方がありません」

どうぞ、と言われたので魔術師のあとに続いて神殿を出ることにした。

車寄せに乗ってきた馬車があるのだが、魔術師は違う方向へ向う。

「こちらへ。副魔術師長がお待ちしています」

「はい…」

ついて来てしまったが、良かったのだろうか。ピウの名を出した時点で国王の呼び出しが口実であることはわかっている。ひとけのない方向へ行こうとする相手に疑念を持った頃。

「やっほー！　来たね」

「ピウ様！　トオンも」

魔女とトオンが待っていた。２人とも簡素な町娘のような服装となっている。

「ソナチネ様っ、ヘオンは元気そうですっ、さっき見てきましたあ」

人のことを言えないが、トオンも抜け出すのがうまい。仕事はどうした。

「そう、よかった…。早く迎えに行きましょう」

「はいっ！　ここまで乗って来た馬車を待たせてありますっ」

目立たぬよう、王都内で普通にすぐに捕まえられる雇い馬車で向った先は商館の集まる区域だった。馬車の窓を覆い、ソナチネも他２人と同じような服に着替える。

「…いきなり行っていいものなのでしょうか」

「トオンちゃんに先行ってもらう？　逃げないかな」

「まずはっ、物陰から見てみるというのはいかがでしょーか！」

トオンはなんでも物陰から見るのが好きなのか。

「よっし、商会には話をつけよう。どういう経緯で雇ったのか知りたいし」

というわけで、魔女が商会の人間と話してこっそり見守れるように手配し折を見て声をかけよう、と計画した。

魔女のお手柄（後書き）

魔女というより超能力者みたいです。

ここまで読んで下さり、感謝します。

侍女の行方

１０．　侍女の行方

見た目美少女魔女がどう話をつけたのかわからないが、商会への申し出はすんなり受け入れられた。今は商会の入る３階建ての建物の中庭で一人働くヘオンの姿を、室内から見守る。

「ああ、あんなに手を真っ赤にして…下働きというのは本当だったのですね」

ヘオンは中庭の井戸の前で何やら洗い物をしていた。冷たい水でたおやかな白い手が真っ赤になっている。寒いのだろう、鼻先もほんのり赤い。

「あの方は、うちと取引のある食堂のご主人の紹介で来られたのです」

プレスト商会の主、プレスト氏は汗を拭きながら言った。ヘオンがわけありなのは承知していたが、まさか貴族の娘で王宮の侍女とは思わなかったという。

「食堂っていうと…」

「ほらっ、コトネ様がいらっしゃったところですよっ、きっと」

「ええっと違いますね、その食堂のご主人の知り合いの知り合いの食堂です」

それはまた遠い遠い伝手を頼ったものだ。

「…とにかく、彼女には王宮に戻ってもらいたいのです。許していただけますか？」

「はあ、かまいませんが。しかし何故王宮の侍女様がこのようなところに」

「まあいいじゃないの、こうして迎えが来たんだから。じゃ、さっさと行こう」

魔女が強引に話を打ち切り、３人中庭へ出る。

「ヘオン…探したわ」

「！　ソナチネ様…申し訳ございません！」

しゃがんで敷布のような物を洗っていたヘオンは、３人、特にソナチネに気付くと慌ててその場に手をついた。

「誠意をもってお仕えすると誓っておきながら、ソナチネ様にした裏切り…私はどうなってもかまいません、どうぞ他の者には責めを負わせないで下さい」

「頭を上げて、ヘオン。もう…私は気にしていないわ」

「…」

手はついたまま顔を上げるヘオン。美しい顔は涙で濡れている。先日までは綺麗だった手はひび割れ、あかぎれができている。服装も下働きららしくみすぼらしい。
ソナチネはその変化に心を痛める。

「ねえ、ヘオン。帰ってきてはもらえないの？」

「ソナチネ様！」

「私が許すと言っているのよ？　だからいいじゃない」

「ですが…。あなた様はこの先私を信用することがおできになりますか？」

裏切り者なのですよ、と首を振る。

「ええー！！　じゃ、あたしも出て行かないといけないじゃない！」

魔女が自分のことを指さす。しかし、2人の耳にも目にも入っていない。

「そんなことない！　だってヘオンは私のためにしてくれたのでしょう？　それならこの先もきっとそうだわ」

「ソナチネ様…そうではないんです！　そうでは！」

俯いて泣き出したかと思えば突然ヘオンは立ち上がった。
そのまま駆け出して、中庭を出て行こうとする。

「ヘオン！」

止めようとソナチネも駆け出すが、その目に恐ろしいものが映る。

ヘオンは前を見て走ってないらしく、出口に向っていない。

彼女が突進していく先には――大量に積まれた木箱。廃材らしく積み方が荒いせいで今にも崩れそうに見える。

「ヘオン！　危ない！」

ソナチネがヘオンの元へ駆け出した。引き戻そうと手を引こうとする。

が、一瞬間に合わず、ぶち当たったヘオンの衝撃で木箱が崩れてくる。

ソナチネは引こうとした手をとり、咄嗟に自分の体でヘオンを庇うように抱え込む。

目をつぶった。

が。

「ん？　あれ？」

傍観するばかりだったトオンは怖くて両手で手を覆っていたのだが、予想していたような衝撃音や悲鳴が聞こえない。

「ソナチネ様っ、ヘオンっ」

見ると、今にも2人に崩れ落ちんとしていた木箱は一つ残らず消えていた。衝撃に備えんと地面に蹲る彼女たちだけが視界に入る。

「やっだなあもう。あたしがいること忘れないでよ」

横には人差し指をふる炎獄の魔女。まさか名高い炎で一瞬にして木箱を燃やしたのか。

トオンは初めて横に立つ見た目美少女の魔女を怖いと思った。

「ピウ様…助かりました」

やっとソナチネが顔を上げる。腕にはまだ震えているヘオン。

苦笑しているソナチネに「かっこいい…！」と呟いてしまうトオンは、貴族の令嬢たちで結成された非公式組織『白銀の騎士様を愛でる会』の会員でもある。

侍女の行方（後書き）

ここまで読んで下さり感謝します。

魔女の説教

11. 魔女の説教

「本当に申し訳ございません…」

場所は変わって、近くの食堂のテーブルを借り切っている。丁度お昼時なのだが、4人の誰も食事を注文しない。それでは食堂の者が納得しないので、妙に用意のいいトオンが持っていた金貨を渡しておいた。

あの後、どういう魔術なのか木箱は元通り出てきた。綺麗に整頓されて。

あそこでは商会の迷惑なので、逃げようとするヘオンを捕まえて食堂へ連れて来たのだ。

「ソナチネ様を危険な目に合わせるなんて…！　やっぱり私はこのまま出て行くべきなのです」

もう王都も出て行きますっ、とヘオンは泣いていた。

「そんなに思い詰めないで…ピウ様のお陰で無事だったんだからいいじゃない」

「そういう問題ではありません！　私はもう侍女失格です」

「お願いだからあまり自分を責めないで…あんな風に積んでいた商会も悪いでしょう」

「はいはい、二人ともう少し落ち着く。ヘオン、気を鎮めなさい。己を失格する前に本分を思い出しなさい」

間に入るは炎獄の魔女。それなりに大人だ。

「はい…失礼いたしました」

「それでよろしい。しかしソナチネちゃんも悪い」

「え。私もですか？」

本気でわからず、素で聞き返す。

「当たり前ー。考えてもみなさい、もうすぐ女王となる身を自分から危険にさらしてどうする。何かあったらせっかく助けたヘオンちゃんが罰を受けるのよ？」

おわかり？と人指し指を回す。茶目っ気のある表情だが、言っていることは正しい。

「！　それは…考えてもみませんでした」

「ぶっぶー。減点1。もうちょっと自覚しないとね。キミに何かあれば周りの首が飛ぶことを忘れないこと」

「はい…責任を放棄するところでした」

「まあ騎士なら正しいんだけどね、そうじゃないってことをしっかり覚えておきなさい。トオンちゃんも、ああいう時は身を挺してソ

ナチネちゃんを止めなきゃだめよ」

「はい…」

トオンもシュンとしている。しばし沈黙が降りる。

と、沈黙を吹き飛ばすようにいきなり魔女が大きく伸びをした。

「あっあー！　柄じゃないんだよ。お説教なんて。肩が凝るっ」

重くなった空気が少し軽くなった。

「…ソナチネ様、お話いたしますわ。私が何を思ってあのようなことをしたのか」

落ち着いたのか、ヘオンが静かな表情で語りだした。己の―失恋を。

「――そういうわけで、陛下のためにできることは何でもするつもりで公爵邸に参りました。ですから…決してソナチネ様のことを思ってやったことではないのです。あのように強引な方法であなた様を追い詰めた罪は許されることではありません」

「…そうだっだの。知らなかったわ」

コトネ様にお仕えするのはつらかったでしょうね、と小さくこぼす。

「ソナチネちゃん、そこじゃないんじゃ？」

「？　何がでしょう」

「だーかーらー、『決してあなたのためではなかった』ってとこ」

さすがに呆れ気味の魔女が指摘する。

「ああ、そうですね。うーん、しかし私は本当に怒ってはいないんですよ。それなのにヘオンが自分を責め続けるのはつらいです」

「そんなもんなの？　ふうん、あたしだったら嵌めたヤツ黒こげにしないと気がすまないけどね」

敵に回したくない人物だ、とつくづくトオンは思う。

「戻って…もらえない？」

真剣にヘオンに問う。

「私にはヘオンが必要だわ。もしかしたら一人で国を治めることになるかもしれない…一人でも多くの味方がほしいの。見たでしょう？　私にはまだ不足があるのだわ。罪悪感があるなら、これからは私のために仕えて」

お願い、とヘオンの両手を自分のそれで取る。誠意と懇願に溢れた眼で見てくる。その顔は―凛々しい。早くも女王の威厳を得たのか。

と、何故か赤らんでくるヘオンの顔。トオンは羨ましそうに見ている。

「…聞き捨てならないこと言ってる上に、雰囲気が妖しいなあ。じゃ、話も纏まったみたいだし、帰ろっか」

魔女が強引に纏めにかかっている。ヘオンは肯いたわけではないのだが。

と、そこへ。

男の声がいきなり降ってくる。

「おい、あんたら。飯食うんじゃないならさっさと…」

横から突然入ってきた声は、再び唐突に途切れた。

それは引きの良さ、いや悪さを誇る彼だった。

＊　＊　＊

レジェロは自分がとんでもないところへ割り込んだことを悟った。

４対の目が丸くなって見返してくる。中でも蒼い目が問うた。

「…何やってるの」

「…飯食いに」

己の引きの悪さを心の底から呪いながら、うなるように言った。このあたりはお気に入りの食堂が軒を連ねている。お昼は王宮を出てそういった大衆食堂でとるのがレジェロの日課だ。そんなお気に入りの店で、昼時にも関わらずテーブルを一つ占拠し食事をするわけでもなくしゃべっている女性たちに声をかけたのが運の尽きだった。格好が普段と違うので正体に気がつかなかったのだ。

「そう…」

後が続かない。昨日の別れ際を思い出すと気まずい。とりあえず、ヘオンの手は開放する。

（まだ陛下には承知してもらってないし…。）

「なんだレジェロ。ゴハンに来たの？　ここはアンタのお気に入りか」

2人の微妙な空気を意に介さない魔女が勝手にしゃべり始める。侍女たちはなりゆきを見守るばかり。

「そういや、ソナチネちゃんはちゃんときいといた？　何であんな噂流したのか」

ひっどいよねえ若い女の子つかまえて脳筋だなんて、とそ知らぬ顔で火種を投げ込んでくる。

「そういえば、理由、きいてませんね」

横目で見る。レジェロも少々焦った。

「！　それはもういいだろ！　じゃ、俺は行く」

雲行きが怪しくなったことを悟ったレジェロは長居は無用とばかりに背を向けるが、火種を投げ込んだ声がそれを許さない。

「こら、待ちなさい。言わないとタッカートの一の術で呪うよ」

途端に背中が止まる。タッカートの術とやらはそれほど恐ろしいのか。知りたくない。

「～～今は言えません！　ここでは！」

「へえ、じゃ、ここじゃないところで話してもらおうじゃない。へオン、トオン、そいつ捕まえて」

素直に「はい」と侍女ふたりはレジェロの両腕をとる。何気に両手に花。

「じゃ、場所変えて追求追及、と」

非常に楽しそうだ。鼻歌まで歌っている。

魔女の説教（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

子供の遊び　そのに

12.　子供の遊び　　そのに

「ねー、どうお？　かんたんでしょ？」

高い子供の声が上から降ってくる。

子供―ソナチネは木の上から下にいるレジェロを見下ろしていた。どちらもまだ幼い。

庭園の出会いから数ヶ月たった。未だに王子たちの仲間に入れない2人だがこちらはこちらですっかり打ち解けている。王宮に挙がるのは数日に一回、また親や家の都合もあるので同じ日に王宮にいるとは限らないのだがそれでも仲良く過ごしてきた。

その間、ここでソナチネはのびのびと遊んでいる。家では母や父が良い顔をしないのであまり外へは出してもらえないのだが、ここは注意する大人がいないので自由にできる。

例えば木登りなど。

「危ないよ！　早く降りなよ！」

レジェロの方では気が気ではない。確かにその小さな体でするすると簡単に登って行ったのを見ていたのだが、手を滑らせて落ちたらどうしようと慌てている。

「えー、レッジも来てよ。いっしょにここからお城を見ようよ」

こちらの心配など少しも気に掛けずに言ってくれる。レジェロに妹はいないが、もしいたら妹とはこんなに手に負えない存在なのか。

「ネネっ、頼むから降りて来て！」

焦った声に「しょうがないなあ」と大人の真似をして肩をすくめたソナチネはようやく降りる態勢に入る。

その様子もはらはらしながら見守っていたが、危なげなく少女は地面に両足をついた。本当に―やんちゃだ。

「そんなむずかしくないでしょ。もー、レッジのいくじなし」

そんなことはない。６歳児であるその腕も足も木登りをするには短すぎるし、手だって自分の体重を支えるだけの握力は満足にないはずだ。普通なら。

「誰もネネみたいにはうまく登れないよ…」

少なくとも自分には無理だ。

「そうだ！　わたしがここから教えてあげるから、レッジものぼれば？」

とても良いことを思いついた、という顔で手を叩くソナチネ。

「下からね、次どこつかめばいいか教えてあげる。あしも。どう？」

そしたらレッジにもできるでしょ、と嬉しそうに言い出す。いつも

教えられるばかりなので、逆に自分が彼に教えることがあるのが嬉しいのだろう。

「そんなの無理だよ…」

怖いし、とは言えない。

「もー。…じゃあね、こんなのはどう？」

そう言った少女は突然レジェロに近づいてくる。うろたえる7歳児。何をするのか、と思ったら彼女は耳元へ口を寄せて内緒話の体勢に入る。

「あのね…のぼれたら、およめさんになってあげる！」

結果的にレジェロはその日生まれて初めて木に登った。下から年少の少女が出す指示に従って。確かに的確に教えてくれるのだが、いかんせん身体能力が違う。（レジェロの方が体は若干大きいのだが。）「そこで飛び上がって」とか「思い切って手をはなして」とか、そう簡単に実行できないことも要求される。

ソナチネの１０倍ぐらいの時間をかけて登り切った。腕も足も疲れていて、枝で切ったところや堅い木の肌を掴み続けた手は痛い。

でも。

「うわあ…」

木の上からの景色は…素晴らしかった。いつも見る庭や建物が違って見える。ブリッランテ宮は一階建てだが建物の高さ自体は大きい

ので見下ろせるわけではないのだが、それでも見えるものは全然違う。屋根があんなに近い。庭も全体像が見渡せそうなぐらいだ。

「ねー！　いいでしょう！」

下から叫ぶ声が聞こえる。

「うん…」

景色に見入った少年の返答は上の空。

ソナチネの言うとおりだった。木登りは楽しい。やっと景色から目を外したレジェロは下に声をかける。

「ありがとう！　楽しいよ！」

「うん！　よかったあ」

自分の方こそ心底嬉しそうに顔いっぱいで笑うソナチネ。遠いはずのその顔は何故かよく見えた。楽しそうな少女の笑みに、これまで感じたことのない動悸が胸に起こる。

が、次の瞬間。

地面が、地面からのその距離が異常に遠いことを知る。下を向いた途端、夢中になっていて忘れていた恐怖がレジェロを襲う。どっと汗が出た。

（どうしよう…遠い。）

恐怖で凍りつく少年。ここからまた―降りるのか。自然、枝を掴む

手に力が篭る。

さらに追い討ちがかかる。

「ネネー、帰るわよー」

少女を呼ぶ声がした。その途端。

「はあい、おねえさま。すぐ行きますー」

え。行っちゃうの。

そんな言葉をかける前にソナチネはさっさと駆け出していった。「おんなじようにおりたらいいからね」という簡潔かつ無責任な台詞を放って。

その後、夕方になってようやく木の上で泣いているところを大人に発見され、降ろしてもらうことができた。その夜は疲れと恐怖で熱を出すことになった。

その日以降、突然王子たちの態度が変わり、ソナチネはそちらの仲間に入ることとなった。どうやら遊び友達の一人が、彼女が木に登るところだけを見ていたらしい。「あの女の子はすごい」と木登りの達人として晴れて王子の友達となったわけだ。

レジェロの方は体調を崩したせいでしばらく王宮には上がれず、久しぶりに行った時には王子たちと碌でもないいたずらをして回るソナチネを呆然と見るはめになった。

子供の遊び　そのに（後書き）

6歳でも7歳でも木登りは早い気がします。

ここまで読んで下さり感謝します。

婚約者（仮）の理由

13．婚約者（仮）の理由

魔女の先導で食堂から変えた「場所」とは王宮内、ブリッランテ宮の一室。戻ったとき、午前中即位式の説明をしてくれた神官が泣いていたような気がしたが、気のせいと思っておいた。

どうにかヘオンも王宮に連れ帰ることに成功したソナチネは、レジェロと2人で向き合う。他の3人は彼がどうしても同席を嫌がった。

「――――で。私はその6歳の時の仕返しとして醜聞をたてられたの？」

そういえばそんなこともあったか。忘れていたが。

ジロリとレジェロを睨む。

「別にそういう意味で言ったんじゃない。そんなこともあったっていう思い出話だ」

「私は理由をきいたんだけど？」

「…言い訳に聞こえるんだろうが。別に俺は触れ回ったわけじゃないぞ」

そう、レジェロは「コン・フォーコ家の次女は頭が悪い。脳みそは筋肉、その上腹筋は6つに割れている」と直接言い放ったのではない。

４年前、ようやく周囲との折り合いをつけ貴族の同世代の青年たちとも付き合えるようになった。友人と呼んでいた彼らはあまり上等な人間とは言えない。貴族の次男・三男以降というのは武人か学者、官吏を目指す才覚がなければどこかの家付き娘を射止めるしか自活の道がない。

そういう連中から見ると、ソナチネというのは非常に魅力的に映るらしい。公爵位を継ぐ甥がいるが、それでも相当な持参金がつくだろう、と。本人は騎士になる道を邁進していたのだが。

彼らにソナチネの人となりについてきかれた時、つい、言ってしまったのだ。

「頭が悪い上に、鍛えてばっかの筋肉バカだ」と。それがどういうわけか、形を変えて噂になったのだ。

「ちょっと待って。流れた噂とあなたの言葉は大差ないわ」

「かもな。でもこっちは事実だろ」

「〜〜」

「な、嫌だろ、俺なんて。さっさと陛下を説得しろ」

レジェロはそこまで説明する気は死んでもないが、先ほどの思い出話と噂の発端となった言葉は微妙につながっている。

先日、再会するまでは最後にソナチネと話をしたのは６年前の国王・アレグロの即位式に参列した時だった。そこで彼女は満面の笑みで言った。

「婚約おめでとう」と。

その言葉に愕然とした時、初めてわかった。自分が愚かにも6歳児の言うことを真に受けて、いつかソナチネが「およめさん」となってくれることを心のどこかで期待していたのだと。公爵家の姫君を望める立場ではないことはとうにわかっていたのに。（と、彼は考えるが、それほど難しいことでもなかった。ソナチネが騎士団に入った時点で、両親とも彼女に政略結婚をさせることを半ば諦めている。）

確かにさる男爵家の令嬢との間にそういう話は持ち上がっていた。家同士の結びつきだけの話で直接会ったことは一度もない。話もいつしか立ち消えた。

その話が回りまわってソナチネの耳に入り、おめでとう発言につながったのはわかる。わかるのだが…。

（少しも覚えてないんだろうなあ…。）

自覚すらしていなかった初恋が終わったとき、彼女のことも諦めた。いや、自覚する前から無意識に諦めていたのだろう。こんな事態にならなければ、思い出す必要もなかったのに。

そんなこともあり、素行のよろしくない連中だとわかっている相手からの質問に悪く答えた。あまり彼女には近づけたくない輩だった。

そんなこととは夢にも思わない現在のソナチネは、ナナメ上の答えを出す。難しい顔できいてくる。

「その…婚約者だったとの方との間に話は進みそうなの？」

「あ？　なんで？」

さる男爵家の令嬢のことなのだろうが、結局一度も会わなかった相手だ。名前すらでてこない。

「だって…想い人がいるんでなきゃ、どうしてそんなに嫌がるの？
まさか」

さっと青褪める。

「いや、違う、決してお前がどうこうという問題じゃ」

「え？　私はセンツァ様のことを思い出して…。って私が嫌いだからなの！？」

本気で悲しげな顔になってしまったソナチネを見て大いに慌てる。聞き捨てならない名前が出てきたが、とりあえず、触れない。

「～そういうことじゃない！　お前に問題はない…俺の方なんだ」

「どういうこと？」

ごまかし切れない状況を悟った彼は観念した。深くため息をついて額に手を当てる。何だかんだ言っても…やはりソナチネには弱い。言わずにこのまま結婚までいかされては、もっと彼女を傷つけることになる。

「俺は、お前に…子供を与えてやれないと思う」

「？　それってどういう…！」

訝しげな顔の後、バツの悪そうな表情を浮かべ、その後すぐに今度は心底気の毒そうな顔になった。何を考えているのか、手に取るようにわかる。男の体に無知というわけでもないのだろう。

「あのな、お前が今考えたのとは違うぞ」

そう言うと、ソナチネは真っ赤になって俯いた。いい年の、女騎士を前にしているというのにそんなところも可愛いとか思ってしまう自分は相当、末期だ。しかしそれは表に出さない。

「子供ができなければ、夫の意味もない…それなら最初から他を当たればいい」

わざと無感動に言う。自分だって平気でこんなことを彼女に話しているのではない。

「…でも、私だって子供が生めるという証はないわ。子供がいなければいないで、ラルを引っ張り出せばいいじゃない。姉上のところにだっているわ」

俯いたままのソナチネが語り出す。

「夫となる人にそんなことを望んでいるんじゃない…私を支えて欲しいだけよ。それなら、私の信じる人がいい」

顔を上げる。強く、決意を固めて。

「あなたなら…私をうまく導いてくれる。そう信じられるのはレジェロだけだわ」

そう言って深い蒼の瞳の放つ光が、こちらを射抜く。強い意志に絡めとられる。

（なんつー殺し文句…）

結局、自分は彼女には極端に弱いのだ。逃げられないことを悟った。

この時、やっと（仮）マークが外れたのだった。

＊　＊　＊

「そういえば、噂の件はもういいのか？」

許してくれるのか、言外に問う。

「ああ、そのこと。そうね、言いたいことが一つだけあるわ」

「なんだ？」

「歯、食いしばって」

婚約者（仮）の理由（後書き）

グーでしょうかパーでしょうか。

ここまで読んで下さり、感謝します。

女王陛下（未）の結婚（前書き）

ここで第二部終了です。
第一部の終了後からの話です。

女王陛下（未）の結婚

14．女王陛下（未）の結婚

アレグロとの最後の別れを終えたソナチネは一人、王宮の廊下を歩く。

かつて、兄代わりに慕った人はもう行ってしまったのだ。これが己の道なのだと固く信じて。

もう、頼れる人はいない。

これからは自分が、国を、民を守っていかなければならない。

（私は誰にも期待されない子供だった…）

幼い頃、大人の関心は姉にばかり集まって、ソナチネはいつでも「ついで」扱いだった。誰の関心も引けず、いらない子なのだと思った時もあった。

それが今や、国中の期待と希望を背負う存在となろうとしている。

その重さに―震える。震えながらも、不敵に笑ってみせる。

（虚勢でもなんでもいい…見ている誰にも不安なんて抱かせるもんですか）

この後の即位式に向け拳を固めて己を鼓舞するソナチネに、声がかかる。

「ソナチネ、どこへ行くの」

「へ？　ええっと、次はどこへ行けばいいんでしたっけ」

目立ち始めたお腹を抱えた姉が探しに来た。申し訳ないことをしている。

「全く…控え室に戻りなさい。花嫁が何をやっているの」

花嫁。その言葉に硬直する。

そういえば、と自分のいでたちを見下ろす。

きらびやかな重い衣装も、嵌めた手袋も装飾品も全て白か白を基調としている。頭に手をやると髪飾りや付け毛で短い髪が綺麗に結い上げられている。

「もうそろそろ、式が始まるわ。ベールをつけないと」

王室の結婚式は神殿ではなく、王宮内にある小さな祭壇のある礼拝堂で行われる。そこで今日は即位式の前に結婚式を挙げるため王宮に留まり、先ほどまで姉とともに控え室で待っていたのだった。気分はすっかり、即位式を待っているつもりだったのに。

（しまった…忘れるところだった）

ともすれば、このまま神殿へ愛馬に乗って即位のために乗り込むところだった。

「ネネ！　突っ立ってないで、早くなさいってば」

おお、姉が本気で怒っているときの声だ。急がねば。

＊　＊　＊

「病めるときも、健やかなるときも…」

お決まりの聖句が神官によって唱えられる。
厳かな雰囲気の中、粛々と結婚式が執り行われている。祭壇の前に並ぶは若い男女、どちらも神妙に神官の言葉に聞き入っているかのように見える。

（一年半前は姉上がやってたなあ…）

隣にいたのは魔王様だ。ソプラノはその美しさのまさに頂点のように輝いていた。義兄は花婿というより、略奪しに来た者に見えた。

（それがこんなに早く私が同じことをねえ…）

なんとなく一生独身かなあ、と漠然と思っていた。

ほぼ上の空のソナチネだが、それには理由がある。どういう手違いか頭に被ったベールが妙に厚くて、周りがほとんど見えないのだ。それは同時に周りからも見えないということになる。音までかなり遮断され、それをいいことに聖句をほとんどきいていない。

辛うじて歩くぐらいはできたのだが、祭壇まで来るのは一苦労だった。義兄が手を引いてくれるのでなければ明後日の方向へ行っただろう。入場した花嫁がいきなり花婿から逃げたら、目も当てられない。

チラリと、隣にいるはずの花婿へ目を向ける。輪郭しかわからないが、彼のはずだ。たぶん。

（なんだか、どさくさ紛れに肯かせた気がしないでも…）

あの後アレグロに報告しに行くと、妙に暖かい笑顔で祝福してくれた。なんだかよくわからない。

と、そこへ。

「はい！？」

いらぬことを考えていたら、式はいつの間にか進行していたらしい。なんだか周りが無言になり、強い視線を感じるので思わず返事をすると、そのまま神官は言葉を続けた。

「…ではこの誓いをもって二人の夫婦の契りとする。」

（って、えええええ！　今の誓いの言葉だ！　どうしよう、もうちょっと大人っぽくて静かな声でいこうと思ってたのに！）

やり直せないかな。無理か。

「では、夫婦の証のくちづけを」

どこか疲れた声の神官が、言った。

その言葉を合図に、ベールが持ち上げられる。

（くちづけ。）

弛緩しきって忘れていた緊張が一気に蘇る。
レジェロとは子供の頃に手を繋いだぐらいの触れ合いしかしたことないのに。

一方、奇妙に分厚い花嫁のベールを上げた花婿は、その下にある姿に一瞬たじろぐ。この一ヶ月美白に励んだにもかかわらず、そうそう日に焼けた肌は白くはなってくれない。やっと健康的な色にまで落ち着いた花嫁の顔は—真っ赤だった。ついでに気になる一点も。
酔っ払いかと思うほど赤い顔に正直、引く。

顔を赤くしたまま、目を閉じてくれない彼女をちょっとだけもて余しながらもふっと笑う。
花嫁の頬に自分のそれを当てて、囁く。

「何があっても支えてやるから…心配すんな。それから、手でこすっただろ、口紅が鼻にまでついてるぞ」

そんな2人の物語である。

女王陛下（未）の結婚（後書き）

ここまでお付き合いくださったことに感謝いたします。
ステレオタイプな登場人物たちがベタな行動をする話で、先が読めてしまうのではと恐縮です。

伏線回収のための続きでさらに伏線を増やしたので第三部に続きます。
再び書き終わってから投稿させていただきます。

ありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5445z/

消えた王妃と白銀の騎士

2011年12月27日23時59分発行